

---

# パドックのこちら側

志内炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パドックのこちら側

### 【Nコード】

N3587D

### 【作者名】

志内炎

### 【あらすじ】

主に中央競馬に関するエッセイです。一年間にわたり、執筆していきたいと思っています。時として、レースの予想なども組み込まれることもあるかと思いますが、穴党のため、結果については何の保証もいたしません。そしてエッセイに過ぎないので、予想はずれの苦情も受け付けません。お暇な方はお付き合いください。

## プロローグ（前書き）

競馬観戦には年齢制限はありませんが、未成年の勝馬投票券購入は、法律で禁止されています。

## プロローグ

私の競馬好きは、同僚、ならびにお客様、お友達にも知られていくことである。

毎週、競馬新聞を買い、ネットを使い情報を集め、馬券を買ってはJRAに貯金している。俗に言う『九・一馬券』の大荒れに荒れた有馬記念では、ゴール前の人ごみの中で、ターフビジョンも見えずもみくちやになっていたし、デイリーインパクトが三冠馬になる瞬間には、京都競馬場のスタンドで半泣きになっていた。阪神競馬場は、初めて行った競馬場だし、現在の住まいは東京競馬場から電車かバスと徒歩で四十分程度のところだ。

にもかかわらず、昨年競馬場に脚を運んだのは、わずかに二回。第一回ジョッキーマスターズと、ウオツカの回避してしまったエリザベス女王杯の日の府中のみ。なんという体たらくなのだろう。できることならば、競馬場に行きたい。GIのすべてを現場で見たい。

それはすべての競馬ファンの夢だろうと思う。

だが、現実には厳しい。

仕事があったり、家庭があったり。旅費がなかったり、体力がなかったり。

それでも、馬券を買い続け、テレビの中継だとしても、または夜中のダイジェストだとしても、レースを見続ける。

初めて競馬場に行き、パドックで見た競走馬の美しさに感嘆の声をあげ、おっさんたちにいつせいに、

「しっ！」

とたしなめられてから、約十四年の月日がたった。競馬から離れていた時期もある。土日の競馬場以外、外出しなかった時期もある。そんな人生を振り返るとともに、今年一年、エッセイを書き綴ってみたいと思う。

お暇な方はぜひ、お付き合ってください。

## ゼッケンが好きか

「あなたが好きなのは、ゼッケンでしょう」といわれたことがある。要するに『ギャンブルが好きだけで、競馬が好きなのではない』ということだ。

たしかに、ギャンブルは嫌いではない。ほんの一時ではあるが、大昔、バイトもろくにせず、スロットばかりやっていた時期もあるが、ほんの一時のことだ。今もパチンコはたまにやるが、新しい台が出て見学に行くとか、待ち合わせの時間つぶしであるとか、そんなところだ。

馬券にしろ、当たればそれはうれしい。最近の仕事の都合上、なかなか競馬場に脚を運べないから、もっぱらネットで馬券を買う。便利なもので年間の収支が一目でわかるようになっていて、現在の『貯蓄残高』から始まり、回収率、的中率、どの開催に勝っているか、どの騎手にどれくらい投資していて、どの騎手が私の財布を潤してくれているのかまで一目瞭然となる。そういう数字は大好きなので、結果はとも気になるし、できればプラスにして眺めてにやにやしていたい。

だが、それは結果に過ぎない。予想している過程や、レースを見ていることのほうがはるかに重要なのだ。

もちろん、勝つ馬を予想する。どんな形状の競馬場で、どの馬がどんな脚質で、どんなレースの流れになって、どの騎手の腕が一番さえわたるか。馬券を取れるということは、その読みがうまく行っただけに過ぎない。

ある日、競馬場に着くと、パドックを新馬たちが回っていた。新馬とはいえ、最近ではみんなかなり作りこまれてから本番にやってくる。一番人気になっていた栗毛の馬も、とても初レースとは思えないほど雄大な馬体を誇示するかのようになり、ゆったりと歩いていたが、私の目を引いたのはその馬ではなかった。

他の馬たちに比べて、一回り小さい『彼』は、真つ黒な馬体でちよこちよこと歩いていた。パドックをできるだけ小さく使おうとしているかのように、うちへうちへと入りたがる。そして私の目の前で、必ず横つ飛びするのだ。

そこには建物の影ができていて、それに驚いてぴよこりと飛び跳ねる。一度ではなく、毎回だ。

(このこ、大丈夫かな……)

ゲートは結構大きな音を立てて開く。新馬戦で、グレードレースとは比べものにはならないとはいえ、ゴール前の歓声は馬にとつてはかなり大きなものだ。こんなにたくさんの人間を見るのも、初めてのことだろう。びっくりしすぎて逃亡したりしないだろうか。怖くて暴れて怪我をしたりしないだろうか。

私は、予想した馬券の他に、『彼』の複勝馬券を買って、レースを見つめた。ゲートが開き、『彼』はなんとか前へ飛び出していった。

結果は、九頭立ての九着。前の馬からは九馬身遅れてゴール板の前を走りぬけて行った。

(戻ってこれた。よかった、よかった)

予想していた馬券がはずれたくやしきよりも、『彼』が無事帰ってきた安堵感のほうが、はるかに大きかった。

夢とロマンが語れなければ、競馬ファンではないというファンの人もいるが、公に金を賭けられる以上、『ゼツケンが好き』でも一向に構わないと思う。よく、売れたバンドマンが、

「バンドをはじめたきっかけは？」と聞かれて、

「もてたかったから」と答えるように、夢やロマンなんて後からついてくるものではないのだろうか。

『ゼツケンが好き』なレースもあれば、『負けを承知でもこの馬券を買いたい』レースもある。どちらにしる、私は競馬が好きなのだ。

ちなみに、あの日びりで戻ってきた『彼』は芝だった新馬戦から、二走目はダートへ変わった。体重も少し増え、三着に入線した。勝

馬からはやはり九馬身離れてはいたが。一日も早く、未勝利戦を勝ち上がり、走り続けられる権利を得て欲しいと願う。

## 金杯で乾杯

年はじめは金杯から……

なんていうが、記憶する限り、金杯でいい思いなどしたことはない。

「いったい今年はいくら貢ぐことになるんだろう」

と不安にさせるような成績ばかりだ。年末年始は忙しく、予想に力がいられないから、なんていいわけも、この三年は通用しない。年末年始、しっかりお休みのある職場にいるからだ。

一生懸命、しかもがちり予想したレースが、さらに年始で『今年を占う』だの『お年玉をゲットしよう』だのサブタイトルがついての負けはかなりへこむ。それでも必ず参加してしまう。そして目も当てられない借金からのスタートが切られる。そして、

「みんなの年はじめは金杯からでも、私の年初めは東京開催からだ。うん」

などと、すでにまるまる一ヶ月負けてから言い訳を始めるのが常となる。

そういえば、昨年中山金杯を制したのは、年男の田中勝春騎手だったな、と思い、今年の年男を調べる。ちなみに私も年女である。京都の金杯には四位騎手、河北騎手。あれ？藤田騎手も同じ年か……：そういえば、今日見た夢には、十年も前に付き合っていた同じ年のカレシが出てきたな……：そうそう、安藤勝己騎手も一回り上なんだよね、なんて思いながら出馬表を眺める。

中山には江田照男騎手だけか。これは大穴かなあ……ん？待てよ。そうなんです。安藤勝己騎手が一回り上のように、一回り下もいるはず。調べてみると、これが八人もいる。中には去年GIジョッキーになった松岡騎手も……

私が小学校六年生のときに生まれた坊ちゃんたちが、気がつけば成人式も終え、第一線で活躍するジョッキーになっている。毎年、

毎年書初めに、

『お掃除頑張る』なんて書いている自分が恥ずかしくなる。はあ、なんだかなあ……

そんな私の哀愁には関係なく、時はたち、また朝がやってくる。哀愁なんて感じてはいられない。ほおつとしていた間に、一年のうち五日も過ぎてしまう。今年こそ、金杯を年初めにしなくては。

それにしても、結構年配の馬たちが金杯に登録しているものだ。一番若い馬が生まれる年の金杯で、一番年寄りのアサカデイフィートは勝馬となっている。そのときにはまだ三頭の馬が、この世には生れ落ちていなかった。

彼はそれから毎年、金杯に参戦し、翌年は五着と連をはずしたものの、後二年は二回とも二着になっている。現在の成績は六十四戦十勝二着、三着ともに七回ずつ。無事これ名馬に余りある成績だ。

それに比べて、私は……なんて本当は、仕事始めでもうちよつとのんびりしたい病の症状であるに過ぎない。さて、今年もなんとか楽しい競馬の時間を過ごせるように、頑張らましようか。

そして、今年の金杯、彼は五回目の参戦となる。あ、そういえば、私の勝負レースは金杯のひとつ前で、その軸馬も十歳だ。

うーん、まだまだ若い人には負けてられません。

## 数字の魔力

数字のマジックというのか。

昨日のうちによく検討しておいたレース。間近になってみると単勝のオッズが二十倍を超えている。

「えっ！」

テレビでは私よりもはるかに競馬暦の長い面々がさもありませんと予想を並べているが、一切、その馬の名前は出てこない。

そうだよな。前走、今回よりも軽い斤量で負けている。年齢も九歳。買目はないかも。私は何でこの馬にしるしをつけているんだろう。……メジロライアン産駒、これか。

一番信用できそうな予想に乗って、自分の予想を捨てて馬券を買う。見事一着で帰ってきたのは、昨日の予想の馬だった。

前走は振るわなかったものの、その前のレースでは今日よりも重い斤量で二着。コースでの持ち時計も前のものとはいえ、三番目の成績。そのときの斤量は今日と同じ。昨日あんなに真剣に考えて出した答えだったのに、なぜ、予想を変えてしまったのか……

これはオッズに負けた典型的な例である。

いつだったか。多分〇三年の安田記念だと思う。四位騎手の不満げな表情が印象に残る。掲示板を見たときか、関係者から聞かされたときか。単勝が四番人気だということを知ったときだった。

確かに。前走は地方交流戦で四着だったものの、アグネスデジタルは中央、地方、海外合わせてGⅠ五勝をあげていた。二番、三番人気の馬のGⅠ勝ち鞍は一つずつ。一番人気の馬にいたってはまだGⅠの勝ち鞍はなかった。結果はどうどの一着。

三年前の今頃。競馬新聞だったろうか。『かたい決着のレース』というような文字を目にした。むくむくと反抗心がわきあがる。

「そんなことあるか。オッズは人間が決めてるもんだ」

私は上位人気から七頭、下位人気から五頭選んだ組み合わせで馬

連を買い、見事的中した。三番人気と最下位人気の組み合わせだった。

そう、オッズは人間が決めるものだ。みんな、それぞれに研究し、予想し、結論を出して馬券を買った結果がオッズに現れるのだから、全くあてにならないことはないと思う。大きなレースの場合、馬主さんなどの関係者は、当日忙しいため、前日の前売りで単勝馬券をこっそり買う。競馬専門紙などの予想より、はるかにオッズが低い場合は勝負気配と読んだりすることもある。

しかし、結果に即結びつくかといえば、違う。どこかで何かを多くの人が何かを読み間違えて、とてつもない払戻しになったりする。だからオッズは『みんなが勝つと思っっている』度なだけで、『どの馬が強いか』度とは必ずしも合致しない。『予想を左右させる重大なファクター』にしてはいけない。

とは思いつつ、三番人気と最下位人気も、ようするにオッズ買いだったりするし、昨日のレースでは、本命対抗で予想が当たっていたにもかかわらず、馬券が取れていない。欲を出して、三連単で勝負などをしたものだから、三着の馬を読みきれずに外した。これも「三連単なら万馬券だ！」という、あさはかな自分に負けたのだ。『ゼッケン好き』といわれなかったためにも、今年は初心にかえり、数字の魔力に負けない予想を心がけたい。来週は、番組編成で最後となってしまうガーネットステークスでも見にいこうかと思う。今までの最高配当を当てたレースだし。

あ、これも数字の魔力がらみか。

## ファンファーレ

昨日、さんざんカニを食べるテレビ番組を見てしまい、どうしてもカニが食べたくなかった。しかも昨日は給料日の上、何気なく入ったパチンコ屋で三万円近く、勝った。母と娘を連れて、駅前のちよつとお高くて、座敷もある回転寿司屋へ行く。

焼きタラバガニよりカニ汁の方がカニを満喫したような気になりながらの帰り道、ファンファーレの話になった。

「東京のG Iのファンファーレって、絶対に途中からスターウォーズにつながっているよね」

娘がいう。そういえばこやつ、パークウインズでひたすら中京のファンファーレを口ずさんでいることがあった。五年ほど前だから、まだ小学校三、四年生の頃だ。

そのファンファーレを思い出そうとするが、出てこない。家までの五分ほどの道のりで考えつくしたが、頭の中はスターウォーズで満たされてしまっている。結局思い出せず、携帯の着メロで探し出した。が、G Iではない。重賞でもない。結局特別のファンファーレだと判明した。

なぜ、中京小倉の特別ファンファーレを口ずさんでいたのか、全くわからない。そのときにはどちらでも開催はしていなかったはずだ。

娘はブルーリッジリバーの大ファンだった。テレビで桜花賞のレースを見て、

「可愛い」と言った。可愛いか？ オトコ馬みたいだぞ、と思いつつも、レースに出るたび、単勝馬券を買いに行った。今でも、小さな紙の引き出しの中に、時間がたって黄色くなった馬券がしまわれている。

「東京にきたら応援しに行こう」

と約束していたが、古馬になってからは東京で走ることなく、引

退が決まったことを告げたときには、今にも泣きそうな顔をしていたことが忘れられない。半分無理矢理、親の趣味で騎手学校を受けさせるときのくどき文句の中にも、

「今からなら、ブルーリッジリバーの子供に乗ることもできるかもよ」と、名前を挙げた。

「別に子供はどっちでもいい」と言っていたが、まんざらでもないようだった。

残念ながら、初仔のグランマモーゼスは未勝利のまま引退してしまい、騎手学校も見事に落っこちた。今では競馬にあまり興味がないうような顔をしているが、ファンファーレをもう一度聞かせろ、と言ってきた。

「これ、覚えてたらかつこよくない？」「これ？ ああ、中京』みたいいな？」

などと言っている。ディープ人気と府中から近い土地柄か、学校でも競馬の話は結構でるらしい。

実は娘の競馬歴は、私と同じである。競馬場デビューは、一歳一ヶ月の時の仁川。十一歳の誕生日にも仁川にいて、二人してパドックでベストアルバムにまたがる渡辺騎手の背中を見て、

「女の子みたいだね」と話していた。中学に上がったからは、あんまり付き合ってくれないが、それまではよく東京競馬場にやってきた。バスに乗ることとアイスクリームが目当てではあるが、私が馬券をはずし、苦悩していると、

「馬券はやっぱり複勝だよ」

などと生意気なことをいう。『武豊』はなぜか呼び捨てだが『岡部幸雄』は『岡部さん』であり、『茶色い馬』より『黒い馬』というカテゴリーを持ち、東京競馬場内馬場にあるバイキンマンの石像をいつかは探し出す、という野望を持っている競馬ファンである。

今度中山に行くお誘いも、最初は渋っていたが、

「中山行けば後は、京都で大きいところは制覇だね」というと、ちよっと考えて当日決めるとの返事が帰ってきた。馬券歴はまだない

が、これだけ毎週末競馬にテレビを占拠されていれば、必ず買い始めるだろう。そしてそのうち、

「牧場、連れてけ」とか、

「フランス、連れてけ」とか言い出すのではないか。ちょっと、恐怖である。

しかし、中山は遠い。私は神戸で二十二歳まで過ごしたので、淀や仁川のほうが近い気がする。一種の旅行である。いや、出不精の私にとっては東京駅より向こう側は冒険に値する。しかも過去四回の府中以外の競馬場での成績は、ひどいものだ。今回もうなだれて、長い道のりを帰ってくることになるのか……せめて帰り道の話し相手が欲しい。

さて最後のガーネットステークス。パラダイスクリーク産駒のアンバージャック、もうすぐ中央ジョッキーの内田博幸騎手、『一皮向けたか、弟よ』馬券でいこうかな。現在、私の競馬史の中で、最高払戻を記録しているレースだ。現場で参加したいし、できれば有終を飾りたい。

なににせよ、今週のテーマは『欲はかかない』。先週の反省をふまえて、馬連勝負で……いや、でも百万馬券も、買わなきゃ当たらないんだよなあ……ああ

「なんで複勝にしなかったのよ！」

って娘の声がああファンファーレとともに頭の中をまわっている

……

## いざ中山・前編

中山は遠い。

朝十時に用意を始めて、電車に乗ったのは、十一時を回っていた。「帰りに洋服でも買いに行こうかな」

というえさで、やっと同行を決断した娘を待っていたからである。さて、どのルートで行こうか。どのルートで行っても大体、所要時間は同じである。東京都を横断する中央線を使うか、はたまた埼玉を横切り、千葉へと向かう武蔵野線を使うか……

結局、乗換えが多いのはいやだ、という娘の意見を採用し、武蔵野線を使うことにした。

この電車、ギャンブル線との異名を持つ。東京の方の端っこには府中競馬場、千葉の方に行けば中山競馬場と、競馬場をつなぐ列車だから。そしてこの電車は非常に揺れる。もともとは貨物線だったこともあるだろう。

「ロデオボーイみたいだね」と笑いながら、ここは東京か、埼玉かとはなしていた。そして、埼玉に入って半分くらい過ぎたところだ。

「強風のため、徐行運転をいたします」

そうだ。忘れていた。武蔵野線は天候に弱い。すぐに徐行運転をして遅れる。止まることもしばしばである。中央線は飛込みが多く、そのために止まることがあるので天気予報を注意深く見ていれば、予想ができる武蔵野線のほうがまだよいか。

一駅の間を、ロデオボーイからモノレールのように切り替わった運転で、八分も遅れる。駅間も長い。そして電車代は約九百円と、これまた結構な金額となる。

さて、船橋法典の駅に着き、地下道を、ためしに動く歩道に乗ってみたりして感触の悪さにもう乗るのはやめようと決意しながら歩き、私たちが始めに入ったのは、ターフィーショップだった。

私の家の鍵には、阪神競馬場のキーホルダーと京都競馬場の根付がつけてある。阪神のは、横長の小さな鉄のもので、緑色の下地に黄色い文字で『HANSHIN RACE COURSE』と、阪神競馬場のロゴマークがついている。センスがよろしい。京都のは、小さな縦長の四角で、プラスチックでできた二枚の板の間に、京都らしい和風の布地が挟まっており、『京都競馬場』と縦書きに書いてある。こちらもすこぶるセンスがよろしい。

そういった限定ものを探して、ショップに入ったが、あったのは、ネックストラップで私のめがねにはかなわなかった。ちなみに東京競馬場の限定のキーホルダーも、ちよつと大きくてコースがプリントしてあるもののだが、もっていない。各競馬場の名前の入ったターフィー人形のキーホルダーもあったのだが、全馬場のものがいっせいに吊り下げられていて、購買意欲を失ってしまった。

結局冷やかに終わって、向かいに出ていたGI焼き（今川焼き）屋で一つずつ買い、あんこが多いだの、外の皮がおいしいのにだの文句を言いながら競馬場に着いた。

回数券の入場券をかい、中に入る。事前にネットで場内の位置については簡単に見てあったが、思っていたよりも狭い。コースのそばまで出てみて、思った。

「ちっちゃいね。阪神みたい」

「そう？ 阪神はもう覚えてないよ。寒い。おなかすいた」

そばを食べようという話になって、レストラン街を探したが、勝手知ったる府中とは違い、さんざん迷った挙句に、そばからラーメンへとメニューの変更を余儀なくされた。狭いのは狭いのだが。

東京と中山の雰囲気はだいぶ違う。中山は関西の競馬場に似ている。というか、東京だけが違うのか。

東京はレジャーの色が濃い。家族連れも、カップルもたくさんいる。年齢不詳の深々と帽子をかぶった女と、多分小学生くらいに見える娘との二人連れでうろろろしていても、違和感はない。レースが始まり、ゴール前なんかでは、怒号が飛び交うにはかわりはない

が、どうにも賭博場の雰囲気にかける。

その点、中山にはまだその雰囲気が残っていて、観戦をメインとしていた当日には、なんだかもうしわけない気分になってしまった。

だが、今日の目的は『最後のガーンネットステークスを堪能する』。負けてはられない。私たちは第十レースを見に行くのをやめて、パドックの、テレビカメラの横に陣取り、出走馬が出てくるのを待った。

## いざ中山・後編

「あれ、誰だろう」

パドックの中央で、男性二人と女性が打ち合わせをしている姿を見て娘がつぶやく。

「レポーターじゃないかな」

「あ、細江さんだね」

それがわかる中学生は、なかなかいないぞ。元ジョッキーの細江さんは、指示を出している男性をあまり見ておらず、出走馬ばかりを見ている。そして、二言三言マイクに向かってしゃべって、姿を消した。

私たちは真剣にパドックを周回する馬を見ていた。娘の予想はトウセンザオー。理由は

「新聞の見出しにありそうな名前だから」

一頭だけの芦毛で見やすい。私の本命アンバージャックはなんとも……パドックを内に、内に回っている。しまいには内側の芝生の上しか歩かなくなってしまうていた。

事前にネットで買っておいた馬券のはずれを確信しながら、そのまま眺めている。そういえば、東京競馬場にも以前はこんなふうのパドックの横に足場を組んで、テレビカメラが設置されていた。私はいつもその横から見ている。テレビカメラはなくなってしまうたが、見ている場所は変わらない。向こう側の角を曲がってくる馬を見たいのだ。なるべく外、外を歩く馬を探す。

いた。ワキノカイザー。何周回っても、きびきびと歩いている。首を上げて、ぐいぐいと。前の馬を追い越しそうになる。私の好みから言えば、首は下がっているほうがよい。そして回りを見渡すでもなく、落ち着いていて、なお時々鬪志をあらわすように、ぶんと尻尾を振る、というのが最高。だが、これはやる気がないときとの見分けがつかないことが多い。

というより、正直パドックを見てもよくわからない。明らかにやせ細っているとか、ものすごく興奮しているとか、そんなくらいのことしかわからないのだ。その中で、ひとつものすごく注目していることがある。

それは、ボロ。どんなに強い馬でも、お腹痛いときには走れるはずがない。この方法は友人も実践済みで、お腹痛をボロで発見した一番人気を切つて、見事的中した。

ワキノカイザーか……と思っっている矢先、彼が目の前に来て、ボロをした。健康そのもののそれをみた瞬間、新聞にしるしをつけた。とまれの号令がかかって、騎手が背にのる。今日は幸四郎ジョッキーを見に来たというのもある。去年、一昨年とりたいところまで頑張ってくれた。ソングオブウインドとレインダンスの騎乗だ。このころの中で、

「ありがとう」とつぶやく。

石崎駿君の顔もある。お父さんが東京に来ているときには必ず馬券を買う。地方ジョッキーの追いには信頼を置いている。パドックで『チチチチ』と馬をなだめていた姿も目に焼きついている。

私たちは何も言わず、ジョッキーを眺めていたが、となりのカッブルのオトコのほうが、カノジョに、

「ほら、あれが幸四郎。あれがヨシトミ」と説明していた。娘には説明しなくともだいたいわかっているので、放置しておく。

勝春騎手と目が合った、と思う。私は心の中で、

「その節はお世話になりました」と思っていたが、あちらからしたら、

「あれ、あの女、府中でもみたな」と思ったかもしれない。私はたいてい似たような格好をしているし、ある一時は毎週土曜の第一レースからパドックにいた。あるとき、私は自分の好きな馬の写真がとりたくて、携帯電話と格闘していた。

「うまくいかないなあ……」と思っっていたら、視線を感じた。同じレースに出ていた、某有名厩務員さんが、パドックから見上げてい

た。全く人気のない馬の写真を、撮ろうとしていた。パドックにかぶりつきで、回りなど見えていないくらい必死だったので、殺気さえかもし出していたかもしれない。その厩務員さんとは、確実に目が合った。合った瞬間に

「な、なにもみていません！」てな具合に目をそらされたからだ。

その露骨な態度に、初めて自分が必死になっていることに気がつき恥ずかしくなった。馬を引いていてもそうなのだから、馬上からならかなり見渡せるだろう。勝春騎手は、

「やばっ」という感じではなく、ごく自然に目をそらしたから、気のせいかも知れない。

そんなこんなしているうちに、レースが始まり、アンバージャック君もワキノカイザー君もどこにいるのかわからないまま、レースが終わった。ついでに手をだした京都のレースでも、

「そのまま！」

と叫んだものの（本日初叫び）、よくみると軸馬は四着。

「そのまま！」ではなく、

「木幡、させ！」だった上に、一着から四着まで印刷された馬券も紙くずという、とつてもかつこ悪いことをしてしまった。もちろん、収支はがつつりマイナス。

かくして、お土産もなく、帰りの道のりも遠い『最後のガーネットツアー』は終了した。いつもと違う競馬場を初観戦場所にして、なんだか楽しかった。やっぱり、現場が一番だ。二月には、東京競馬場に行き、できれば阪神にも京都にも行きたい。同一年に全制覇……ああ、でもやっぱり一番行きたいのは中京だなあ……うん、初ローカルは絶対に中京。

ということ、勝ち味に遅い私は、五百円玉貯金を始めるのであった。

## ストレス解消

京成杯のことも、しっかりと覚えている。

ひどい道悪だった。クラシックをこれから目指す若駒たちには、気の毒なほどの泥んこ道だった。コーナーを曲がって、ゴールに突っ込んでくる二頭の馬の姿が目に見え始める。もちろん私はシツクスセンスを応援していた。届かず、二着。馬券も取れなかったような気がするが、それでもすがすがしい気分であった。

考えてみると、この年、私はかなりのレースに参加している。いろいろ変化の年であった。

前の年に、CBC賞の三万馬券をとっていて、財布は潤っていた。だからガーネットステークスで上位人気と下位人気なんてお遊びのような馬券を、いつもより高いレートで買うこともできた。さらに財布は潤った。

それだけではない。実は、めちゃくちゃ仕事が忙しかった。それに伴い給料もそれなりだが、抱えていたストレスは思いのほかで、退職を決意していた。調度、娘も中学に上がる。このままこの会社においても、やりたいことはできないような気がする。もともと決意していたのが、競馬のおかげで、『三月末まで』から『二月末まで』に繰り上がった。その後、半年間引きこもり、競馬場以外へは外出しないという日々が続く。

他にも理由はある。カレシとも別れた。

CLUB KEIBAのコマーシャルにある

「競馬があれば彼女なんていらない」を地で行ったわけだ。本当に癒された。

日曜日に競馬が終わり、火曜日に雑誌が発売されると、まず先週の反省にはいる。事前の新聞やネットの予想と実際の成績を比べ、どの情報が一番正しかったかを調べる。騎手のコメントを読み、敗因を調べる。自分がどんなレースに、例えば、芝とダート、短距離

と長距離、別定戦とハンデ戦などどんなレースに強いかを調べる。

やっと今週末の予想に入れるのは木曜日あたりからで、どの馬が実際に出走するか調べて、その時点ではまだ雑誌に書き込みをして考える。そして金曜日になると、歩いて三分のコンビニに新聞を買いに行き、情報を書き込んで、本格的に予想を始める。

そして、土曜日の第一レースには、東京競馬場のパドックで、遠い角を見ながら腕組みをしているのである。

人間はさまざまなストレスの解消方法を持っている。ある人は、ひたすら食べ、ある人は買い物を探り返す。ある人は、一日中ちかちかするパチンコ台の前に座り、ある人は前後を考えず、性欲に走る。

私は食べるのはあまり得意ではない。買い物も、本当に欲しいもの以外にお金を出すのは絶対にいやというたちのケチなので、これも苦手だ。パチンコ屋にいと、

「人間で、短い時間の間にたくさんのこと考えられるんだなあ」と思うくらい時間がたつのが遅いので、余計に気がめいる。性欲に走った後の、なんともいえない後味の悪さは、更なるストレスとなる。

多分、競馬は私にとって、一番よいストレス解消法なのだと思う。本を読むのも、映画を見るのもよい。ひたすらに野菜をみじん切りするとか、魚をさばくなんてことも好きだ。ようするに没頭し、集中することでほっとする。ただ、今あげたものと、競馬の違いは、終わりが無いということ。考え始めれば、きりが無い。本当にストレスがたまりにたまっているときは、終わりのない解消法が必要なのだ。

考えればきりが無いが、時間が来ればレースは始まってしまう。京成杯はマイネルチャールズとプラチナメンで行こうかと思う。まだ、梓順と馬体重という重要な検討要素があるので、今のところ、だけ。

日経新春杯はグロリアスウィークとマキハタサイボーグ。裏切ら

れ続けているヒラボクロイナルも消せない。彼はきつと『やればできる』だから。

なんとなく今週は、引きこもっていたときのようデータに沿って考えてみた。小難しい顔をして、色んな資料をあさった。終わってみれば、また文無しになっているかも知れないのに、まるでどでかい仕事をしている偉い人になったような気分だ。いつになく楽しい。

……なんて、もしかあの頃の『鬱々とした日々再び』の前触れなんてこと、ないよね……と自問して、心当たりのあることからはとりあえず目を背けておく。さあ、土曜日の予想もしなくっちゃ。

## 神様のお告げ

あれは、二〇〇一年の有馬記念。

初めて中山競馬場に行った。その年には、同時多発テロがあり、たまたまその時期にアメリカに旅行していた友達と一緒に有馬記念を見に行った。私は内馬場で、お土産にもらったライターをなくし、第五レースの十万馬券を逃し、ものすごく暗い気分になっていた。妹に頼まれた馬券があるから、買わないといけないと思っていた。妹はほとんど競馬をやったことがない。だが居候していた祖母の家の隣に住んでいる叔父は、年代者の競馬ファンだ。結局収支はマイナスになるのだから、奥さんにとがめられあまり馬券は買っていないようだったが、かなり詳しく分析していたはずである。妹に頼まれたのは確か、一番九番の馬連だった。十五万馬券である。

「何でこの馬券なの？」と聞くと、「神様からの啓示があった」という。要するに夢で見たのだ。こんな馬券に千円も払うのいやだな、と負けのこんでいた私は思いながら、マークシートを塗りつぶした覚えがある。結局その馬券は当たらなかったものの、現場にいる私たちよりもあたりに近い馬券であった。一番は二着に来たアメリカンボスだったからだ。

私たちは悔やんだ。マンハッタンカフェ、アメリカンボス……テロのときアメリカにいた友達……お土産のライターの紛失……神様の啓示をままと見逃した私たちは、おけら街道をおけらで歩いた。翌年の有馬記念。私は立川の場外にいた。また妹から頼まれていた。今度は一番四番だったと思う。理由はまた『神様からのお告げ』だ。なんともうまく有馬記念にあわせてお告げがあるものだと思いつながら、私は素直にその馬券を買い、そしてこつそり、一枠と三枠から枠連で総流しした馬券も買った。混雑したウインズで小さなモニターを見ていた。トップダンスシチーが先頭に立った映像を記

憶している。妹はまんまと馬券をはずし、私は漁夫の利で悴連をゲットして、多分はじめて有馬記念を当てた。私の本命はコイントスだった。

去年の有馬記念は、ドリームパスポートが本命だったが、見事に玉砕した。妹も応援していた。が、最近は自分で場外に馬券を買いにいけるまで成長してしまっている。もう妹のお告げはあてにできない。ビギナーズラックの時期は過ぎてしまった。

昨日の夢は、面白かった。知り合いがなぜかジョッキーなのだ。だが、どこでの騎乗なのかわからない。私は明らかに中山競馬場にいると意識を持ちながら、それでも行ったことのない外国の競馬場のようなところで、うろろろしていた。前から知り合いがやってくる。今日の騎乗は断ったというのだ。一鞍しか依頼がないし、遠くまで行くにはリスクが高いくらい、あまり勝ち目がないからだ、という。現実の世界ではそんな理由はありえないだろうが、私はなんだか納得していた。

その馬はテイエムプリキュア。斤量五十キロ以下の馬が三着に來ることが結構ある日経新春杯に登録している。私は迷わず、三連単の相手に入れた。

が、結果は玉砕。プリキュアは頑張った。でも、私の予想が頑張れていなかった。

なぜ、複勝を押さえていなかったのだろうか。ちなみに、本チャンの馬券はいまだ白星がないが、JRAの馬券道場では単複を少しは当てている。まあ、半分くらいしか回収していないのだけれども。要するに、一番下手くそなのは買い方である。と、わかっているのにうまく買えないのだ。

神様もため息をついていることであろう。せっかく教えてやったのに、人間とはなんとおろかなものよ、つてな具合だろうか。

今年の私主戦のジョッキーは、落馬しちゃったけど、勝浦騎手と幸騎手で行こうと思う。去年私のお財布を潤してくれた二人だ。なので、ライアン産駒でもパラダイスクリーク産駒でもないのに

「何でこんな馬予想してんだ」と思ったら、騎手を確認されたし。  
ああ、プリキュアちゃんもパラダイスクリーク産駒なんだよなあ  
……去年なんて、あんなに調子よかった勝春騎手、六万円も投資し  
たのに、私の財布には一円も返してくれなかった。なんて馬券下手  
なんだろう。多分、一番の神様からのお告げは『欲をかくな』。来  
週からこそは、三連単なんて買わないぞ、と、今日のところは誓っ  
ておく。

## ハナ差

パークウインズにも、娘とよく行った。

開催されているときのそことは違って、家族連れがほとんどいない。娘は、きよるきよるして、なんとか家族連れを探そうとしている。でも見つかるのは、小学校低学年以下の小さな子供たちばかり。なんともいやそうにしていた。

一人で来たときや、大人の友達と来たときには、たいていそばを食べる。改装以前は、正面から入って、馬場へ抜けるところにあつた立ち食いそばだ。その『とりそば』に柚子胡椒を入れて食べる。ここで、柚子胡椒にはまり、自宅にも瓶詰めをかつたほどだ。まあ、自分で買ったやつのほうが風味は強いが、それは大量生産だから仕方ない。改装後、やつとどこにあるか探し出した。いつもそこに行く。場所が変わってから、少々、汁の味が濃くなって、かわりに鶏肉が出汁がらのようではなくなった。関西人の私には数少ない、温かいそばを食べられる店のひとつである。大体、第四レースの障害戦の頃に行つて、パドックを眺めながらずるとやつている。

娘と来た時はちよつと違う。

食べるのはハンバーガーで、内馬場に行くことも多い。夏には力キ氷を食べたり、時雨もちとかなんとかいう、大根おろしのかかったお餅を食べたりする。私は甘いものをあんまり食べないので、かわりに焼き鳥を買つたら、忙しくごちやごちやして、力キ氷しかくれなかったことがある。

「ママ、ちゃんといいなよ」

といわれたが、その後もがやがやしてなんとなく言いそびれてしまった。

「いいよ。もう絶対あそこで買わないから」

と、ふてつたこともある。現実にその売店からだけは何も買っていない。

さて、これも〇五年のAJCCの事。

嫌がる娘をいつものごとく食べ物でつりやっけてきた。もうさんざんパラ飲み食いした後で、座るところを探していたが、見つからず、ターフビジョンの前に午前中のレースの新聞を敷いて、二人して座ることにした。あんまり天気がよくなかったのを覚えている。だが、真冬にもかかわらず、なぜか寒かった記憶はない。後ろのベンチの席には、往年のファンたちが陣取っており、結構な人出だった。

「あたりそこねたよ」と、とり損ねた馬券の話をしている。

「2着の馬がなあ、余計なんだよな」

「何、縦目かい」

「いや、北村、買ってない」

それは、あたりそこねじゃなくて、完全にはずれだよ、と後ろの会話に二人でこそこそやりながら、レースが始まるのを待っていた。

私の本命はユキノサンロイヤル。どんな馬券かは忘れたけれど、単勝三十倍から流していた。

ファンファーレが鳴って、私は胸を躍らせた。なんだか今日は勝ちそうな気がする。

「ママ、お願いだから、絶対に叫ばないでね、お願いだよ」

娘はさすがのように私の腕を持ち説得する。

「わかった、なるべくそうする」

本当におとなしく見えているつもりだった。五番人気とはいえ（本当はもつと人気がないと思っていた）、上位三頭は抜けている。しかもクラフトワークは二倍を切る勢いだ。そんなうまく行くことはないだろう……と思っていたのだが、どうしても胸のどきどきがおさまらなかつた。

ユキノサンロイヤルは、いつものように、主戦の騎手いわく、そおっとゲートを出た。そしていつものように少しずつ前に取り付いていく。四コーナーを曲がって、彼の脚色は衰えていなかった。エ

アシェイデイと二頭で抜けてくる。

「いけるかも!!」と思っただのが最後、私は娘の、

「お願い、ママ、やめてってば!」という懇願など耳に入らず、

「岡部!岡部!」と叫んでいた。

と、まあこのあたりまでは、別にみんな叫んでいるから、娘が思うほどどうつてことない。後ろから来るクラフトワークが一番人気なのだ。みんな応援している。叩き合っている二頭をらくらくとクラフトワークが交わしていく。回りはそれでちよつと熱が冷めたが、私の問題は、ユキノサンロイヤルなのだ。

一旦は先頭に立った。シャドーロールをつけた鼻先が力強く、前へ前へと動いている。クラフトワークがなんだ。今日は勝てるはず。「岡部!岡部!」の声が、ゴールで途切れた。わずかに、体制不利に見えた。それでも祈るように、ゴール前のリプレイをみた。

「ああ……」

やはりどう見ても、ハナ差およばず三着。私はその場でのけぞった。

どつと笑い声が起こった。もちろんレースに対してではなく、明らかに『ユキノサンロイヤルからの何かしら熱い馬券』を持っているやつが崩れ落ちる瞬間を見たからだ。

「ママ、やめて。そんなことしたら、取れなかったのみんなにばればれだよ」

もつばれてる。年寄りの馬に、年寄りの、しかし名ジョッキーの騎乗。勝って欲しかった。非常に悔しかったけれど、アドレナリンは満タンだった。

三着に敗れて、ものすごくうなだれるということは、馬連か馬単か、または三連単の一、二着付けか何かだったのだらう。とりあえずみんなに笑われ、娘には嫌われ、さんざんだったけど思い出のレースのひとつだし、その後私は執拗に彼を追い続けることになる。

今年のレース、私の本線はドリームパスポートとブラックアルタイル。トウカイトリックも気になる。なんと、エアシェイデイもい

るではないか。しかも人気になりそうだ。

なんとなく、エアシェイディだけは買いたくない……うーん、ワイドで買うか。狙いの馬が奇数枠の、なるべく外目に入ってくれるのを祈っている。

## スリリング

またもや、である。

一月の競馬は終わったにもかかわらず、初日が見つからない……どこではなく、私は大失態をやらかした。

お客さんに馬券を頼まれていた。一万円という大金を預かって、「買ってくれ」

と仰せつかっていた。だが。

昨日は、べろんべろんに飲んでいたらしく……らしくという時点でかなりやばいのだが、多分多大なご迷惑をかけたお客様も複数いらっしやると思います。深夜をすぎてからの記憶は半分くらいなく、若いボーイさんに、

「トマトジュース飲みたいの！」と言ったわがままは、おうちに帰った瞬間にリバーズするといった有様で、近年、馬券を取る以上に久しく、ぐだぐだだったわけで。

それでも私は家に帰る前に、その預かった大金を馬券口座にいれるだけは忘れなかった。そして、

「絶対、三時までには、買い目の電話入れてね」

と言っておきながら、お客さんからの電話ではいっさい目が覚めず、起きたら三時を十五分も回っていたありさまで、なんとか連絡をとったのが三時半のことでした。

お客さんの本命は、エアシェイディとアドマイヤメイソ。あります、あり。そこからフォーメーションでながすっていう馬券を聞き取りしながら、ネットで買ったわけですね。でも、心の中ではかなりあせっている。やばいやばい、そろそろ締め切り時間が……それでもなんとか購入できて、

「めでたし！」と思っていると、んんん？……買い間違えている。

五番七番の馬券のはずが、五番六番になっている。……これはまずい。仕方がないから、その馬券を買いなおそうと思っただけれど、す

でに締め切り。ありやりや。これはもしも五番七番できた日には、ある意味弁償しなくては、と配当を見てみると、十万円??なんでこんな馬券を五千円も買ってるの?!生まれて初めて、

「五 七だけはこないで!!」

と思いながらレースをみた。それはそれで今までとは違ったスリルがありましたわ。

まあ、結局馬券ははずれ。エアシェイディを三番手以降にした私が悪いのですが。でもトウショウナイト買ってなかったのでおんなじ。大体、

「これは買えない……」が、成績でなく、心情であるときはろくなことがない。NHKマイルも、ピンクカメオとムラマサノヨートーは持っていた。だが、ローレルゲレイロはどう考えても買えない。一番人気でも。実績上位でも。私には心情的に嫌いな要素が多すぎた。そう話すと、私の買い方を知っている友達は頷くが、そこまで知らない人は、びっくりする。要するに、ロマンの競馬な部分が馬券をじゃまするのだ。

まあ、初白星は例年通り二月に持ち越しておいて。

そしてもう一つ。実は娘の推薦入学の試験日だったのにかかわらず、

「Do the best」と励まして送り出すこともできず、それどころか、私が起きたときにはすでに入試を終えて帰ってきている、という大失態をやらかしていた。二回くらい、

「本当にもう試験は受けてきたんだろうね」と確かめたが、呆れ顔というかあきらめ顔で、

「ママが寝ている間にちゃんと行ってきましたから」といわれた。しかも、

「お見送りもしないでごめんね」とあやまると、  
「昨日帰ってきてげーげーやってたの、知ってるから」と気の毒そうに言われてしまった。本当にもうしわけない。

さて、東の競馬は府中にやってくる。長い直線を駆け上がったく

る馬たちを見に行きたいが、果たして起きられるのか。競馬以前の  
問題である。

恩師（前書き）

ちよつと、番外編。

## 恩師

偶然なのだろうか。

役者をやっている、という人と話す機会があった。私もその昔、そのような学校に通っていたことがある。ほんの一年と少しだ。その頃の同級生が、大きな劇団にいると話した。

さて、話しておいて、本当にその劇団だったか不安になってきて、数日後、インターネットで検索してみると、間違った。違う劇団だったことが判明した。

ついでに、といういろ調べ始める。そういえば、そのときの科長だった先生はかなりのご高齢になっているはず。今もご健在か。ちよつと検索してみる。すると、もう二年半も前に事故が原因で亡くなっているではないか。

私は、愕然とした。

画面上で、誰かの死を知らされるのは、三度目である。一度目は義理の祖父。電車にまつわる死だった。二度目は以前のバイト先の人。震災のときに流れた数千人の犠牲者のテロップの中に見つけてしまった。そして、今回である。付け加えれば、レースの途中、名馬たちがターフを去る瞬間も、何度も目撃している。

一番、シヨックが少ないといえ、それは確かだ。そもそも、かなりのご高齢とは知っていた。その頃の友人たちとは最近になってやっと連絡が取れるようになって、それまでは私のほうが音信不通だった。連絡がきていないかもとは、想像していたことだ。それでもやはり、悲しい気持ちになった。寂しいというべきか。

入学して、初めて対面したときのことを覚えている。

「ただのおっちゃんやな」と思った。少しいかつい容貌をした、普通のおやじにしか見えなかった。ちよつと目が鋭い。いつも杖を突いているのは、雪山で凍傷になり、足の指が何本かないからだと話してくださった。

学校の住所と、学校の名前を言って、自分の名前をいう、という自己紹介をさせられた。みんななるべく大きな声で言っていたような気がする。私も、自分の名前を言った。全く平坦に発音した。

先生は、私が発音した名前を繰り返した。そして、ゆっくりと私をにらみつけ（たように思えた）、

「発音はこれでいいのですか」と聞いた。私は、

「はい」と答えた。先生は怖い顔のまま、黙って頷いた。

時代の流れとして、標準語とされる言葉から、抑揚がなくなってきたことを、先生は嘆いていた。

「ここでの授業では、アクセント辞典にそった中高のアクセントを採用します」と宣言された。私が発音した、私の名前は、先生がもつとも正しくないとしているアクセントでの発音だと、後になって気がついた。それでも、先生は私の名前を私が発音したとおりに呼び続けた。そんなに名前を呼ばれた覚えはないけれど。

私は、よい生徒ではなかった。ろくすっぽ学校にも行っていなかったから、先生からしてみれば、生徒ですらなかったかもしれない。でも、私はいつも学校のことを思い出すとき、必ず先生の姿を思い出した。杖をついて仁王立ちし、ちよつとにらみつけているようなあの表情を、必ず思い出した。

先生はただのおやじではなかった。追悼公演の記事が延々と続く。死亡記事が残っているほどの偉大な人なのだ。

偶然だろうか。

先生が亡くなった次の日から、私はコールセンターでの研修を受けた。言葉の使い方や、発音や発声などのレクチャーを受けていた。そして、学校のこと、先生のことを思い出していた。

偶然だったのだろうか。この世の中に、偶然なんて存在するのだろうか。そして、必然も。また、運命も。

先生、こんなに時がたつまで、気付きもしなくてごめんなさい。

私は先生の生徒であることを早々に放棄してしまいました。いま

だにこうやって、駄文を書いたり、時々人前にでたりしています。あの頃と同じように、今もこの先どうなっていきたいのか、だからどうすればいいのか、見つけれられないような次第です。多分、先生の教え子の中で、私が一番最後でしょうが、今度お墓参りに行きたいです。先祖のお墓の場所も知りませんが、先生のお墓の場所を探し出して、必ず伺おうと思います。だから、一番みそつかすでいいので、先生の生徒の中に入れてください。

そしてついでに、競馬場によって帰ることを、お許しください。

## くすぶり

必然や、偶然や、運命なんてことを、前回書いたが、それらがあるのかどうかはわからないが、『くすぶり』だけは確かに存在すると思う。私は、浅田次郎先生が好きだが、そのエッセイの中にも『くすぶり』についての話が出てくる。ようするに、まことしやかに言えば、『バイオリズム』であったり『げんかつぎ』であったり『ジंकス』であったりする。ついていないやつのは近くは、近くによつただけでもそのオーラに飲み込まれる、というあれである。

ここまで、連載で読んでいただいている読者の皆様にはわかるだろう。私が、

「心情的に買えない」と言った馬がごとく来ていることが。今年には勝浦騎手で行こうと思うとかいっただら、また最終レースで落馬してしまった。

昨年の買った騎手のランキングでは、武豊騎手が上位に入っている。これは、普通の予想からなるものも、もちろんあるのだが、つもり積もった『つぶし馬券』のせいでもある。私の中には、

「武豊は、私に稼がせるつもりは毛頭ない」という、確固たる『げんかつぎ』がある。なので、勝負の穴狙いのレースに彼が騎乗している場合、私は必ず、武豊単複馬券を買う。

「私を買ったら、絶対こない」という信念の基に買う、ようするに『武豊つぶし』馬券である。レースはあたらなくても、つぶし馬券を買ったときは、たいていつぶれる。複勝は当たることがあっても、単勝は当たらない。人気どころの武豊複勝馬券がどれほど低配当か、お分かりになるだろう。

本当はそれもキャリアから来る勘なのかもしれない。たかが私が馬券を買ったくらいでどうにかなる騎手ではない。そもそも『呪い』というのは、相手が呪われていると知るか、またはそんなふうに見えるか、またははじめて効力を発揮する魔法である。私を買ったか、買った

てないかわからないときには効力なんてないのだが、友達の中には真剣に、

「明日、武豊からいくから、絶対に単複買わないでね」といつてるやつがいる。もちろん、自分の予想が穴である場合は、断固断る。さて根岸ステークスは、ガーネットステークスの時に、

「紙面を派手に飾る名前じゃないな」と娘が断言したタイセイアトムでいこうかと思う。テイエムプリキュアが、二歳女王になった時も、娘は全く同じことを言っていた。その後、プリキュアちゃんには、馬券的においしい思いをさせてもらった覚えはないが……鞍乗の吉田豊騎手には逃げるのが上手いイメージを持っている。ちなみに須貝騎手が逃げ馬に乗っている時も押さえるようにしている。

これを書き始めたのは、日曜日の明け方だが、すでに雪が降っていた。真つ暗な空から降ってくる白い雪をしばらく眺めていた。吸い込まれそうな静けさで、小さな星の粒の中にあるような気分になった。創作意欲満々だったが、途中で睡魔に負け、起きてみると、東京は中止になっていたし、京都の芝の競争がダートに変更になっていた。

瀬戸内海沿い生まれの私にとっては、寒いのは最悪だが、雪は楽しいイベントである。確か、シルクジャステイスが有馬記念を勝った翌年、神戸の実家に向かうために駅にいた時も雪だった気がする。楽しいのに、帰るんかあと思っていたら、電話が鳴って、つまらなそうな声が聞こえた。

「雪で競馬が中止になって、つまらない」と。

多分、三月一日の中山開催ではないだろうか。まだここまで競馬にのめりこんでいなかったもので、「ふうん」と思った程度だった。

一日競馬がなくなつて、翌日なりに代替競馬が開催されると、芝のはずのレースが、ダートになってしまうのと、馬にすればどちらが迷惑な話なんだろうか。私は道が悪くなると、芝ならダートの実績を、ダートなら芝の実績を参考にするようにしているので、予

想はそんなに変わらない。馬にしてみてもそんなくらしいの感覚なのだろうか。なににせよ、怪我がないことが一番である。

京都牝馬ステークスは、ちよつとあてにし辛い、シエルズレイからいこうかと思っている。ダート実績はないがクロフネ産駒だし、大丈夫だろう。そこからダート実績のある馬に軽く、軽く流そうと思う。鞍乗の川田騎手は以前あるインタビューで、

「何番人気の馬でも、その馬券を買っているファンの人のためにもいつも頑張ります」と言ったことがある。穴党の私としては、心強い一言だった。

今回は、これだけつらつらと予想を並べたが、よく思い出して欲しい。私は今、『くすぶり』の真っ最中であることを。これを読まれてから馬券をお買いになる方は、そのあたり、じっくり検討されたい。

## 神様のお告げ その2

先週は、ひどい目にあった。

月曜日。

なぜか目覚ましがかかっている。

「あ、銀行行かなきゃ」

のろのろと用意をして、窓口での用事のため、だらだらと駅に向かって歩き始めた。途中、

「あ、競馬……」と思い出したのである。

銀行はそんなに混んではいなかった。待っている間に馬券を買いおもうと思い、携帯電話を操作していると、途中で電源が切れるのである。最近、電池がどうも太ってきて、接触が悪いな、とは思っていた。それがまさしくこんな時に……結局、馬券は一種類しか買えず、私は怒りに任せて携帯ショップへ乗り込んだ。

が、これがまた運のつき。その場では交換してもらえず、なんやかんやと手配しているうちに遅くなり、急いで帰ったが、馬券は締め切り。買い目の予定だけが、むなしく残る。そして京都の最終に手をだし、川田騎手と角田騎手からいくと決め、もう一頭と選んだ人気馬が

「ああ、そつちかぁ……」という結果であった。くすぶりが続いているのか。

その数日後、またもや、神様のお告げがあった。

私はもともと非常に四位君と仲良しで、その日は、

「たまには遊びにおいでよ」

と、競馬場の裏側、ロッカールームと待機場のようなところに招待されていた。まるで体育館か会議室かというような飾り気のない場所で、それこそ久しぶりに四位君と対面する。

「この前、ウオッカのレース、仕事で買いにいけなくてさ」

「だめだよ、あれこそご祝儀レースみたいなものだったじゃない。

あそこで買わなきゃ」

にここにこしながら、あの少し高い声でいうのである。

「あ、これ、写真」

四位君は写真の束を出し、見せていた。その中になぜか年賀状の表をとった写真がある。

「これ、思いつきり住所だけど……こんななの？いろいろばれたら大変なんじゃない？ほら、一応公人ってか、テレビに出るような人なわけだし……」

私の心配をよそに、四位君は手を振って、

「いいの、いいの。別にこれ見せたからって、俺になんかしないでしょ？」

「そりゃ私はしないけど……」

「だって、本当にここに住んでるんだもん」

そういつて、住所をすらすらと読み上げた。

……というのは、全くの私の夢の中の出来事である。競馬場の中に、本当にあんな部屋があるのかもわからないし、正直、私と四位ジヨッキーに共通点は全く持って、ない。無理矢理こじつければ、同じ年だけれど、私たちは団塊ジュニアだから、昭和四十七年生まれなんて、売るほどいる。目が覚めた後に思い返してみたが、パドックでも四位騎手をみた覚えもない。いつも画面の中の人だ。それが夢に出てきた。

競馬の夢はちよくちよく見る。この前のプリキュアちゃんもしかり。今まで夢に出演してくれた騎手の皆さんは三人はいるし、ちょっと後味が悪いけれど、東京の第一コーナーで馬が骨折してしまう瞬間なんて夢も見たことがある。全部が全部、お告げとも思えないが、今回ははつきり覚えていることがある。住所の最後、番地が『四』だった。浮き上がるように黒々としたその数字を、克明に覚えている。起きたときに、ちょっと楽しい気分だったし。これはきつと何かある。うん、土曜日は京都で四位騎手が四枠に入っているレースを買おう。

共同通信杯は、去年と打って変わって多頭数だ。東京コースの経験があり、あんまり使われていない馬をと思っている。スマートフアルコンとホツカイカンテイあたりか。あんまり着かないかな？その点シルクロードステークスは、私の穴予想にばっちりあう馬が、狙ってみたい騎手でそろっている。前走一着組みプラス、アグネスラズベリ、サイキョウワールド。こんなにすんなり絞れるのは、久しぶりだ。おお、ここにも四位騎手がいた。そういえば明日にでもレンタルビデオやから『シックスセンス』のDVDが届くはずだ。やはりこれは何かあるぞ。

今週こそは白星を……という前に、ちゃんと開催されるのかな？

## お手馬の騎手

馬友と話していた。

あるバレンタインステークスのとき、予想が七頭から絞りきれず、競馬場で苦悩していた。点数が多すぎて、勝ち損になる。そのとき、隣の中年カップルが言った。

「二番十四番でしょ」

それだ！と思い、マークシートにチェックした。……が、結果はご想像のとおり。

「大体、十三頭立てのときもあるんだよね」とからから笑っていたが、そういう因縁馬券も買うくせに、今年の収支は九割を越えている。まことに悔しい。だが昨年は、私と同じく、勝春騎手からは一円もお財布に入れてもらえなかったらしい。ちなみに、彼の今年の推奨騎手は藤岡佑介騎手だという。

買い方も私とは違い、馬単がメインで、マツリダゴツホから流さなかった有馬記念をかなり悔やんでいて、そのトラウマで今年はついつい流してしまうらしい。おかげで

「勝ち損だよ」と愚痴をこぼしていた。ふん、それでもとってるんだからいいじゃないか。

私はというと、バレンタインステークスの思い出はないが、その当日ならある。これまた〇五年、競馬場にいた。勝負レースは京都のすばるステークス。当時の収支表をみると、なんと、一点で五十倍の馬連を当てている。われながらすごいが、なぜその予想にいたったかがわからない。

そして、本当の勝負レースは東京の最終だった。

私はローレルアンジュを追いかけていた。はじめは先行馬だったらしいが、私が追いかけたときには追込一辺倒で、直線にきて、大外を一気に駆け上がってくるという競馬になっていた。このレースも、いつもよりは少しだけ、前で進め、最後は直線で差しきって、

一着になった。私はその三連単を二百円持っていた。

それなのに、ゴールした瞬間、私は固まった。ローレルアンジュの前走も、前々走も、その前も私は単勝を買っていた。なのに、今回に限って買っていないのだ。

「うつつ……」

隣にいたおじさんが変な顔をするのもかまわず、うめいた。私は当たり前馬券を持っているのにもかかわらず、悔しくて仕方なかった。買った筈。絶対に買った。たった何度か裏切られたくらいで、単勝馬券を買わなかった。

「また届かないんじゃないの？」

なんて、心の中で疑った。この馬はいい馬だから追いかけてよう、きつと重賞も勝てるはずと思っていたのに。大体、京都のメインは馬連の一点買いをしているのに、本当の本当の勝負で三連単二頭流しマルチなんて馬券はどういうことなのだ。彼女を疑った自分が悔しくて悔しくて、私はウイナーズサークルには行かず、払戻をしようとぼとぼと帰路に着いた。

この後、主戦の石神騎手は交通事故を起こし、四ヶ月の謹慎処分となる。駐在所のブロック塀に突っ込む飲酒運転だった。

このニュースを聞いたとき、私は本当にかっかりした。私はローレルアンジュに関して、石神騎手の腕を買っていた。その後、中京で三着に来るが、そのときも、

「石神騎手だったら、きつと一着だったはず」と思った。

馬だけでなく、騎手もみんなの夢を背負っている。誰にでも臍肩の騎手はいるだろう。この馬にはこの騎手という狙いもある。まあ騎手に限らず、飲酒運転はいけないと思うが。

今回のバレンタインステークスは、前走でテレビの予想に負けて切ってしまったワイルドファイヤーからいく。本当は田中剛騎手が出走してほしかったが、中館騎手の追いに答えてくれれば、勝てそうな気がする。今度はどんなに人気薄でも。絶対に予想を変えない。すばるステークスは持ちタイムと斤量から一枠両頭とゼンノパールテ

ノンかな。まずは相性のよいレースだから、何とか当てたい。  
しかし、この負けっぷりはどうしたことか。競馬を続けていく、  
という前に切腹せねばならぬ事態に陥りそうだ。某有名占い師の占  
いによると、今月の運氣はいいはず。こうなったら神頼みでも……

## インサイダー

かするほどいやなことはない。

じっくり予想して、買った馬が三着四着五着だったりすると、一日終わった気分になる。あと一歩が足りていないのだ。だが、自分ではじっくり予想してしまったため、何度見ても見直すことができない。もう手遅れなのである。この前の土曜日は最悪だった。

ワイルドファイヤーは二着。ゼンノパールテノンは一着だが、対抗にと考えていたシアトルバローズが取り消し。馬連でも勝負したが、だめだった。

競馬ではないが、株で儲かった知り合いがいる。私は株はやったことがないのだが、競馬以上に情報収集が大変だというイメージがある。彼は非常に忙しく、情報どころか、

「いつ買ってるの？」

といたくなるくらいだ。で、聞いてみた。すばやく情報を集める方法でも教えてくれるのかと思いきや、答えはチャート。チャートのみなのだ。

個人投資家は所詮、プロの投資家には勝てない。彼らは私たちが仕事をしている時間情報を集めることを仕事としている。それに、運よく彼らと同じだけ情報を集める時間を得たとしても、付け焼刃にすぎない。それに私たちに届くときにはすでに情報が古いのだ。

「結局、インサイダーには勝てないってことよ」

インサイダーと言っても違法なものではない。どんな会社にも噂は流れる。そんな会社から漏れ聞こえる合併するかも知れない話やリコールするかも知れない話、まだ都市伝説の時点から彼らは検証する。時には失敗もするだろう。それでも培った情報網とその検証能力にはあがなえない。

それがいち早く反映するのがチャートだという。彼は、

「金額はさほどあがらないのに、出来高が異様に多い銘柄」を買い

付ける。その会社がどこの会社でも何をやっている会社でもかまわない。

その方法を取り入れている友達がいる。  
競馬にしてみればそれは何か。

オッズであるという。馬主は少なくとも、馬券ファンよりも多くの情報を持っている。勝負気配で、がつつり突っ込む馬主を探す。早朝発売では二倍をきる倍率でも、普通の発売になるころには十倍近くになっている馬がいらしい。ただし、

「武豊が乗ってるのはだめ」らしい。騎手の人気でオッズが下がっているのが判断できないという。

そういわれて、ちょっと見てみたが、それは先々週で、雪の影響でか一方でか、検証はできなかつた。まあ、ある一つの買い方の例である。

フェブラリーステークスはこれまで四着馬を買うのが上手なレーズだ。去年は確かカフェオリンポスから勝負に行った。と、言うことをふまえてこの後をお役立てください。

今のところ本命はクワイエットデイ。調教師は引退間近である。続いてメイショウトウコン、幸騎手が騎乗するであろうブルーコンコルド。心情的にいつも買えないスカーレットを買つと、四着になつたりして。てなところである。

それにしても、だ。

『正義と正論とその他』にも書いたが、人間とは真つ向から正論をぶつけられると、まことに不愉快な気分になる動物である。

「やーい、下手くそ」とからかう友達がいるのだが、昨年の年間収支ではたぶん私のほうがうえである。そやつに下手くそといわれると、非常に腹がたつ。が、私は大人なので右から左へ受け流す。このところの不振では、腹もたたなくなってきた。これはかなりの重症である。

今度こそ、しっかり勝ち報告と自慢をお知らせしたい。間違つても連載休止のお知らせ、なんてことにならないように……

ちなみに筆者は「バカ」といわれるとまことに遺憾、嫌悪感が襲ってくる。それは関西人だからという理由であって、まさに正論だから、ではない。

## 買つとこない

私はまだ予想スタイルが確立していない。ここに三年もいろいろと試行錯誤をしている。

発表されているデータの信頼性を検証してみたり、自分で表計算ソフトに点数計算を試みたり。フェブラリーステークスは、その点数計算で予想してみた。レースに関するデータ上の条件に当てはまるかどうかを点数に直し、加算していくのである。

すると、どんな条件をプラスしてみても、ヴァーミアンとフィールドルージュは抜けた存在である。どちらかといえば、フィールドルージュのほうが上なのである。そして三番手はブルーコンコルド。この三頭で決まりだ、と思い、六歳馬のワンツ―はないとのデータから、ブルーコンコルドを二着につけて、一三着が先の二頭という馬券を厚くかった。クワイエットデイやメイショウトウコンにも流した。もちろん今回は『武豊つぶし』の単複は買わなかった。そして結果はご存知のとおり。私のフェブラリーはスタート後数秒で終わったのである。

たまに本命を買つと来ない、となげく輩は多いことだろう。私もどちらかといえばそうである。ぐりぐりの一番人気、なんていうのは、偏屈な私にとって、その馬を買いたい目からはずし万馬券を狙うまたとない機会だ。

「競馬に絶対はない！」という信念で、はずす。そしてその馬が勝てば、

「やはり強かったか」と、悔しいながらも賞賛を送る。

サイレンスズカの最期のレースに関する逸話を持っている輩は多い。私の実弟も、スズ力はずして馬券を買ったが、あんな結末でのゲットは後味が悪く、すぐに使ってしまったといっていた。

「いや、骨折する」と周囲に言つて、スズ力はずした知り合いも馬券は取つたし、骨折の予想までも当たっていたが、まさかそれが

最期になるなんて思わず、それからしばらく競馬はできなかったという。

はじめて好きになった騎手を追いかけていたら、落馬事故で亡くなってしまったという逸話を持つ馬友もいる。そのトラウマで冬の障害レースは今でも見るのがつらいという。

都立入試の国語の問題に、徒然草の第四十一段が採用されていた。神事の見物に来ていた僧が、人だかりのため見えないからと木の上に登っているが、そこで居眠りをしてしまい、落ちそうになっては目をさますということを繰り返している。それを見ていた見物人が、

「あんな危ないところで眠るなんてばかじゃないの？」とあざ笑うが、兼好は、

「私たちだって、いつ死ぬかわからないのに、こんな見物に大切な時間をつかっている。ばかというなら私たちのほうが上をいくんじゃないの？」と言った。すると、

「そのとおりだよ」と賛同する人が出て、前にいた人たちが場所をあけ、

「ここどうぞ」とよい席を空けてくれるという話である。

数年前に、曾祖母がなくなった。もう何年も寝たきりで、意志の疎通もままならない状態だった。風邪を引いたのが原因となった。お見舞いに行っていた妹も、娘も、看病をしていた祖母も風邪気味だった。みんな自分がうつしたのではないかと思う、と打ち明けた。しかし、全国的に風邪がはやっていた。ほんの少しも調子が悪くない人は国民の何パーセントを占めていたのだろうか。市民の何パーセントを。百四歳でこの世を去った曾祖母は大往生であったし、最期までみんなから愛されていた。

競走馬の死も、騎手の死もないに越したことはないが、競馬を愛しているからこそ、遭遇してしまうことである。それはあなたが死神なわけでも、あなたが応援した、または応援しなかったせいでも何でもない。

ちなみに、兼好が見物しに行った神事は上賀茂神社の競馬会神事である。人生の大切な時間を同じだけ競馬に浪費するのなら、より深く愛せばいいではないか。時にはターフから去ってしまった雄姿を思い出したりして。

## マンパワー

予想はそんなにずれていないのに馬券が取れないため、以前にもやっていた、買い方検討表計算マイソフトを改めて見直すことにした。パソコンも新しくなっていたので、自らの製作過程を思い出しながら作業を進めると、これがまた面白い。初めて使う関数なんかを用いてみたり、それは必要なのかというような割合まで出してみたり。どれくらい少ない入力で結果データが返ってくるかなんてことにこっけてしまって、結局、もつとも大事であるう、予想用の表については力尽き、半分くらいしか仕上がっていない。シュミレーションが足りなくて、どれだけの信頼が置けるのかまだわかっていない。

利用しているインターネットの予想データには脚質やら調子やらは、客観的正確さに欠くとして含まれていない。

「あら、そうなの？」

と今頃気がつく。いや、忘れていただけかもしれない。紙媒体とは比べ物にならないデータの量に、

「それだけパソコンでできれば新聞要らないんじゃないの？」と娘に言われたが、私は新聞を買い続ける。厩舎やトラックマンの意見を聞きたいのだ。

確かに、競馬はブラッドスポーツだからデータで補えるところがたくさんあるだろう。フェブラリーステークスも、私がつったつたない点数計算表でさえも上位馬の好走は予測できた。でも、ずっと気になっていたブルーコンコルドは別である。カテゴリーに対する重さを見誤ったといわれればそれまでかもしれないけれど。

要するに、なにごとくも、人なのだ。

たとえば、結婚したてとか、子供が生まれたところとか、そういう騎手が穴を開けたりする。引退間近の調教師さんに可愛がってもらっていた騎手なんかもそうだ。それは決して八百長とかでなく、

気迫の勝利ではないか。先週は中館騎手と小野騎手の通算記録がかっていった。中館騎手は日曜日に見事達成した。小野騎手は残念ながら来週以降に持ち越したけど、土曜日の騎乗は気迫あふれるものだったと思う。

そういえば、若手騎手戦に出られる騎手の枠が免許取得後六年未満から七年未満に拡大されていた。今年の競馬学校からの新人騎手は三人しかない。

中央競馬学校に学校見学に行ったとき、少数精鋭という言葉を感じた気がする。合格者は十人程度だ。女の子の合格者はここ十年ほどでていない。体力的に厳しいとのこと。まあ、プロスポーツですからそのあたりは仕方ないんだろうけれど。

いくら少子化とはいえ、新人ジョッキーが三人とはちょっと切ない。競馬の人气が下火になって、あちらこちらで地方競馬がなくなって、騎手が飽和している状況もあるのだろうが、それでも新人が少ないというのはいかがなものかと思われる。発展させていきたいのなら、プロスポーツなのなら、余計に新人発掘、教育に力をいれるべきではないかと思う。これは娘が騎手学校をおこつちたひがみからではない。それについては、小説のほうで詳しく書いてみたいと思っている。

中京開催から新人君たちの騎乗が始まる。競馬学校には新入生が入る。新入生の中の一人は娘と一緒に面接を受けたらしい。学校見学に行ったとき、生徒さんたちは一様にさわやかでかわいらしかった。学校は一般の方も見学できるので、興味のある方は参加してみるのもいいかも知れない。ただ、夏時間は集合が七時と、トンでもなくはやいですけど。

今回の東京開催には一度も足を運べなかった。中京にいきたいが、今開催は見送りとなるだろう。ああ、データだけの点数だのそんなのどうでもよくなってしまふあの現場の興奮を味わいたい。同じ負けでも実際に手に馬券を握って、ゴール前で何万分の一人の入場者になっている方がいいのかはわかっているのだが……遠い空の下、画面

のこちら側から新人君たちの無事を祈ることとしよう。

## 白星の定義

最近、ゼッケン好きになっている。

馬友たちからは、

「今週こそ初白星を祈っています」と励ましのメールが届く。あまりにも負け報告ばかりで、可愛そうになっているのだろう。多少はあたってくれないと、自分の勝ち報告もしにくいということか。

が、白星とはなんだろう。

GIをとつても、勝ち損だったり、万馬券をとつても、トータルでは負けていたり。

完璧な白星は、当日の収支が大幅にプラスで、狙ったレースの予想がぴたりと当たり、ほくほくしながら払い戻す。というのがベストだろう。途中で払い戻すことなく、その日のレースの馬券を買い続けられることも重要である。

では完璧ではないまでも、白星とはなにか。

予想はあっている、が買い目が間違っている。これは黒星。

何レースかは、押さえて買ったのがあたっているが、当日の収支はがつつりマイナス。これも黒星。

悩むところなのは、硬いレースをきっちりとって、他のレースははずしてしまい、収支は少しマイナス、という場合や、こつこつと何とかプラスには持っていたものの、今年の負けを考えると焼け石に水、という場合だ。

いくばくかのレースを当てているのだから予想はあっている。だが、大幅に勝ったわけでもなく、大幅に負けたわけでもない。

何をスタンスにするかで、見解はだいぶかわってくるのだろうが、私の場合、勝ったと思えるのは、まず当日の収支が、プラス五十パーセントはあって、三十倍くらいの馬券をぴたりと当てており、そのレースに関して蒔蓄をたれられるときである。はっきりと、明白になぜその馬券を買ったのかを説明できない場合は三十倍の馬券を

とつても、何かしらもやもやしたものが残る。

先週などは、土曜日は予想は当たって、買い方に失敗し、日曜日は予想が全然だめでもちろん収支はマイナスとなったが、十六倍の馬券は取っていた。悔しいのは土曜日のような負け方のほうだが、どちらにしても収支ががつりマイナスなので、またも黒星といったところだ。

ゼッケン好きになるにも理由がある。個人的感情で買えない馬たちに馬券ゲットを阻まれ続ければ、全くのデータだけで予想をせざるを得なくなる。収支ががつりマイナスがこれ以上続くと、馬券を買い続けることすら困難になってしまうからだ。みているだけでも楽しいけれど、やはり馬券をかうと買わないのでは気合の入り方も違ってくる。

ところで、毎週買っている競馬新聞が値上がりすることになった。もともと他のよりちょっと安く、全場掲載されている新聞を買っていたので、このところの石油高騰などで値上がりしてしまうのは仕方ない。だが、一気に五十円も値上がりする。土曜日曜の二日分買うと、馬券一枚分の値上がりだ。年間では五千二百円程度か。

今まで安く頑張ってくれていたのだから、値上げも仕方ないが、つもりもって考えると結構いたい。以前も書いたように、紙媒体は必要なものだ。同じ内容がネットで見られれば紙である必要はないのだが。

専門誌のことをネットで調べていると、予想を毎回メールで送ってくれるという有料のサイトが多いことに気がつく。馬友の中にもそういうサイトを利用して、そこそこ儲かっているという輩もいるが、私は疑問に思う。自分で予想していて、

「これは大穴の匂いがぶんぶんするぞ!」と思ったら、あえて誰にも言わない。だって穴党の敵は同じ穴党。わざわざ自分で自分の買目のおツズを下げようとする人はいなかるう。こういうサイトを運営している方たちは、自分では馬券をお買い上げにはならないのだろうか。中身を見ていないから想像でしか、申し上げられないが。

なんにせよ、しばらくは白星をだすことを目標に予想をしていくことになる。二ヶ月でためた競馬貯金をそろそろ引き出させていただかないことには、心中穏やかではなく、応援する心にも曇りが生じてきてしまう。

とりあえず今週は、競馬新聞の値上げにも、

「苦しゅうない」

と余裕の笑みを浮かべられるくらいの予想の的に伴う収支ブラスが白星か。貯金の半分くらいを引き出せたなら、大金星である。

## 金持ちの買い方

またやってしまった。

このところ関東の第八レースから最終まで予想してあるのだが、目が覚めたら第九レースが締め切られるところであった。このレースは買っていたらマイナスだからよしとしよう。だが第八レースは的中していた。

その後、第十レースでは、いつかやるんじゃないか、という買い間違えてワイドを逃す。ううむ。メインでは、ぐりぐり本命がスタート失敗。それはまあ仕方ない。ワイドはとっていたけれど、二着入線の馬を全く無視していたので、このあたりで満足するべし。

そして最終。大体一レースあたり五頭を選ぶのだが、本日は一番に選出した馬が来ていない。さっきのあたりもあるし、ちよつと買いたそう、と思う。どうせなら三連単なんかで……などといやらしい考えが浮かぶ。

もともと、仮想収支には、単勝、複勝、馬連、ワイド、三連複、馬単しか含まれていない。三連単は買い目が多くなるし、手を出せないからだ。仮想収支は全部で六十点になる。

はつと気がつく、なんと三連単を含めて六十三点も買っていた。しかし単複や馬単は買っていない。三連単を半分近く買っているのだ。まあ、いいか……と思ったのが大間違いだった。なんと、予想順位では一番、四番、二番の順番で当たったのだ。

ワイド三点と三連複をとっていた。本日の収支はほんのすこしプラス。一日をプラスで終われるなんていつ以来だろう……だが。

仮想収支と同じ六十点を買っていけば、倍以上になっていたのだ。人間とは、私とはなんとおろかなものなのだろう。

明日の予想もしてみたが、マイネルチャールズ、ブラックシエル、キャプテントウレ、フサイチアソート、アインラスクという順番になった。最終的には、馬体重が出てから決めるのだが、前日の予

想ではそんな感じなのである。

ううん。ブラックシエルの入れ込みが気になる。だが第二番手にいるから、よほどのことがない限り、買い目の選択に入っている第五番手以降には落ちていかないだろう。第六番手のベンチャーナイも気になるが、これもちよつと離れてのポジションだから、変わらないだろう。

ふと思う。もしも私が金持ちだったらどうするんだろう。

私はトトもロトも買うので、危機管理として、突然億万長者になつてしまった場合、というシュミレーションをよくやる。いきなり金持ちになり、人生を台無しにしないためのシュミレーションであり、決して妄想などというものではない。買っている限りは当たる可能性があるし、大部分がそのシュミレーションを楽しむための出費だから。

かの有名な宮本輝先生の小説の中にも出てくる。とある社長が、人生を賭けた一点買いをする。ン百万円。

私は以前、特に入れ込んでいる馬ではなく、完璧に『ゼツケンで買い』の馬を単勝一点一万円買いたことがある。最初は四倍だったオッズがあれよあれよという間に六倍を上回った。結局、一番で帰ってきてはくれたものの、もつとも長いレースだった気がする。決まるまで、ずっと猛烈な吐き気に襲われていたから。今後このような買い方はするものか、と固く誓った。

だが、もしも億万長者だったらどうするだろう。今の六十点買いの一点あたりの金額を増やすのだろうか。それにプラスして三連単のボックス買いなんてこともやってしまうのだろうか。当たった金額よりも税金のことが気になってしまいそうな気がする。競馬の配当は五十万円を超えると非課税ではなくなる。それもその馬券を買った金額しか経費と認められないので、すでに脱税しているのではないかとあせって調べてみたが、記録が残っているものに関して、課税対象ではなかった。

百円でも超えていたらどうしよう……と心配になつて調べてしま

うくらいである。それが大金になったときには、いつもはらはらしているのではないか。金の力であほほど三連単を買って、ミリオン馬券を当てたものの、ほとんど税金に持っていかれるなんてそれこそあほらしい。それに、絞って買って当たってこそ、楽しいものなのだ。

と、妄想はこれくらいにしておいて、明日、データに従うか、自分の気持ちに従うか……まあ、メインになるまでにちょっとした小金持ちになっていれば、何の問題もなく両方買っちゃうんだけどね。

## 野生の炎、再び

ときどき、

「この馬、きつといい馬」となつて追いかけることがある。以前書いたローレルアンジュは最たるもので、中央を引退し、地方に行つてからも見ていたが、如何せんまだ地方の馬券を近くで購入するすべがなく、重賞を人気薄で勝ったときには、うれしかったが、馬券を買えていなくて少々悔しかった。

テレビの予想に負けてはずしたワイルドファイアーも今では気になる一頭である。私の中では追える騎手でないとサボる馬ではないかと思ひ、今回は意図的に買わなかったら三着に來た。大野騎手、ごめんなさい。

ワイルドファイアーは、メジロライアン産駒なのだが、父と一緒に走っていたことがある。

観客動員数歴代一位の一九九〇年のダービー。アイネスフウジンが征する。二着にメジロライアン。十九着に中館騎手騎乗のワイルドファイアー。同じ馬名なのである。

馬名にはいろいろ細かなルールがあつて、二文字以上九文字以内というのはよく知られている。その他にも、明らかに広告的なものとか、言葉の意味と性別が異なるとか、アルファベットや数字をカタカナで表現しただけとかは禁止されている。中にはパリの会議で保護されているもの、というちよつと遠いところでのルールもある。一度使用された名前も禁止事項の中に入っている。

だが一度使つた名前が絶対につかえないわけではない。馬名の抹消から年数がたつていたりとか、細かい制限はあるけれど、同一馬名をつけることも可能だ。調べてみると結構いる。エルコンドルパサーもリンカーンもペールギユントも二代目だ。ディープリンパクトは世界中に三頭か四頭いたという話も聞いたことがある。日本のディープリンパクトがジャパンカップを勝っているため、国際保

護馬名となつたので、今後は使えないはずである。

中館騎手は前走でワイルドファイアーに騎乗していた。時を経て同じ名前の馬に騎乗するのはどんな気持ちなんだろう。それだけ長くジョッキーをやっているということに幸せを感じるのだろうか。先代がいなくなってしまうことに哀愁を感じるのだろうか。

なににせよ馬名には馬主さんの思いがこめられている。そして、「名前が可愛い」とか、

「初恋の人と同じ名前」とかで思いを寄せてしまう競馬ファンもいるだろう。私も親からもらった名前と同じ名前の馬をいつもチエックする。冠名に続く形で、ぱつと調べたところ七頭いるが、出走せず抹消が二頭、未勝利抹消が三頭、一勝で抹消が一頭、現役が一頭で一勝馬、といった成績である。ううむ、あまりいい名前じゃないのかな。

なににせよ、追いかけた馬はいつまでも追いかける。乗っている騎手が誰であれ、どこの競馬場にいるのであれ、思いをこめて応援する。それも競馬のロマンじゃないか。と、改めて思う。

来週はレインダンスが中山に登録している。名前も可愛いし、馬券もとらせてもらったし、いい馬だと思う。これは追いかけるしかない。

ああ、でも中山コースは初だし、休み明けなんだよねえ……

## データの穴

先週は、土曜日のレースで予想した五レースがすべての中するという快拳を成し遂げた。たまたま馬友にその予想を教えてあげたので、大変感謝された。調子に乗って日曜日にも五レース予想し、「これで当たったら、何かしらいただくわよん」

と言ってみたが、一レースしか的中せず、しかも取り損というやつをやったので、最終的にはそこまでの儲けではなくなった。大はずれの予想を送りつけたのに、責めないでしてくれた馬友、ありがとう。

それでもJRAのホームページで自分の成績を見てにやにやす。去年の今頃とは比べ物にならない。やったレースは去年の方が多いのに、的中数は今年のほうが圧倒的に多い。切腹に追い込まれそうだった負けの計上もようやく収まってきた。去年のこの時期にはすでに切腹用の遺書を用意してあった。

しかし、日曜日は全くだめだった。ハンデ戦があると、予想に倍以上の時間をとられた。それが二レースもあった。その上、途中で落馬負傷による乗り替りがあり、すでに買ってしまったレースの変更は間に合わなかった。

土曜日に調子がよすぎたせいもある。なんとも慎重になりすぎた感があるのだ。慣れないことがあって、体調もよくなかった。てつきり風邪をひいたかと思っただが、知恵熱だったのかもしれない。

よく分析してみると、データの予想は確かに当たる確率が高いのだが、大万馬券は予想できないのだ。今までデータで的中した一番大きな払戻は、三連複や馬単で二万円弱どまりなのである。大穴はデータでは見つけられないのだ。かと言って、現在の上位五頭を四頭にし、何かをプラスするとがくつと的中率が下がってしまう。

全体の成績を見ると、千円未満の払戻でも、欠かさずにとることが大切だということはよくわかる。去年とはそのあたりが違う。去

年は秋と冬に三連単の大きいところをとって、プラスに転じているが、それがなかったとしたら目も当てられない状態になっている。

それに今は三連単なんて、恐ろしくて手を出せない。なんとか点数を抑えて、勝ちに行こうと思いい、現在はワイド&馬単という作戦に出ている。ちょっと勝ちが増えてきたら、馬単に加算するか、または馬連も押さえるとい作戦で、地道に勝ちを、いや今までの負けを清算しているところである。大きく勝負するのはせめて今年の貯金をすべて下ろしてからだ。やはりしばらくは大荒れしたらあきらめるしかない。

そういえば、また競馬の夢を見た。出演者は武豊氏と他一名。誰だったかはわからない。若手の騎手を私の子供と勘違いして、ひ弱だとか、あれじゃ勝てないとか言われてしまう夢であまり後味はよくなかった。そこに『マコトスペリオル』という名前が出てきた。

夢の中では『弱い馬』の代名詞として登場していたのだが、そうでもない。現在まで二十八戦四勝二着四回三着四回。掲示板には合計十八回載っている。

二十八戦中、十戦は道悪で走っている。そして一番人気になったことは一度だけしかなく、そのときは負けている。これは私好みの穴馬ではありませんか。ただムラがあるだけに、データで上がってくるかはわからないけれど。

悪口とか言わなそうな武豊を悪者にし、頑張ってるスペリオル君を弱い馬にし、マコトに勝手な夢をみてすみません。と思っただけで、日曜日は武豊にだいぶやられてるので、ちゃらにしてください、と西の空に向かって思う。

あれ、スペリオル君は今週も意欲の連闘、登録ありじゃないですか。昇級の壁がどうでるかだけれど、ちょっと注目ですな。これでデータではあがってこなかったらどうしよう……ああ、負けを解消できていない愚か者の苦悩は続く……

## 自己分析とパット病

データでの予想も一開催分集まったので、自分分析をしてみた。検証したのは、中山第八レースから最終レースまでの五レース、八日間分である。一度最終の予想をしていない日があるので、全三十九レース。土曜日の成績は驚異的だった。単勝的中率は八十五パーセントを記録。半数のレースは、三着まで当たっている。特に第八レースは四回ともパーフェクト。だが、一回は馬連単では取り損だった。他の分析から結論付けると、第八レースが四歳以上一千万以下のダート戦で千二百メートルだと勝負にでるべき、ということである。

「よし!」と思ったら、今週は障害レースだった。残念。

しかし、土曜日の勝ち分を日曜日に食いつぶしているのは明白だ。土曜日の予想はたつぷり時間をかけられるが、日曜日の予想には時間が足りない。やはり、分析が大切なのだろう。日曜日はよっぽどでなければ、見るだけにしよう、と固く誓うが、今週はGIなのである。うーむ。

高松宮記念といえは、

「また、武にやられた……」

アドマイヤマックスが思い出される。彼以外の掲示板にのった馬番はすべて持っていた。画面の前で絶叫したのを覚えている。

ときどき牝馬が活躍するので、注目しようと思っただけれど、今年は一頭登録があるだけ。ちょっと残念だ。だが、武豊騎手、安藤勝己騎手、藤田伸二騎手がドバイへ遠征。乗り替りもあってちょっと面白いかも。全的中した覚えのないレースなんだけどね。

以前、馬券を頼まれていたお客さんが、自分でパットをはじめた。もう頼まれた馬券を買い間違えてときどきするのはなくなっただけが、パット病にかかっている模様である。私をはじめ、私の周りだけかもしれないけれど、この病気にかかる人が多い。

とっても便利なんだけれど、いくつかの問題点がある。まず、勝手に換金してしまうことだ。競馬場で馬券を買っていたのなら、はじめから予算を決めて、当たり馬券は最後に払い戻す、という『勝ち確保』または『負けセーブ』ということができる。だがパットではすぐに換金されてしまい、払戻金まで次のレースにつき込めるという状態になる。それは本当に便利なのだが、最終レースが終わったときに、

「あれ？結構とつたと思ったのに……」という事態が起こる。

さらに、オッズ投票の機能。オッズを見ながら買ってしまうので、  
「あれ……あんまりつかないなあ」とか、

「こつちのほうがおいしいじゃない」なんていうオッズの魔力に負けてしまう状況が起きる。

そして、画面で買うことによってお金の感覚が狂う。

この三つを発症し、実はあんまり予想できていないレースにまで手を出してしまう症状を、仲間内ではパット病と呼んでいる。この症状はATMの前で自覚することが多い。入金してばっかりだ、ということに気がついたときに、やばいかもと思うのだ。だからパットビギナーズラックで自覚が遅れると、自覚したときには相当レートが上がっていて傷が深くなっている、という場合もありえる。私は幸いビギナーズラックがなかったので比較的早期に気がつき、買いかもつい最近確立したので、なんとか病を克服できたと思われる。お客さんにも注意は促してみたのだが、やはり自覚症状がでないとなかなか治療できないようだ。

しかし、予想は楽しい。当たるともつと楽しい。もともと分析するのは好きなので、数字がたくさんあるとわくわくする。が、表計算なんて予想をはじめてしまったので、なかなか競馬場に足を運べない。パソコンと一緒にいたいのだ。

克服したと思ったけれど、これはまたパット病の違う症状なのかもしれないな、とぼんやりと思う。

自覚症状はまだないらしい。

## 試行錯誤

試行錯誤が続いている。

タイムについて検索していたときに、スタートからの三八ロンと上がり三八ロンの差で、予想を導き出すという方法について書かれたページを見てしまった。これはよい参考になるのかも。

例えば逃げ馬は、最初にとつたアドバンテージを守りきればそれで勝ちになる。追い込み馬は最初にとられたアドバンテージを取り返せば勝ちとなる。と言ってしまったえば簡単なのだが、これを導き出すとするとややこしいのである。

レースのペースが速いと、追い込み馬でもはじめの三八ロンがひどく速くなり、上がりの三八ロンが遅くなる。だが、前に行った馬たちもハイペースに疲れているので上がりの中はもつと時間がかかり、結局アドバンテージをひっくり返した追込み馬が勝つたりにしている。うーん。

そのレースごとに見ていけばいいのだろうが、それには莫大な時間がかかる。そのページではあらかじめ、ペースやコースなんかで大体の誤差を埋める表を作ったのだが、情報が古くそのままでは使えそうにない。自分でデータを取るしかないか……

いや待てよ。

考えすぎるのもよくないのではないか。データで勝率は上がった。自分なりに点数をつけるときに、ちよつと遊びがある。厳密にすればするほど出てくる誤差もあるのではないか。競馬に絶対はない。例えばジョッキーのテンションなんて私にわかるはずがない。

「最近、ノツテル感じがするし……」とか、

「このレースは連覇したいでしょ」とか勝手に慮って、ちよつと点数をつけたりする。それがよい方向に向いている事実もある。

予想は限りない。だから楽しい。

それでもそのとおりにはならない。例えばスタート時に「ちやこ

ちやして脚をどこかにぶつけるかもしれないなんてことは予想できない。誰もノーリーズンから武豊騎手が落ちるとは予想できなかっただろうし、フィールドルージュが出血するとも予想できなかっただろう。

だから楽しくて悔しい。

さて、高松宮杯ですが。

まだ私の予想計算表にとって完璧にデータが出てるわけではないのだけど、今あるデータでいうと、スズカフェニックスは群を抜いている。穴党としては、最内で馬群に飲まれて……なんていやらしい展開予想もあるけれど、それでも飛びぬけてしまっている。ううむ、固く収まるのか……

次に来るのがスーパーパーホーネット。いつか買ったような気もするが全然全く思い出せない。ただお父さんのロドリゴデトリアーノの産駒でゴールデンロドリゴには、同じ中京のこの距離で万馬券を取らせていただいた。思い返せばあれが、競馬で半年引きこもりの機会を与えてくれたきっかけである。ホーネット君は休み明けともしかしたら左回り嫌いかな……っていう点がちょっと気になるけれど、それからファイングレンかな。キンシャサノキセキは左利きかもしれないし、ペールギュントは人気を落とした今回が買い時か。ローレルグレイ口は外枠引いたし、持ち時計ではエムオーウイナーなんて大穴も……うーん。

所詮GIなんて、どの馬が来てもおかしくないのだ。だって、ここに出られるまでに百戦錬磨、賞金を重ねてきているんだもの。なので、私は競馬初心者の方には、GIへの参戦をお勧めする。そして、何でもいいからぴんと来た馬を買おうとよい。その馬が勝っても負けても、そこに参加しているだけですごいんだ、といつか知ることができるだろう。その馬を覚えておけば、詳しい輩にあったときにも話のネタにもなるはず。

最後に、前回書いた自分分析において、メインレースの成績はすこぶる悪いことを付け足しておきます。

くすぶり脱出!?

初めて、ここに載せた馬で掲示板を独占したというのに、私は馬券にならなかった。なんて不覚。というより、エムオーウィナーが気になって仕方なかった。

もともと日曜日の成績が悪いので、それほど熱く勝負しようとは思っていなかったのだが、

「ぜひ予想を」といわれていたので、五頭ほどチョイスしてお知らせした方がいた。それは前日での予想で、五番目に選んだキンシャサノキセキが、ローレルゲレイロと非常に接近しており、当日の予想では逆転していたので、前日予想でお知らせしておいてよかったというところだ。ちょっとは儲かっていらっしやれば、これ幸いである。

夜中にやったドライの結果も気になっていた。

ウオツカは検討したと思う。不運にもダイワスカーレットという強敵と同じ年に生まれてしまったけれど、彼女は彼女でしっかり強い。デーブインパクトと同じ年に生まれてしまったシックスセンスのように。というと、馬友には「シックスセンスはGIとってないでしょ」といわれてしまった。そのとおりだ。

しかし、カーリン号は強かった。日本にくる外国馬もそうだが、みんな筋肉隆々である。乗馬の馬のようにしっかりしている。それに目も怖い気がする。

競馬好きの中には、

「馬の目がかわいい」という人がいるが、パドックで見る気合の乗った馬の目は決して可愛くない。あきらかにこれから何がしかの戦闘に向かう戦士の目をしている。私がコーヒー好きのせいか、調度曲がり角あたりでパドックをみているからか、馬ともよく目が合うが、

「なんだよ」といわれている気になることがしばしばある。私は雑食動物なので、負けるものかと睨み返すけれど、時には食われてしまいそうなくらいがつつりにらんでくる馬もいる。まあ、真意は、「今日、調子悪いんだよね」とか、「食べるもの持ってない？」とかたわいないメッセージなのかもしれないけれど。

そういえば、初めて大井に行ったとき、クラス分けなんかもわからなかったから、目があった馬から流したら、しんがり負けだったことがあつたな……

ある馬友の本日のイチオシはアドマイヤスバルだったが、勝ちきれなかった。そのレースの私の狙い目は二着馬だったが、一着の馬を全く無視していたので個人的に被害はなかった。かなりイチオシだったので、今頃さぞかしへこんでいることだろう。そつとしておこつ。

馬友の中には毎週予想を送りつけてくるのだが、外れている、という輩がいる。そして取れなかったときは音沙汰がないのに、とつたときにはレース直後にメールをよこし、私にとれていないという

と、  
「あんなの取れて当たり前。せつかく教えてやったのに、馬鹿じゃないの？」というのである。

腹も立つし、よくない競馬ファンの典型と、私は位置づけさせていただいているので、絶対に予想は教えてあげない。馬券が当たったことも二週間後じゃないと教えてあげないことにしている。私も相当のワルである。

とにもかくにもとんでもない予想を配信したわけじゃなくてよかった。くすぶりを脱したのであるうか。

競馬のくすぶりは脱しても、その他の運勢に関するくすぶりはまだ続いているような気がする。こちらの予想を立てるには、データが少なすぎる。いや、スタート直後に躓き、コーナーごとに他馬に寄られ、コースには予期せぬ穴が開いており、突然前の馬が落馬す

るといふような具合か。平地のレースじゃない気もする。  
人生、予想できないことが多すぎるのである。

## 予想手順

うっ、現在土曜日の午前零時を三十分ほど回ったところ。競馬新聞はまだ鞆に突っ込んだまま。

実はいろいろ忙しかった上に、久しぶりに執筆活動への並々ならぬ意欲なんてものが湧いてしまい、そして久しぶりに会った妹にご飯をご馳走してもらってしまっただけで、競馬予想へのモチベーションがいまいち上がっていない現状なのである。

「穴党です」なんて宣言したくせにデータでの予想を始めてからは全く堅い予想ばかりになってしまい、しかも予想がメインで競馬人生なんて全く振り返っちゃいけないようなエッセイになってしまっている。これではいけないと思うのだが、なんだろう、思考能力が若干停止状態のあるのか、あまり面白エピソードが思い出せない。たぶん、いわゆるスランプなんだろう。

それでも書き続けるのが、スランプ脱出の近道と信じているので続けていこうと思う。

というわけで、今回は今から私がどうやって予想するかというお話。

まず、表計算に出馬する馬の名前を枠順に沿って書き連ねる。そしてインターネット上で利用しているサイトから、そのコースの癖を書き出す。『内枠有利』とか『パワー重視』とか時には『どの産駒の馬が勝ち星が多い』なんてことも書いてあったりするので参考にさせていただく。

次は新聞。私は一番安い競馬新聞を愛読している。蛍光ペンを片手にチェックを始める。まずは調教。『気配』と『動き』に関しては数値化されているのでそのまま表に入力して利用させていただく。読むのはその横のコメント。チェックを入れるのは『この一追いで変わり身が見込める』という内容。あとでちょっと点数を加算する。その後は一頭ずつ、調教師であったり助手さんであったりがコメ

ントしている欄を読み、馬具の初装着やレースでの位置取り、前走の負けの要因などを探る。ふむふむ、なるほど、と一通り目を通すが一番重要視しているのは取材したトラックマンの一言コメント。『色気あり』とか『一発に注意』とか『大穴はコレ』なんていうのが加点の対象となる。

後はそのコースにあつた脚質だとかコースや距離の実績、乗替がリーディング上位の騎手であるか、または初めて乗るのかどうかなどを自分で点数化し、表をうめていく。最終的にはそれを偏差値換算して順位を決める。

正直言つて面倒くさい。ハンデ戦の場合には、持ちタイムに斤量を加味して順位を出す。そのコースに持ちタイムがなければ他のコースのタイムにコースのロスやらなんやらを計算して出す。もちろんそれよりの資料も自作。毎週毎週これをやっている競馬関係の方には本当に頭が下がります。私なんてがんばつて五レースだもの。

ちなみに今一番重視しているのは、やはりそのコースにおける持ちタイムだ。それがあつたということは、そのコースの経験があるということになる。そのタイムが上位なら、それが何年前のものであると重視する。コースが得意ということだつてあるから、

「こんな前の時計、老いぼれた今では使えねえぜ」と軽視しないことにしている。

妹の同僚が自分への目標として『勝ち負けにこだわらない』という自分を自分のデスクに貼り付けているという話を聞いた。私は多分、勝ち負けに非常にこだわる人間だから、その同僚にもものすごく親近感を感じた。競馬はどうどうと勝ち負けにこだわられるもんね。だからきつと好き。

ロバート・デニーロのことを

「デムーロがさあ……」

と話していたら、娘に

「ママ、デムーロは騎手」

と突っ込まれてしまった。でかした中学生。碁、新人高校生。君の

せいでママは近年まれに見るほど貧乏です。あ、君のおかげさまで  
かな。

なにせよ、クラシックを前に一息……いれず予想に励みますか。  
まず第一に自分に負けないようにしなくっちゃ。

とはいえ、このお金、使っても大丈夫なのかな。ま、明日倍くら  
いになるってことで。

## 次の世代へ

どうやって予想するかと書いていたが、結局今週は予想すらしなかった。

前日妹と食事をし、ちよつと考えることがあった私は、投稿してから考えてもどうにもならないことをうだうだ、あーでもないこーもできたなどと後悔していた。

そこにお久しぶりになる方からお電話が入り 午前三時前  
小一時間ほど近況報告やらお説教やらを食らい、すっかりやる気もなくした私はひたすらぼーっと時間を過ごし、ぼんにやりと観戦するにとどまったわけです。仕事柄午前三時の電話は別に珍しくも迷惑でもなく、どちらかというと精神的には救われた感じだったけれど、予想モードには切りかわらず。仕事場では、大阪杯の予想を聞かれて

「いやあスカーレットは斤量お得だし。アサクサキングスはいつも買わずに失敗するから押さえますね。あとエイシンデピュティの斤量もお得な感じですね。パスポート君はここ、正念場だと思うし……」

なんて対して的外れではない予想を展開していたけれど……  
だからと言って買わなかったことを後悔もしなかった。それよりもダービー卿のほう不思議だった。

私がテレビをつけたときにはすでに横山典弘騎手のインタビューが始まるところで、三連単が百万馬券だという。ダンスフォーウィンが最下位人気なのが私には解せない感じだった。まあ、実際に買えたかといわれれば、別の話。

横山騎手はいつもよりなんだかうれしそうで、先週の落馬からの復帰について喜びを語っていた。それに息子さんが競馬学校に入學したと。

「へえ〜ノリの息子もいたんだあ」

わが愚娘も私のたつての希望で、騎手課程二十七期を受験している。  
「横山君でいた？」

と聞こうとしたら、その前に見ていた映画がいまいちだったのか、椅子の上でくたあつとなっていたのであきらめた。

完璧な記念受験だったにもかかわらず、娘はせつせとダイエットに励んでいた。試験当日、まず体重測定があり、そのときに四十四キロ以上の体重があった場合、以後の試験は受けることすらできない。

「体力やその他のことで落ちるのは仕方ない。でも体重と筆記試験でおっこちるのはやめてくれ」と言っていた。

体重をクリアした娘はその後の試験を受ける。体力測定の試験では懸垂をやったらしい。全くの下調べもせず受けにいったので

「懸垂つてなにさ」

と思いつつも、教官に身体を持ち上げてもらい、バーにつかまっていた。結構重いな

といわれたらしい。本人的にはがんばったのに、ちょっとショック。もちろん、一度もできないまま、ぽてりと落ちた。

女子は見渡すところ娘以外にも一人だけで、待ち時間などはそのこと話をしたようだ。東京競馬場の芝の長さなどについて話す彼女を

「ひよえ〜」

と思つて眺めていたらしい。面接では、他のみんなが物凄くしつかりしたことを答えているのに、娘はたいした答えができず、これまた、ひよえ〜となつたらしい。

まあ、予想にたがわず、落っこちただけだけど、一緒に面接を受けた男の子が一人受かっているようだった。

「たぶん、こんな名前だったと思うんだよなあ……」

青森の牧場の息子さん。そういわれれば、そんな牧場聞いたことあるな、という名前だった。

母がおかしを買って帰宅したので生氣を取り戻した娘に横山君を聞いてみたが、

「うーん、覚えてないなあ」

不合格のそつけない郵便物を受け取ってからというもの、落馬したらスーパールールのように跳ねてっちゃうんじゃないの？と思われるほど丸くなった娘はせんべいをばりばりやりながら答えた。

来週は桜花賞。私はリトルアマポーラに期待。

「ポルトフィーノでられるかなあ……エアグルーヴ好きだったんだよね」

誰かがそういつていたのを思い出す。親から子へ、競馬は思いをつないでいく。

わが娘はこれからどんなふうに競馬とかかわった人生を送っていくのだろう。母から娘へ、JRA銀行へ貯金の日々？……それはいやだなあ。

## ギャンブルは儲からない

うーん、せつかくG1の季節が到来したというのに予想に気合が入らない。

新聞買いにいかなくちゃ……と思いつつ、映画を立て続けに二本も見て、なんだか競馬を避けているようだ。時々この季節はそうなる。皐月賞やオークスの思い出はわんさかあるのに、桜花賞の思い出が少ない。去年はバスルームの中からレースを見たような気がする。

娘にさんざん

「ダイワスカーレットはブルーリッジリバーのいとこだよ」と言っておきながら、ウオッカからの馬単を買っていた。

新聞だけは買っておこうと思ったら、今週から値上がりしていた。なんとなく、釈然としないが、黙って買っておく。情報は大切。

思い返せば去年の春は大荒れのG1だった。そんな中で桜花賞は堅く収まったレースだった。ダイワスカーレットは強かった。いつまでたつてもウオッカが届かなかったのを、じつと見ていた。ブルーリッジリバーのいとこで、安藤勝己騎手は娘と誕生日が同じ。コレも神様のお告げだったのかも。見逃した。

誕生日馬券といえば、スズカマンボの春の天皇賞が、私の誕生日馬券だったんだけど、私は東京競馬場のモニターの前で愕然としていた。たいてい大きなレースでは誕生日馬券を買う。当たればラッキー当たらなければ厄落とし。が、そのレースに限って勝っていないかった。馬連八万五千円なり。

「とつたでしょ！」

という馬友たちからのメールは片っ端から消去した。

基本的にギャンブルは儲からない。馬券だって、買った瞬間に二十パーセントから二十五パーセントは胴元のJRAに持っていかれている。まあ、そこで働いてくれている人たちのおかげで競馬が滞

りなく開催されるわけだから、一概に文句も言えないけれど。残りのお金を馬券を買った人間が分け合っているのだから、そうそう儲かるわけがない。

ちよつと余談になるけれど、TOTOビッグのキャリアオーバーが一向に減らない。それはたぶん、設定に問題があるのではないかと思う。コンピュータが勝手に勝ち負けやそうでないかを選ぶとしても、基本的にサッカーはホームのほうが有利だろう。その点が加味されていないのではないか。だからなかなかあたりがでないのではないか。競馬でランダムな馬券がたととして、中山芝なんかで外枠ばかりが選ばれていたらちよつとがっかりする。TOTOでアウェイの勝ちを意味する『2』という数字があまりにも多いとなんとなくがっかりするのは私だけだろうか。まあ、だから高額の当選金になるということなんだろうけれど、なんだかふにおちない。

儲からないはずのギャンブルで、知り合いの社長が毎週勝つているという人に会った。

「金持ち買いでしょ？」

単勝や複勝にン百万賭ける賭け方だ。それが違うというのだ。大体一レースに十万円しかかけない。そして軸馬が五六番人気の馬だというのだ。うまい。それはとつても上手い。弟子にして欲しい。コツを聞くとやはり情報を集める量が半端じゃないという。たかが五十円の新聞代の値上げでがたがたいつていてはいけないのだ。

そんな輩がいるのだから、中途半端にしか情報を集められず、なんだかんだ人気からいつて結局当たり損なんてしている一般市民にはそうそうご褒美は回ってこない。

日曜日には、私が最後のガーネットステークスを見に行ったことが羨ましかったらしく、絶対に中山までいくと決めていた馬友が、やっと出陣できるらしい。いい予想をプレゼントできればいいんだけど、なにぶん日曜日は苦手だから、こそつとお土産だけ頼もう。

最終的に出走の三十分前まで検討するけれど、桜花賞はやはりリトルアマポーラからいく。後はブラックエンブレム、オデイル、

トールポピー　　人気だろうなあ……そして人気を落とすだろうポルトフィーノ。初芝のマダムルコントが、中山出陣の馬友がファン  
の角田騎手騎乗でメジロライアン産駒というのがちよいと気になる。  
これは偶然か、はたまた啓示か。

その前にニュージーランドトロフィーがある。こっちはゴスホー  
クケン、ダンツキツスイ。穴っぽいところからはサトノプログレス。  
ちなみに去年はムラマサノヨートーからいった。ちよっと先物買い  
しすぎた。一レース後だったら……うーん。

今年は荒れるのか荒れないのか。とりあえず、誕生日馬券は買い  
忘れないようにしよう。あ、お土産にそれ頼んでおこうつと。

## 桜花賞

ゴスホークケン君は見事玉砕し、サトノプログレスが勝馬となっただけれど……

桜花賞、ポルトフィーノが回避し、さてどうしましょう、となつてしまった。

こんなふうには、レースを引っ張っていくだろう馬が回避すると本当に困る。ハナをきるであろう馬のペースでレースは進むから、全体的な展開の予想が狂ってしまう。残った逃げ馬は逃がしたら怖い吉田豊騎手騎乗。うっん、展開が読めない。なんだかんだいって、リトルアマポーラとブラックエンブレムの三頭で決まりだろう、と思っていたので頭がまわらなくなってしまった。

中山にいく馬友に、やはり誕生日馬券だけお願いするのは悪いかな、と軽く予想を送っておいた。そうしたら、

『今日の本命はニュージールランドトロフィーの二着だった馬なんだよね』

と抜かしやがった。こやつ、ひとの予想を聞いてばかりで、自分の予想はそういえば言わないな、と思った。毎日杯のときも

『今年の一押し！』

と伝えてきた馬は二番人気で、見事玉砕。しかし、その前のレースの本命が十三番人気で二着に来た馬。そつちを教えてよ、てな感じ。データで解析してるからそういう本穴はなかなか予想できないんだから……全く、けちんぼである。

桜花賞の思い出を探そうとJRAのホームページで過去のレースを見てみた。過去五年分。ステイルインラブ、うわ、幸くん、わかっ！ここから三冠馬になるんだよね……ダンスインザムード、そうそう、藤沢厩舎快進撃の年じゃなかったけ？ ラインクラフト、この祐一のインタビュー見たなあ。確かラインクラフトが競馬雑誌の表紙を飾ったやつ、模写した覚えがある。キストウヘブン、これ

キス、キス、恋馬券だったりして、っていったのに買わなかったやつ……そして去年。そうそう、ダイワスカーレットよりアストンマーチャンのほうが人気で、私はばっさり切ったんだった。

なんだかんだいって、全部見ていた。そして六年前の桜花賞は、私映像持つてる。正確には私でなく、娘が持っている。ブルーリッツリバーが二着に入っているのだ。そういえばそのときの騎乗も四位騎手……

何をかくそう、本日

「エーソングフォー、エーソングフォー」

と文字通り歌うように口ずさむ夢を見て目が覚めた。なに、なに、またお告げか、と新聞とにらめっこしてみたけれど、買える要素がない。うぬぬ。でもプリキュアちゃんの前例もあるので、複勝は抑えておこうと思う。あれ、そういえばウオッカもここまで牝馬相手に負けなしできたんじゃないかな。リトルアマポーラと同じく

……

過去五年のどのレースを見ても、サクラが咲いていた。今年ももう散っているのではないだろうか。桜花賞がいつまでも『桜花』賞であるように、ちょっとだけエゴになろうと誓う。

しかし、買い目はどしよう。考えれば考えるほど、悩む。でもまず第一に、無事に帰ってきて欲しい。ポルトフィーノの穴はエアパスカルで埋めるとしよう。レーディングはだてじゃない。たぶん。

## おめでとう

桜花賞、全くはずしてしまった。最後の最後でソーマジックは『買い』だったけれど、リトルアマポーラの一着は信じて疑わなかった。四コーナーを曲がったところで、私は小さなテレビの画面に向かい、知っている限りの汚い言葉を吐いた。

もう届かない。なにが抜け出してくるのだろう、と思っていたら、小牧太騎手。まだ出走も確定していない水曜日、

「騎手で買いだしたら、小牧かなあ。最近のつてる気がする」

自らの発言を思い出したが、実際の予想では、一番初めにこないなとふんだ馬だった。

実は私、園田時代に彼に会っている。あんまり記憶にないんだけど、その後、園田の調教助手さんとしばらく結構話す機会があつて、知った。地方競馬の関係者さんたちが集まっていたんだけど、職業は教えてもらえず

「豆腐屋です」

といいはっていた。みんな小柄な豆腐屋さんだなあと思っていた。

多分、小牧騎手は二十六歳くらいだったはずだ。中央競馬には一度行ったことがあつたので、調教助手さんに、園田での馬券の買いかたのコツを聞いたら、

「小牧兄弟から買えば間違いはない」

といわれた。その頃から園田のエキスだった。インタビューで、涙を流し

「全国のファンの皆様、お待たせしました」

その言葉に、もらい泣きしそうだった。

地方から中央ジョッキーになったといえ、安藤勝己騎手、岩田康成騎手がいる。二人ともデビューの年から勝ち星は年間百を超える。小牧騎手が百勝を上げるまでに四年かかった。でも安藤騎手は四十三歳で中央のジョッキーになった。小牧騎手は現在四十歳であ

る。そう考えれば、まだまだこれからなのかもしれない。

最近競馬にはまったという女性に出会った。よく大井にいつていうという。中央から競馬に入った私にはちょっと意外な気がした。

「内田博幸騎手が好きで」

と理由を語った。そこから中央競馬にはいり、地方にはないジャンプが楽しいという。来週は中山グランドジャンプを見に行くといっていた。

私も障害は嫌いではない。だが競馬場に行ったときには、調度お昼ご飯の時間にあてている。しっかりとした馬体が歩くパドックを見下ろしながらそばを食べる。以前は勝負した。穴を狙っていてとつたにはとつたけれど、人気の馬が落馬したためだったので、あまり気分よくはなかった。今は観戦にとどめる。全馬が無事に飛越すると、拍手が起こる。あの雰囲気はいいと思うし、好きだ。馬券よりも、全馬が無事で帰ってくるとうれしい気分になる。

三寒四温、今年は月曜日と金曜日に雨が集中しているらしい。今週も週末の雨で、馬場は悪いだらう。みんな無事に帰ってきてほしい。多分、小牧ジョッキーの騎乗となるスマイルジャックにも期待だ。

## 臯月賞

臯月賞といえば、やはりデーブインパクトの年。

私は府中のパークウインズで一人でターフビジョンを見ていた。実は私、ちよつとむかづいていた。

当時私が購入していた競馬雑誌には『誌上パドック』として有力馬の写真がでていたのだが、シックスセンスの写真が載っていない。どういうことだ、と憤っていた。

まあふたを開けてみれば十二番人気だったのだから仕方ないけれど、京成杯は二着だったのになんて見所のない雑誌なんだろうと思っていた。

そのとき私が買っていたのは、デーブインパクト、シックスセンス、アドマイヤジャパン、スキップジャック、ダンスインザモアの五頭で三連単のボックス。そしてデーブインパクト、シックスセンス、ダンスインザモアの馬連ボックスだった。正直、オッズは見えていない。ゆるぎない信念でその馬券を手に、まだ小さかったターフビジョンの向かって左側に陣取り、一人でレースの開始を待っていた。

シックスセンスには出遅れ癖があった。四位騎手が

「ダービーまでには治るように、競馬を嫌いにならないようにやっていく」

といった記事を何かで読んでいた。だから多少のんびりゲートを出ても大丈夫だな、と思っていたら、のんびり出てきたのはデーブインパクトのほうで、私はこの時点で馬券を獲ったと確信していた。結局ゴール前ではすっきりとさされてデーブが勝つけれど、私にとってはシックスセンスが二着にすることがうれしかった。パークウインズはざわめいていたけれど、それはデーブの見事な差脚についてだとばかり思っていた。

「がちがちだな。たいしてつかないだろう」

そう思っていたので、払戻がターフビジョンに映し出されて、私はまたちよつとむつとした。シックスセンスの複勝が千円超えてるってどういうことですか？ 馬連も六千円近くついている。なんでそんなに人気がないのよ？

まあ、とつたのだからよしとしよう。せつかく、高性能のカメラつき携帯だから記念に馬券の写真でも撮っておくか、と私はターフビジョンの前の手すりに馬券を固定して、上手く写る角度を探していた。右手から三人組の男の子が歩いてくる。

「デープはあるけどさ、二着ってなんだよ」

「シックスセンス？ そんな馬いた？」

「こんなのとれないよな」

チャララン、というカメラの撮影音で、その三人はぴたりと黙った。とれなかった馬券を悔しがっているそばで、女一人で来ているやつが、にやにやしながら馬券の写真を撮っている。それが皐月賞の馬券だと容易に想像できたはずだ。悔しかっただろう。

「へへん。私は獲ったわよ」

と心の中で言いながらシャッターを押していたので、そのオーラも伝わったことだろうと思う。結局、お財布もほくほくになって帰った。

さて、今度の皐月賞。心情的にはレッツゴーキリシマとスマイルジャックを押ししたいけれど、距離の経験がない。マイネルチャールズは人気になるだろうけれどはげせない。後はノットアローン、サブジェクト、ダンツウィニング、フローテーションあたりがちよつと気になるかな。まだちゃんとデータ解析はしていないけれど。

最近、雨続きで馬場がよくない。このレースで『今年三冠に挑めるたった一頭』が決まる。できればびかびかの馬場でやらせてあげたいけれど、そうはならないだろう。また心から全馬の無事を祈るばかりだ。

## 穴を掘ってもはいりたい

やってしまった。

この週末、スロースタートだったものの、好調の波が来ていた。土曜日の第十レースがその日の私にとって最後の勝負だったのだが、三連単を当てる。日曜日にまじめに予想したのは第七レースと第十レース。どちらも完璧な中だった。

そして皐月賞。データから検討した結果、ブラックシエル、マイネルチャールズ、キャプテントウレ、タケミカツチ、ノットアロンの五頭を選び出した。中でもキャプテントウレは久しぶりに買った競馬雑誌の誌上パドックに載っていなかった。ピンときた。

だがマイネルチャールズが残りの三頭に負ける気はせず、キャプテントウレとの二頭を一二着に固定し、三連単をがつつと買った。そしてもしものために、五頭の三連複をボックスで買い足しておいた。

十八キロのマイナス体重で、人気が少し落ちる。しめしめ、と心の中でにやりとする。私の持っている情報によれば、十四キロくらいはマイナスで出走するはずだったので、評価を落とす対象にはならない。テレビの中でも

「十八キロのマイナスが気にかかります」

なんて言っている。持つべきものは情報だな、と思った。

返し馬を見ていると、ブラックシエルがどうにも落ち着きがなく見える。これはまずい、と思い、一二着固定の三連単を総流しした。一点百円、三千二百円也。とればたいしたことない。もしものボックスもある。完璧に高を括っていた。

スタートから、ぽんと抜け出したキャプテントウレはそのまま一着で帰ってきた。が、マイネルチャールズはハナ差の三着。うう、悔しい。だが、直線最内に持ち出した柴田騎手の好判断、好騎乗である。心から拍手を送った。

そう。だって私にはその三頭の三連複もある。いつもの買い方をしておけば、馬単も、ワイド三点どりもできたけれど、ここはG1だ。ちよっと頑張っておかないと。」

「いくらついたかなあ」

「と何気なく、買い目を再度見直す。」

「ない。」

何度見てもない。  
大本命と位置づけた『06』の数字がボックスの中にどこにもないのだ。そして変わりにマークした覚えの全くない『05』の馬番がきらきらと光っている。

やってしまった。マークし間違えたのだ。手はがくがくと震えだし、悔しさがこみ上げてくる。G1だとはしやぎすぎている。三連単を買うことに必死になっていた。

「はあああああ」

すぐに切腹したい。タケミカツチに届かなかった松岡騎手に恨みを抱き始める。いや、でもおめでとう川田騎手。松岡騎手も位置取りからあれが精一杯だったとは思う。そうだ、お祝いにこの手を差し上げようか……なんの役にも立たなかったのだけれど。

その後、自暴自棄になり、全く予想もしていない中山と阪神の最終に手を出し、自ら傷を広げた。二日間で七レース予想し、五レースは完璧な中だったのにもかかわらず、勝ち分はたったの千円。これ以上ない『とほほ』である。

かくして、今回の皐月賞は忘れられないレースとなった。そして追いかける馬リストがまた少し長くなった。

## 東京競馬場参戦

天皇賞、惨敗。

JRAにそのかさ始めたブログにどこに消えたのかというよ  
うな馬の名前を挙げてしまい、反省。もしもそれを参考に馬券を買  
ってしまった方がいたら……胸が痛む。スズカマンボのときの誕生  
日馬券の二の舞にならないように、必ず買っぞ、と心に決めていた  
が、そこまで馬番が届かなかった。

前日の府中に参戦していた。出かけに霧雨だった雨は上がり、雲  
はどんよりと立ち込めていたものの、街中とは違う空気がある。ゴ  
ールデンウィークのため普段の天候の悪い土曜競馬よりもレジャー  
な雰囲気か漂っている。ほぼ初競馬の方を引き連れ、まずは電光掲  
示板の前で、単勝複勝馬連……からレクチャーを開始。あ、その前  
にたまたまパドックにいた武豊氏をこちら側からご紹介。

馬券は購入せず、第六レースを観戦していた。

直線で柴山ジョッキーが落馬。後続の馬の足元で転がるさまは痛  
ましい。

落馬した場合、動いてはいけないという話をどこかで読んだ。馬  
は障害物をよける習性がある。下手に動くと逆に踏みつけられるは  
めになる。とはいえ、直線でフルスピードになっているときだった  
ため、上手くよけ切れなかったのだらう。

馬券を買っていなかったこともあり、柴山騎手の動向ばかりが気  
になっていたが、斜め後ろの甲高い女性の叫びが耳につく。

「差せ、差せ」

どうやらグループで来ていて、女性は彼女一人。そんなにすごい馬  
券になるのかな？ と確かめると、一番人気と二番人気の叩き合い。  
競馬場で声をあげるのに一定のルールを持っている馬友がいる。

明らかに脚が残っていないのに、差せといってはだめ。かっこい  
いのは人気薄がうまく上位に食い込むとき、しかも歌舞伎のごとく

絶妙のタイミングで騎手の名前を叫ぶ、というものらしい。

そこまで厳密にルールはないと思っっているけれど、あのお嬢さんが二番人気からの馬単をあつく買っているのではない場合、あまり粋な叫びではなかった気がする。その後も蘊蓄らしきことをお話になっていたが、同じグループの男性たちも少々引き気味だった。

レースを見終えて、パドックのいつもの場所に行き、馬を眺める。「どつという馬が調子いいの？」

返答に悩む。パドックの外側をゆったりと歩いているのがよいらしいというセオリーをお伝えする。首を下げてとか時折尻尾をふるとかいろいろ自分の好みをくっちゃべりたいが、ぐつとこらえる。今まで初心者に教えている人を見てきた自分が格好悪いなと思ったことを繰り返すのは嫌だ。

騎乗したジョッキーを紹介する。

「あの人が、この前の皐月賞を勝った人。あの人は関西の所属だけれど今日の青葉賞のためにこっちに来てている人……」

武豊氏以外に名前がわからない人に説明するにはこういう説明のほうが親切に思われた。

結局、馬券はほとんど買わず、いつもいくお蕎麦屋さんでそばを食べたり、直線の坂を見たり、競馬場の中をたらたら歩き回っていた。

最終レース、私は戸崎ジョッキー騎乗の逃げ馬を本命に買っていた。いくつか前のレースでも上手に逃げて二着に残っている。それが発走直前に馬体検査で除外となった。場内からため息が出る。

「一番人気の馬なの？」

すっかり返し馬に楽しみを見出した同伴者が聞く。逃げ馬が除外になるとレース自体が大幅に変わってくる。ペースを作る馬がいなくなる。または変わる。と流れが変わり、せつかく立てた予想が全く変わってしまうからだと言明した。推測通り一番人気は馬群に沈んだ。

いつもとは違う形で堪能した競馬場だった。初競馬を楽しんだ輩

も満足していた。

「でもビギナーズラックで、十万円勝った！ とかやりたかったなあ」

いえいえ、あなたが買っていた馬券のほとんどが一番人気と二番人気でしたからそんな倍率にはなりません。

でも新聞ももたず、なんの知識も持たず返し馬だけで買った馬券が図らずも一二番人気……末恐ろしいセンスの持ち主であるということは悔しいので今日のところは黙っておく。

## くすぶり再発か

またもG1惨敗。

というより、かすってはいるんだろうけれど。予想を教えてください。馬友二人。どちらにもブラックシエルが含まれていた。のに、縦目になってしまった。いまだ、私の表計算は中山仕様なのか……怖くて他のレースに手がでない。

事業を始めたばかりなのかなんのかでしんどそうにしていた人がいた。なんとしても這い上がり上を目指そうとする姿勢はすばらしいと思っただが、そのやり方がどうなのだろう。無理矢理悪ぶっているように見えたので

「WIN&WINの関係じゃないとうまくいかないよ」と助言したら、

「そんなにえらいのか」と返ってきてしまった。励ましたつもりなのに裏目に出た。気に障ったのだろう、申し訳ないことをした。

成功したい。そう思ったことは何度かある。それで本を読み漁ったり、集まりに顔を出したり。それでもなんだかついていけなかった。成功とはなんなのだろう。

どうにも行き詰ってしまったときによく競馬場に行った。雨のパークウインズなんかでぼんやりと、霧雨煙る馬場を眺めている。刻一刻と変化していく数字の羅列を眺めて、一人ではないことを確かめる。がんばりすぎているのか、がんばらなさすぎているのかする自分を客観的に見る。

オッズを動かすほどの大金を投入できるようになりたいのか。はたまた自分の馬でダービーを目指したいのか。どちらも違う気がする。

ただそこにおいて、ちっぽけかもしれない競馬の歴史を見ていたいただけなのではないか。数百円の馬券を握り締め、声の限りに応援していただけなのではないか。応援しているのは本当に目の前で走

っている馬なのか。そこに投影されている自分なのではないか。蹄の音を聞き、電線のない空を眺め、何万分の一人になって、自分がどれくらい小さな存在であるかを確認したいのではないか。

— そういえばまた四位騎手を目の前で見るチャンス逃したな、と思った。来週は東京に来るのだろうか。シックスセンスに続きの乗り替わりか。武豊騎手は一流ジョッキーだとは思うが、なんでもかんでも乗り替わってしまうのはちょっと切ない。

— ちょっと感傷に浸ってしまったが、またもくすぶり再発のような気がしてならない。ううむ。過去の自分データを見ると、この時期なんだかんだと忙しいのか、馬券購入が少ない。その割には大きく当たっていたりする。— そういえばプリンシパルステークス、二着三着だった。ワイドでも万馬券。今日だってワイドなら取れたのに。三十倍の配当だっていいじゃないか。

— 馬友の話聞いていけば……— そういう意味では競馬は文章と似ているな。人の話に耳を傾けなければ、馬券も文章も上手くならないでも奇抜なところも押さえていなくてはミリオン馬券も取れないし、面白い話にもならない。今の私にはたぶん素直な心が足りないのだろう。

— この状態を脱却するには……— あがくのをやめるべきか、目いっぱいあがいてみるべきか。とりあえず、誰かに聞いてみて片っ端から実行してみるか。

## 雷雨のパドック

私は日曜日より土曜日の競馬のほうに参戦していることが多い。日曜日は人出が多く、G1なんていう誰も知っているレースがあるから、土曜日のほうが好きなんだと思う。根っからのひねくれものなわけだ。ダービーの日でさえそんな感じで、ディープリンパクトの二冠目、いやシツクスセンスのクラシック挑戦二戦目は土曜日に馬券を購入し、テレビ観戦となった。

これも05年の土曜日、京王杯。突然の雷雨に見舞われ、ほとんどの人が傘を持っていなかったのか、一瞬にしてパドックから人がいなくなった。なぜか傘を持参していた私は一人で雷に撃たれるかもしれないという危険を冒しながらも、騎手が整列するあたりの上からパドックを眺めた。背が低いので、土曜日とはいえ混雑してくるメインレースのパドックなんて、ほとんどお目にかかれないのだ。何頭かの馬はいななきあっていた。本当にバケツをひっくり返したような雨だった。たぶん私の買目目はテレグノシスとニシノシタン。でもなんとなく全体を眺めていた。

見事に誰もいないパドックなんてそうそうあることではない。大粒の雨が視界をさえぎり、ソフトフォーカスになったその場所は、動いている絵画のようだった。乾ききっていた地面が雨粒を蒸発させ、水と空気と土の混じった夏の匂いを立てている。時折光る雷光は、間髪いれずに雷鳴を轟かせ、すぐそばにある自分の存在を誇示している。なんて美しいんだろう。目に焼き付けておこうと軽く傘を持ち上げた。

「あいつ危なえな」とばかりにこちらを見上げている騎手がいる。ちょうどパドックの反対側にいたのはピンクの勝負服。

しばらくその雰囲気身を任せていたけれど、やはり雷に打たれたら　まずそんなことはないだろうけれど　迷惑がかかると思いスタンドの中に入った。馬たちはさぞ怖かっただろう。騎手もさ

ぞ迷惑だっただろう。本当は後ろから飛んでくるテレグノシスが本命の私も迷惑なはずのだが、台風が来たときほど窓を開けたがる子供のような高揚感がそんなことを忘れさせていた。

結局パドックにはいたが、馬の調子を見るのには役に立たず、前日予想の買い目のまま購入。最初にゴールしたのはピンクの勝負服であった。やっぱりレースが終わってその馬券が外れていると悔しいもので、すっかりパドックでの高揚感などを忘れ、心の中で激しく雨を呪った。

さてはて、今年。現地に行きたいけれど、全体的に準備不足と寝不足で参加できなさそう。そろそろこの春から上位に出てきていた馬たちが集まるので予想も難しい。崩れなそうな上位と左利きからいっておくか。

日曜日は不発弾処理とやらで京王線が止まる。ということは人出が少ない日曜日。正直日曜日のレースにそれほどの魅力は感じないけれど、そんなときに貢献したらJRA銀行も少しは引き出し上限をあげてくれるのではないかと、いやらしい算段。中山に行った馬友のお土産返しも残っているし、この前行ったときにはゆっくりユキノサンロイヤルにあえなかつたし、G1焼きも食べていない。

最近是谁かしらと一緒にいっている。一応娘を誘ってみるがたぶん断られるであろう。しかたない。最近すっかり重くなった腰を上げて、久しぶりに一人競馬と行きますか。

## ヴィクトリアマイル

『競馬観戦に行こうと思っていたのに、飲みすぎて玉砕、そしてウオツカも玉砕、よって私は粉砕しました』

競馬をやらない方にそうメールしたら、

『時系列、および写實的に説明されたし』

との返事をいただいた。その返事に書いたメールをそのまま転載する。

目が覚めると後頭部の内側で絶え間無く銅鑼がなっている。その部分をなるべく動かさないようにそうつと起き上がり、頭痛薬をラムネのようにかじった。昨夜飲んだほぼアルコールのような酒が、口の中だけでなく、すべての粘膜から肝臓へと水分を集中させているように思える。

今日はGⅠである。人ごみは苦手だが、調布での不発弾処理のため、競馬場までの交通機関が一部分断されている今日はいつにも比べれば少ないだろう。現地に行つての観戦は久しぶりだ。

出かけるか

その計画はしつこく鳴り響く他人には聞こえないその音の前に玉砕した。

娘と二人、画面のこちら側から見たパドックは交通の便が悪かったとは思えないほど鈴なりだった。昨年のだービー馬が参戦しているからだろう。牝馬のだービー制覇が歴史的快挙であることは六十四年ぶりというところで紛れも無い事実だ。その馬を目の前で見たい欲求は競馬ファンとしては当然であろう。最近の成績が不振だとしても。

私には最近の不甲斐ない成績よりも鞍上の乗り替わりが不服だった。海外への進出を考え、その経験がある騎手を乗せたい気持ちはわかる。その騎手が一流である事も。だが私がまだ一勝馬であるこ

るから追い掛け、やがてG Iの舞台で脚光を浴びるようになった馬がごとごとく彼に乗り替わる。そして故障してターフを去って行った馬がいったい何頭いたことか。

馬のことは応援しているが、心情的に馬券は買えないと思っていた。あのパドックでの様子を見るまでは。

画面いっぱいに映しだされたその馬体は、牝馬とは、前々走から二十キロ近いマイナス体重だとは思えないほど雄大に見せていた。真っ黒な背中、夏の到来を思わせるほどの陽射しにぴかぴかと輝いている。左右からひかかれている頭部のくつきりと白い流星が盛り上がった胸前の筋肉の動きに合わせぐいと上下を繰り返す。後ろ脚は地面の感触をしっかりと確かめたあと力強く蹴り上げる。どの馬よりも、いやその場にいるだれよりも王者の風格を漂わせていた。

#### 負けるわけがない

不安材料がないわけではない。海外から帰ったの初戦。大きなマイナス体重。自らレースを作ることにはできない差してくる脚質。だがそれを一蹴するほどの輝きが彼女を包んでいた。私はその単勝二倍の馬を頭に馬券を買った。一切の迷いはなくなっていた。

大歓声の中、返し馬を終えたレディたちはファンファーレと手拍子の届かない競馬場の一番端にいた。発馬機内に吸い込まれていくたっぷりと汗をかいた馬が目にとまった。四連勝中のあがり馬だ。

#### すごい汗だな

私はなんとなく彼女の体調を気遣った。最後の枠入りは大外。昨年の牝馬クラシック最終戦でダービー馬より先着した二頭のうちの一头。鞍上は本日ダービー馬に騎乗する天才とうたわれるジョッキーの実弟。ゆつくりとゲートに近付き枠の中へと消えて行った。

ゲートが開くと歓声が沸き上がった。馬群はダービー馬を中心に固まったまま移動していく。緩やかなカーブを回っていき、左手の大欒を過ぎたところで、縦だった隊列が横にかわり、直線をむかえた。

長い長い坂道を駆け上がってくる18頭に声援が跳ぶ。ダービー馬の前には先行した馬が壁を作ってはいるものの、鞍上はまだコーサインを出さない。徐々に外へと持ち出し、残り二ハロンを切った。鞭がとぶ。確実に一完歩ずつ他馬をとらえていく。全身のバネを伸ばし、縮めながら。風をよけるためにか幾分細めているような目は、ただ前だけを見つめる。誰もいないその先へ。競い合う馬体は一頭、また一頭とまるで桜が花を散らすように主役から背景へと形をかえていく。ゴールまであと四分の一ハロン。画面はまだ主役の座に君臨している三頭をとらえていた。

先に先頭に立った真ん中の馬に内と外から馬体が合わさっていく。二頭は着実に詰め寄っていくが粘る馬もそう簡単にはぬかせてはくれない。外側がダービー馬。

届け、届け

ダービー馬が一着でも馬券の当たりはたいしたことないことにはもう気がついていて。私の対抗馬は早々に風景に溶け込んでいた。懸命に走る彼女に再びの栄光を、勝者だけが通ることのできるウィナーズランの萌えたぎるグリーンの絨毯を……

「ウオツカ頑張れ！ 抜かせ！」

口にしたのは私ではなく、となりにはいた娘だった。

えっ！？ いつのまにファンに……

ダービー馬の宿命のライバルは娘が一番始めにそして多分唯一ファンだったブルーリッジリバーの従姉妹であり、姪だった。桜花賞でのウオツカの敗北に心なしか得意げだったのだ。それに現場で回りが声をあげているなかでさえ

「ママ、絶対叫ばないで」

というような娘が叫んだのだ。

私が一瞬ひるんだその時、三頭はゴールを駆け抜けた。真ん中の馬のリードは半馬身ながらも保たれていた。ダービー馬は2着すら微妙であった。内側で追われていた馬も懸命に食い下がっていた。グリーンのターフを悠然と戻ってきたのは、私が体調を心配したあ

の彼女であった。

結局、ダービー馬は二着を確保したが、私たちは黙っていた。沈黙の中で考える。

早熟なのか

引退で繁殖か

格は違えど、くしくもブルリーリッジリバーがたどった道筋だ。

一着でないといけなかった。夢をつなげて欲しかった。復活を信じていた。粉碎した気持ちをかき集めるように、私たちは決して間違っていないかったその天才ジョッキーを悪者にした。

「安田記念、見に行こうか」

一縷の望みをつなぐように私はつぶやいた。娘の返事は聞こえなかった。

## ジャツジ

東海ステークスの予想をしようと新聞を読んでいた。ある馬の厩舎のコメントにこうあった。

「距離もダートも大丈夫だけど、地下馬道でパニくるから」

私は思わず笑ってしまった。自分のことのように思えて。

お稽古はたくさんした。何をしなくてはいけないかもよくわかっている。一生懸命走ればいいだけ。大丈夫、厳しいお稽古たくさんしたもの……だけど、やっぱり好きじゃない。厩務員さんも騎手さんもいつもと違う。見たことのない馬もたくさんいる。いつもじゃ考えられないくらいの数の人間もいる。ああ、ときどきする。嫌だ。おうちに帰りたい。どうして私はこんなところにいるんだろう。私は一体なにをやっているんだろう……

彼女の気持ちはこんなところだろうか。ライブ本番前の私の気持ちに重ね合わせた勝手な推測である。しかし今回は一着でゴールした。パニックにならなかったのか、無心で走れたのか、はたまた自分の存在意義を見出せたのか。十三番人気という低評価だったヤマトマリオンちゃんである。癖のある馬は好きなので、馬券とは別に追いかけることに決定。

しかし、この馬名聞き覚えがあるなと思ったら、二年前のエリザベス女王杯で馬券を購入していた。カワカミプリンセスが降着になったあのレースである。直線を向いてからの斜行はひどいものだった。もちろん審議になり、騎乗していた本田優ジョッキーは自分はどうな処分を受けてもいいから馬は勘弁してやってくれと頼んだという逸話が残っている。懇願もむなしく変則牝馬三冠を逃し、初の敗北が十二着への降着という不名誉な結果になった。

馬券がとれなかったことはかまわない。あそこで内側に切れ込まなくても、彼女なら勝てたはずだ。無傷の六連勝。久しぶりにつよい牝馬がでて楽しみにしていた。ジョッキーは引退間際、テイエム

オーシャンで果たせなかつた三冠を目の前にして、気持ちが勝つてしまったということなのか。名ジョッキーだけに残念で仕方ない。

去年の天皇賞のコスモバルクもひどかつた。もたれる癖があるにせよ、最後の直線はふらふらとまさに迷走だつた。しかし降着処分にはならなかつた。あれ以来五十嵐冬樹騎手はコスモバルクに騎乗していない。今年は一度も中央競馬での騎乗もない。

オークスは非常に後味の悪いものとなつた。

カワカミプリンスのエリザベス同様、もちろん降着になると思つていた。ウイニンググランは痛々しい気持ちで見えていた。ところが降着処分はなしという。

内側への斜行は、他馬への進路妨害には至らない。よつて降着はなし。しかし、継続的かつ修正動作のない危険な騎乗のため、二日間の騎乗停止。

騎手はレースに出ている限り、全員が一着を目指す。多頭数の場合、勝負どころで厳しい流れになるのは当然である。多少の寄り合い、接触に関しては仕方がないと思う。しかし裁決委員も継続的で修正動作がないと認めている。故意だととられても仕方がないということではないのか。勝てばいいのか。

もちろんそういう騎乗をしたジョッキーが一番悪い。だが、危険な騎乗と認定されても降着にはならない程度という前例を作つてしまつたのではないか。一般の新聞にも加害馬先着でありながら降着のない騎乗停止処分は極めてまれとの記述を見つけた。

イチローもジャッジに関して激怒していた。野球でいえば、二年前のエリザベスはボールで、去年の秋の天皇賞と今回のオークスはストライクか。野球の審判にしても裁決委員の審議にしてもルールブックとして人力を採用するのであればあるほど、明確で一貫した姿勢が問われるのではないか。

そういえば二〇〇六年の安田記念の日。第七レースが審議になつた。大画面に映し出された検量室。ものすごく怖い顔でつめよるミスターフェアプレー藤田騎手の言葉に、はいと返事をしている気の

良さそうな武士沢騎手。どうみても「いじめられっ子がいじめっ子にいちやもんをつけられている凶」だったが、審議の結果、一着入線の武士沢騎手は三着に降着になった。

昨日、あの場所に藤田騎手がいたら、一体彼はなんといったのだろうか。

## ダービーの思い出

東京に移り住んでからはや十三年。府中競馬場までは歩いて一時間という場所に住んでいるのに、ダービーの当日に現場にいたのはたった一回だけである。

明日のことなんかも気にせず競馬場にいったときは、ちょうどデーブインパクトが走っていた年なのだが、そのときも前の週のオークスと前日の土曜日には競馬場にいたのに、当日はテレビ画面の前にいた。だって、すごい混みよなのだ。ちびの私には何にも見えなくなってしまう。それは暮れの中山でも証明済みで、そのときは押されて死にそうにもなった。

一度だけいったダービーだが、娘が小さかったので内馬場から観戦することになった。まだそれほど現場で競馬を見るということに慣れていなかった。二〇〇一年のダービーである。君が代をうたったのは西城秀樹さん。真正面から見たスタンドは、ファンファーレと同時にみんなの手拍子で揺れて波のように見え、ものすごく気持ち悪かった。それだけたくさんの人が同じように動いていたのだ。

レースはほとんど覚えていない。ゴール前で一緒にいた馬友が「角田！ 角田！」

と叫んでいた。勝者のターフを帰ってきたジャングルポケットが観客に向かって吼えるようにしていた姿だけが目に焼きついた。ちなみに小学校三年生だった娘はさっぱり覚えていないらしい。

その次に印象に残っているのはやはり〇五年で、あれほど

「ダービーまでに出遅れ癖を直す乗り方をしています」

といていたシツクスセンスが出遅れたのでテレビの前でのけぞっていた。何度も書いているが、デーブのファンではなくてシツクスセンスのファンだったので、今度こそ先着してくれるのではないかと期待していたからだ。もちろんこのときも馬券はとったけれど、確かシツクスセンスの複勝が一番儲かった気がする。皇月賞の二着

馬だったのに、低評価だった。

そして去年。私はウォツカをよく飲むので、知り合いからはウォツカが勝つたびに

「馬券とつたでしょ」

といわれていたが、実はウォツカが勝ったレースで馬券は一度もとっていない。いつも二着がないのだ。ダービーもアサクサキングスってだれ？ というかんじだった。だが、感動した。ちょっと泣いてしまった。四位騎手とは同じ年で、何かと私の好きな馬に騎乗していることが多い。六十四年ぶりという快挙を目撃したことも、女の子がよく頑張ったというのも胸に来た。

さて、今年は何からいこうかな。変則二冠を目指すディープスカイ。青葉賞で強さを見せたアドマイヤコマンド。皐月賞一番人気のマイネルチャールズ。ダートからの刺客サクセスブロッケン 目移りしてしまう。今のところは中山で参戦の折、叫び間違えたタケミカヅチさんと京都新聞杯の覇者メイショウウクオリアくに注目している。

一国の首相になるよりもダービー馬の馬主になるほうが難しい

この台詞はあまりにも有名だ。馬主でなくとも、ダービーは特別なレース。そこに必ずあるドラマと歴史を見逃す手はない。せつかく全国の競馬ファンがうらやむ立地に住んでいるのだから、今年こそは見に行きたい。

## ダービーデイ・前編

昨日までの寒さとは違ってかわって、自分の寝汗で目が覚めるほど暑かった。いつものように目覚まし時計がなる手前で目が覚めた。なんだか面白い夢を見ていたが、そのまま眠っていたとは思わなかった。そう、今日はダービーなのである。

さっさと身支度を整えて、行って来ますといいながら高いびきの娘を足下にし家をでた。まだ九時過ぎだというのに照りつける日差しがジャケットを通していても腕に痛い。乗り込んだバスはいつもより混んでいた。

府中駅でバスを降りて、少し早足で歩く。人影はまばらだが、なんとなく空気が違う気がする。いつもの自動販売機でいつもの少し硬い水を買って、坂を下っていく。

「このまま、まっすぐ突っ切れたらすぐパドックに着くの……」そんなふうにいるながらはやる気持ちを抑えつつ、高級車ばかりが並ぶ馬主専用駐車場の前を突っ切り正門前に着く。

特別な入場券はまだあったがレーシングプログラムはすでに一冊も残っていないかった。そこらへんに席とりのためにおいてあるやつをかつぱらっしてしまおうかと思うが、やめておく。

パドックに着いたとき、第二レースに走る馬たちが周回を始めるところだった。今日の目的の一つであるパドックである。去年のエリザベス女王杯の裏開催に参加したとき、横っ飛びを繰り返していたあの彼が出ているのだ。周回を重ねるその姿は、初めてみたときとは比べ物にならないくらい落ち着いていた。それとは対照に一番人気の馬が暴れまくっていた。

少し落ち着いたかと思うと小走りになり、二人で引いている厩務員さんから離れようと後ずさる。汗をいっぱいかき、何度も何度も回りの花壇に突っ込むほど後ずさる。しまいには寝転がって、馬体検査のために先に検量室前につれていかれるときにも、地下馬道へ

続く入り口に向かうことを断固として嫌がっていた。しばらくして小走りに去っていった。

とまれの合図がかかるころには、まだ第二レースだというのに、パドックには大勢の人が集まっていた。スタンドを見上げて、これぞ黒山の人だかりというのだろうと思った。騎手の顔が見える。

私がダービーの穴対抗として選んだ馬には赤木高太郎騎手が騎乗する逃げ馬だった。もしかしたら三着には残るかも、という予想である。いつもはいろんな種類の馬券をたくさん買うが、今日は特別だから絞って勝負したい。前走もかなりの人気薄だったのだが、馬連の軸として買った。一着がなかったので馬券にはならなかったが、ダービーでもひよつとしたらひよつとするかもと思っていただ。その赤木騎手とお目当ての『彼』の馬券を購入したが五着と十着。それでもだいたい競馬が上手になった彼をみて満足だった。

それからのはたらたらと競馬場の中を歩き出す。いつもの蕎麦を食べる。頼まれていた馬券を買って、その写真をメールで送る。功労馬がいるところにいって、ユキノサンロイヤルに会おうと思ったら、今日はいないらしくちよつと不機嫌になる。気が向いたレースだけ馬券を買って、日本庭園のほうに下りていく階段で一休みする。

第六レースは二つ目の、四位騎手を間近で見るという目的のためにパドックに向かう。テレビで見ると同じようにここにこしている。写真を撮ったけれど、正直誰だか判別がつかない。それでも心の中にはあるからいい。どうにも勝ちそうもない馬だけれどちよつとだけワイドを買っておく。レースではしんがりで帰ってきたけれどそれでもいい。

日差しが痛い。人がものすごく多い。座れる場所もないし、ジュースを買うのにもトイレに行くのにも長い列をまたなくてはいけない。それでも楽しい。馬券は一つしか取れていなくても楽しいのだ。ダービーデイに気楽な一人で競馬場にいる。なんとという贅沢なんだろう。

私はただここにいるというだけで、幸せを感じていた。

## ダービーデイ・後編

ダービーは第十レースである。

第九レースあたりから人の動きがなくなる。パドックにはたくさんの人が残っていて、今年のダービー馬を間近で見ようとしている。ちびの私にはもう全体を見渡せる場所は残っていないかった。かろうじて人の間から、地下馬道から出てくる姿が垣間見えた。一番に入ってきた一番人気のディープスカイは、パドックの入り口で立ち止まった。あまりの人の多さに驚いたように、回りを見ている。それでも自分を見失うようなそぶりはない。しばらくじっと回りを確かめたあと、ゆっくりと歩き始めた。次々と入場してくる馬は、実にどうどうとしている。古馬と遜色のない鍛え上げられた馬体を悠然と誇示するかのようにゆっくりと歩く。それに比べると、私の穴對抗の馬はいかにも貧弱に見える。それでも今日、このパドックにいるというだけですごいことなのだ。ほんの少し見えていたパドックもすぐに見えなくなった。こんなに近くにいるのに、何も見えない。仕方なく画面が見える位置に移動する。

画面には騎手と関係者の方たちが談笑する姿が映し出された。しばらくして騎乗命令があり、地下馬道へと消えていく姿が映る。どこに行ってももう見えることはないと観念した私はそこでレースを見ることにした。

今日のレースは見といていた馬友からメールが入る。やっぱりパットからながら参加するという。赤いドレスを着たオペラ歌手が歌う「君が代」が薄っすらと聞こえる。ダービーという雰囲気は遠巻きに私を包んでいる。パドックの画面前に残っていた人たちの間からはファンファーレにあわせての手拍子は起きない。ここは静かにしておかなくてはいけない場所なのだ。

ゲートが開いてスタートが切られると、

「八棒出遅れたな」

「あれ、五番が（ハナに）行くんじゃないかなかったっけ？」

と声が聞こえる。それぞれ別に知り合いでもなんでもない。私も五番がハナに行つてくれないと予想と違ふと思つてみていた。緩やかなペースでレースは進む。

「遅い」

「前のこるか？」

四コーナーを過ぎても、ほとんど順位が入れ替わることなく進む。

「赤木……」

小さな声でつぶやいた瞬間、その馬体は馬群に沈んでいった。かわつて大外からディープスカイが脚を伸ばす。

それは本当に見事だった。飛んでくるような走りに釘付けになつて、内側の馬たちの攻防を見ていなかった。まだ第十一レースに出馬する馬たちのいないパドックもざわめきたつた。あつという間の出来事だった。見事にすべての馬を置き去りにして、四位騎手は去年と同じく一番でゴールした。

二着は十二番人気のスマイルジャック、三着は私の宿敵武豊騎手騎乗のブラックシエル。そういえば、武豊氏こないで馬券の単複を買うの忘れていたことに気がつく。馬券も一番があるだけで、後の二つの番号は掲示板にすら載っていない。でも今日はそんなに悔しくない。こここのところのなんだか釈然としないレースではなかったし、なんといつてもダービーなのだ。

本当は最終レースまで残つていようかと思つていたが、今日もお仕事があるので帰ることにした。人の波が興奮冷めやらぬ様子で、

「一番から流せば……」

「一、三着固定で流してたら……」

とタラレバ話を繰り返している。私はすっかり浮腫んでしまった脚をそれでも軽快に前に出しながら、ダービー出走の馬が消えた直後のパドックを思い返していた。

私も帽子をかぶっていた。ジャケットも着用していた。パドックのあちら側にいた女性たちは、美しいドレスを身にまとい、日よけ

ではない美しい帽子をかぶっていた。足元は歩きまわるのに適したスニーカーではなくシンデレラのようなパンプスで、笑いながら写真を撮っていた。そちら側からならどんなに背が低くても苦労せずに馬を見ることができらう。同じ十二万人分の一人でも決して同じでない、世界を区切るたくさんの垂れ幕のかかったあの柵を思い浮かべた。

やはり一生に一度はあちら側の住人になりたいものだ。

## 競馬場は広い

私は「お付き合い」で競馬を始めた。

お店のお客様に連れて行っていただいた初競馬で買って帰った馬券が確か七万円くらいになり、それからなんとなく場外で買うようになったが、当時の場外馬券売り場はいかにも賭博場でどうにも好きになれなかった。

その後、東京に引越し、府中競馬場が案外近いことに気がつき、これまた「お付き合い」で競馬場に脚を運ぶことになる。競馬場がちかく、JRAも開かれた競馬に力を入れていたときで、競馬人口そのものが、神戸にいる頃よりも比ではないくらい多かった。

いろいろな関係者の方たちとも出会うことになる。神戸では園田のスタッフさんたちとしか出会わなかったが、東京に来てからは、新潟競馬場の新スタンドの設計に携わった人、その工事を請け負った大工さん、録音されたファンファーレを流すという役目をしている人とも出会った。元高崎の厩務員さんは今でもたまにお酒の席と一緒にになる。

実は、これは他の仕事の関係でなのだけれど、ラジオでの競馬中継のアシスタントのオーディションを受けたことがある。そのときには、テレビにも出ていらっしやるアナウンサーさんともお会いした。どうやらご実家が近かったようで、アナウンサーの話よりも近所のコンビニがなくなっただという話ばかりしていた。

実況中継のアナウンス講座に通っていた知り合いのおかげで、その親睦会にも参加させていただいた。ほとんどが普通の方たちだったけれど、ケーブルテレビのアナウンサーさんもいらして、場外馬券売り場なんかのテレビでたまにお見かけする。

よくよく考えてみると、自ら進んで出会いに行っただけでもないのに、競馬に携わる人との縁があるなあ、と思う。いまだ馬主さんとのご縁はないけれども。

さて、ダービーは現地で参戦したのだけれど、訂正がある。何事もなかったレースと記したが、スタート直後、三着のブラックシエルが他馬に寄られていた。めずらしく、武豊騎手が怒っていた。だが、こつも荒れたレースが続き、その被害馬になっていれば腹も立つだろう。

安田記念は、なぜか現場にすることが多い。ダービーのあと、少々熱も収まって入場者数が減り、脚を運びやすいことが要因なのだろうが。二年か、三年前は娘と二人で出かけて、内馬場をうるちよるした。

ハロン棒が、死体のように横たわりおいてある場所で、なぜか笑ってしまった。想像以上に大きかったのと、なんだかわいらしかったからだ。電光掲示板には目いっぱい近づいてみて、その電球の大きさを確かめたりした。歩き回っているうちに、スタンドに戻ったところにはメインレースが終わっていそうだったので、二人でスタートを見ることにした。

スタンドの喧騒が、遠くに聞こえる。まるで平日の昼間、人通りのない裏通りに漏れ聞こえるどこかの家の居間でついているテレビの音のように不思議な感覚がする。輪乗りをしているところに近づくと、騎手同士が話している声などが聞こえるほどの距離までは近づけない。その場所にいるのも私と娘の二人だけで、ぼんやりとスターターが台上に上がるのを見ていた。

ファンファーレにあわせた手拍子も、どこかよそのスタジアムのことのような。あわただしく人がスタートゲートに群がっているが、その喧騒も届いては来ない。次々にゲートに入る馬を黙って眺めていた。スタッフが離れる。

「ガシャン」

私たちはゲートがあいたその音でビクリとして顔を見合わせた。思いのほか大きな音だった。

馬が見えなくなると、私たちはスタンドに向かって歩き出したが、まもなくレースは決着していた。クールダウンのために走ってくる

馬を見ても、どれが勝ったのかは検討がつかなかったけれど、騎手たちは笑いながら話していた。

現場で見るのは楽しいけれど、細かい部分を見ようとするとやはりテレビ観戦の方が向いているのか。いろんな談話や情報がすぐに入ってくるという利点もある。

あ、お高い指定席に入ればそんなことは全部解消されるのかな？  
そういえば指定席に入ったことがない。今度馬友をお誘いして指定席に行ってみようかな。……って指定席に入ったことのある馬友なんて、私の周りにいるのだろうか。

## 競馬の学校

出かけられるなら出かけていこうと思うときに限って、前の晩、何かに襲われる。今回は妹の接待に付き合わされるといふ不幸に襲われ、検討の時間がとれず結局馬券にはならなかった。

レースは美しかった。特に、直線でウオッカがうちに入ったとき、アルマダのホワイト騎手はウオッカの進路をふさぐことなく、見事にフェアな騎乗だったと思う。そこから抜け出したウオッカの美しさには鳥肌が立った。残念だったのはまた審議になったことだった。現在ファン投票一位のウオッカだけれど、このまま秋まで休養する予定らしい。今年に入って海外も含め、四戦を消化しているから仕方ないだろう。宿敵ダイワスカーレットとの対決も見たかったけれど。

馬産地では牡馬が生まれたほうが喜ばれる。高く売れるからだ。牡馬はレースで活躍した後、種牡馬としての第二の生活が待っている。牝馬は一年に一頭しか子供を残せないが、牡馬は種付けした数でたくさんの子供を残すことができる。商品価値として高い。血統においても、母よりも父のほうが重要視されている。ただ「兄弟」とされるのは母方からになる。それはそれでお父さんはちよっと切ないかな。

さて、中央競馬会騎手課程の募集が始まる。

応募資格は来年の三月に中学卒業見込みから三月末に二十歳未満であること。中学卒業以上の学力を有すると認められること。学業成績証明書などが必要で、一次試験には国語と社会の筆記試験もある。娘が受けたときには社会科の問題で日本の地名のテストがあったとか。

つぎに体重。年齢で違いがあるが、娘の場合は四十四キロ以下であった。この制限体重を試験当日越えているとその後の試験も受けられない。

そして視力。眼鏡もコンタクトも不可。〇・八以上ないといけない。

その他にも健康診断書の添付が必要となる。ちなみに提出する書類には父母の体重の記入欄もある。一緒に減量しておいてよかった。入学説明会はもう終わってしまったけれど、学校見学会はまだある。私も夏休みに見に行った。夏時間だったため集合が午前七時。は、はやい。その上とても遠い。実は乗換えを間違えて遅刻してしまった。だが、私たちより大失敗をした人たちがいるらしい。競馬学校ではなく栗東に行ってしまったという。トレーニングセンターは栗東と美浦の二箇所にあるが、学校は千葉の白井の一箇所しかない。栗東からではどう頑張っても見学会には参加できなかっただろう。

見学会では学校内を案内してもらえ、最後に競馬学校に関するビデオを見せていただいた。卒業式の場面では池添騎手の若々しい姿が映し出されていた。

面白かったのは、食事制限のお話。全寮制で食事の管理は学校がやってくれるのだけれど、週に七百キロカロリー（だったと思う）はお菓子やジュースを買ってきてもよい。生徒さんたちは一生懸命カロリーを計算して買い物してくれる。飲み物であったり、スナック菓子であったり……それを教官に見せてチェックを受ける。そこで規定のカロリーを超えていると全部没収されてしまう。卒業後には食事制限を自分でしていかなくてはいけない。そのための訓練でもあるという。でも全部没収なんて世にも悲しい一週間になる。心の底から気の毒だな、と思ったのを覚えている。

学校見学は一般の方もいけるので、興味がある方は行ってみてはいかがだろう。初々しい生徒さんたちが「おはようございます」と迎えてくれる。懐かしい名前の元競走馬たちが訓練用にいたりもして、それはそれでとても楽しい。

G1は宝塚記念までしばらくお休みだけれど、競馬はまだまだ続く。地方も含めればいつでも開催しているのだ。大きなレースでな

いからこそ、自分を重ねる馬がいるかもしれない。

そういえば、競走馬としては珍しい白毛のユキチャンは今度武豊騎手を背に川崎競馬で行われる関東オークスに出走予定だ。ぜひ観戦したい。

## 果報は寝て待て

競馬場に着いたのは、第六レースのパドックが終わった頃だった。先についていた馬友と合流し、レースを見たあと、いつものように蕎麦を食べに行つた。同じ鳥蕎麦を頼んだはずなのに、なぜか馬友の蕎麦にはかき揚げと煮玉子がのっかっている。店員さんのミスで、

「食べられますよね？」

というごくアバウトな理由により、間違つたかき揚げ煮玉子蕎麦にとりをぶち込まれたらしい。なんとも豪華な蕎麦は、本日最高の当たりとなるオーラをかもし出しているが、ギャンブラー二人にとつてこの時点ではただの笑い話に過ぎない。今日で春の東京開催は終わりである。父の日のせいか、家族連れも多い。G1のある日とは違いなんだかのんびりしている。

寝坊して、第三レースからの参戦だと馬友は言った。第八レースのパドックを見て、買い目をマークしていたらお腹が痛くなった。トイレに行こうと思つたが、ふと、浅田次郎先生のエッセイが思い出された。大万馬券を買おうとしていたら、お腹が痛くなり、馬券をあきらめてトイレへ。トイレの中でその的中を知つたというお話である。

なかなか勝ちきれないけれど、ペーパーオーナーゲームPOGで持つていた馬が出馬する。ぜひ買いたい。買えないで勝つたらそれは切ない気分になる。でもお腹は痛い。我慢してマークしていたものの、やはり耐えられなくなり、トイレへ。便座に腰掛けながら、マークして、急いで買いに行つた。前に並んでいる人がぐずぐずしている。なんとか買えたものの、三着には着たけれど、馬券にはならず。

第九レースも見当違いな馬券を買い、惨敗。第十レースのあたりで「まだ三レースもあるのか……」

と朝からとりがみすらない馬友がささやく。かっこいい叫びがした

いため、障害帰りのトニービン産駒を軸に買うも、完全な縦目。

「コレ一番人気はずしたら、男前だよな」

東京良績の馬について検討するも、馬友は二番人気を「男前」に切り、惨敗。

メインレースは点数を控えるために一、三着固定というおかしなフォーメーションを買ひ、縦目。お守りの「武豊単複馬券」だけ複勝が当たり、一頭しか名前がないのに、とりがみという不思議な馬券を見る。勝った横山典弘騎手のガッツポーズが可愛かった。裏のCBC賞はお誕生日馬券に違いないと思って、そこからながすも、またも縦目。最終くらいは何とかと意気込み、四頭ボックスなんて買ってみるもやはり惨敗。

東京の最終で3着にきた馬を馬友は軸にしていた。直線で

「柴山！ 柴山！」

と叫んでいるも、脚色が衰えている。が、十一番人気だったため、二三着のワイドでも二千五百円強の馬券。あまりのショックに馬友しばし固まる。

パドック側に移動途中、神様が降りてきた。中京の最終。テンザンコノハナの騎手が乗り替わっている。以前まで乗っていた角田騎手は逃げ馬に乗っている。これは行った行つたの決着になるパターンではないか。急いでそのテンザンコノハナから角田騎手とライオン産駒へのワイド五百円ずつと、三頭の三連単のボックスにマークをして、券売機に近づくと「休止」の文字が光った。締め切られてしまったのだ。パドックの大画面でレースを見る。予想通りの展開。逃げる角田騎手についていくのはテンザンコノハナただ一頭。四コーナーを曲がったところで、二頭は後ろをぐんと離し、決着はついていた。私はその場で凍りついた。

払戻を見て、死にそうになった。ワイド九千五百円。四万七千円を取り逃がしたのだ。

最終週だから、現場にいたかった。でも馬友も寝坊していた。もし、馬友が来ていなかったら、来なかったかもしれない。そういえ

ば、CBCで三万馬券を取ったときも、ガーネットステーキスの十七万馬券も、去年年末の十万馬券も、実はレースを見ていない。皐月賞の万馬券も東京で画面での参戦だった。

ダービーにはダービーの雰囲気味わいに行った。でも今日はどうだろう。別に家での参戦でもよかったのではないか。というよりも、そうするべき日だったのではないか。馬友の寝坊、最高あたりは蕎麦、トイレに行きたくなったこと、その後の前の人のぐずぐず

……

「今日はパットで買うべきです」

神様からの啓示をまたも見逃し、おけら街道をおけらで歩く。久々のかなりの惨敗街道となった。来週からはお家場外馬券場で買い、レースは見ないでおこう。果報は寝て待て。

## 川崎へ遠征・前編

川崎競馬場に来るのは二度目だ。地方競馬は大井競馬と川崎競馬しか行ったことがない。そして少々記憶が混ざっている。大井競馬にはトーシンブリザードを見るため、重賞レースだったが、川崎競馬場にはナイター競馬をたずねるといような目的で脚を運んだ気がする。どちらにしても、この前は夕方には着いていた。

今日は関東オークスを見に行く。馬友が調度休みなので、一緒に行こうという話になった。馬友の仕事終わりに合わせていくので、到着するのはこれまでと違い、七時近い。観戦できるレースも実質二レースだけだった。

上手く同じ電車に乗り合わせられるようにメールで連絡を取りながら、登戸についた車内で落ち合い、川崎駅に着いた。着いてみると「来たことがある」と確信する。前に来た時から四年以上は経過している。無料バスに乗り込み、競馬場へと向かう。

入場券はどこで買うのだろうかときよろきよろしていると、入り口のとなりに行列ができていく。その列に並ぼうとして、前のほうを見るとなんと券売機がある。入場券ではない。勝馬投票券のだ。競馬場のとなりに場外馬券場がある。馬友とすごいなあと話しながら入り口に近づいてみると、入場券を買うのではなく、自動改札にそのまま百円玉を投入するものだった。

到着したときにはすでに第八レースの出走が近く、たった二つのレースのために五百円もする新聞を買い、レースを見に行った。中央競馬よりもコースが格段に近い。ゴール前の直線では、蹄の音、鞭の音まではずきりと聞き取れる。臨場感がすごい。

人の多さには閉口したが、ぜひパドックを見たいと馬券を先に買い、第九レースのレースを見るのはあきらめてパドックにいることにした。第九レースのパドックが終わっても、人が動く気配がない。みんな同じ目的なのだ。中央から関東オークスに参戦する白毛のユ

キちゃんを見に来ているのだ。

「女の人は全員『ユキちゃん』って名前なんじゃないかと思う」  
馬友はつぶやく。女性がすごく多い。私はときどき映像でパドックを見るけれど、普通の日には画面で数えられるくらいの人数のときもあるのに、今日は現場にいても数え切れない。陣取った場所からは電光掲示板も見えず、第九レースは一体何が勝ったのかすらわからなかった。

ここまで人気になるのは、白毛が珍しいことがある。遺伝の関係で、白毛の馬が生まれてくること自体が珍しい。白毛は弱いと思われがちなのは、遺伝での白色化、アルビノと混同されているからではないだろうか。アルビノは色素の遺伝子の突然変異で、サラブレットの白毛とは根本的に違うものである。

そして、ユキちゃんは強い。血統的な背景を見ても、母は活躍がなかったもののサンデーサイレンス産駒だし、父はクロフネ。一流といえるだろう。

女性割合が非常に多いパドックで随分待った。待っている間、ほとんどの人が持ってきていたカメラや携帯電話のカメラの調節をしていた。

出走馬が入ってくると、一斉にカメラを構える。私もその一人だったが、どうしてもぶれてしまうのでそうそうにあきらめた。

「可愛い……」

すぐ隣に陣取っていた女性がいった。私は可愛いとは思えなかった。白すぎて怖いと思った。真っ白い身体に真っ白いプリンカーをつけている。彼女の兄にあたるシロクンも近くで見たが、膨張色のためかもっと太って見えた。彼女は腹回りがすっきりとし、後ろ足の動きがスローモーションのように見える。バスケットボール選手が空中で止まっているように見えるのと同じようだった。しかしそれよりもメジロライアン産駒のマダムルコントの方がよく見えた。距離は不安だけれど、そちらを本命に馬券を買い足すことにする。

随分と長くパドックを周回しているように思えた。騎手が現れる

とさらにみんな写真をとることに熱中していた。ユキチャンは騎手が乗ると気合を増したように見えた。出走馬たちが返し馬に向かうと、さつきまでが嘘のようにパドックから人がいなくなった。

買い足すためのマークシートを持ちながら券売機にならぶ。場内放送が流れる。

「白馬の王子は武豊」

ちよつと苦笑してしまう。なんとなく『白馬の王子』というと『白馬』のほうも牡のような気がしていたな、と思う。その後にく、

「プリンセス賞二着の雪辱はここで晴らす」

大外の馬の紹介を聞いて、ハタノギヤランの馬券も追加する。締め切り五分前に買うことができた馬券を手にも、馬友とコースに向う。すでに人があふれていた。

## 川崎へ遠征・後編

二千メートルとなると、コーナーを六回回ることになる。ある程度前にいっていないとだめだろう。そんなことを話しながらスタートを待った。初めて動画を撮ってみようと格闘しているとライトがついたままになっていたらしく、警備員さんに注意をされてしまった。消したつもりでした、ごめんなさい。

スタートを告げる音楽が流れると拍手が起こった。

ゲートが開く。馬友の本命馬は出遅れる。ユキチャンはいいスタートを切った。二番手あたりでレースを進める。一周目のスタンド前からコーナーで先頭が変わる。それでもまだペースを上げることなく流れが落ち着いて、後続馬がぐつと前に詰める。向こう正面ですでに鞭が入っている馬も何頭もいる。そんな他馬をよそに、白い馬体はもったままで伸びやかに走っていく。二度目の三コーナーからぐつと加速して、後ろを突き放す。四コーナーを曲がったときには勝利を確信したスタンドから拍手が沸き起こっていた。差は広がるばかりだった。八馬身の差をつけてゴールした後もしばらく拍手の余韻が残っていた。

私は結局記念馬券のユキチャンの馬券しか当たらなかったが、馬友は三連単を持っていた。また当たらなかつたけれど、それはどうでもよかった。鳥肌が立つようなレースを見た。

スタンドはお祝いムードに包まれていた。ユキチャンは一周回って帰ってきていた。

「ここまでくるかなあ」

「あそこで止まっちゃってるよ、こないんじゃないの？」

そんな声が聞こえる。私は目の前に来ることを確信していた。だつて乗っているのは武豊騎手なのだ。そのサービスを怠るわけがない。思った通り、しばらくユキチャンをなだめてスタンド前までやってきてくれた。また大きな拍手に包まれた。

「可愛いだけでなく、実力があることもお見せしたかった」  
払戻をしている馬友を待つ間、私はやっとありつけたフランクフルトを頬張りながら画面でインタビューを見ていた。そういえばずっとお腹がすいていたのだ。武豊騎手はさわやかな笑顔だった。王子様っていうけどもうすぐ四十だよなんて考えていた。最近審議の被害馬になることが多かっただけに、なんとなくすつきりしているように思えた。

その余韻を抱えたまま仕事に行き、一日あけてもう一度振り返ってみた。ワイドショーでも取り上げられている。白毛馬の重賞勝ちは史上初。それを現場で見たのだとひしひしと感動が湧き上がる。何度も起こった拍手が思い出される。競馬は勝つために走るものだ。勝てない馬を話題にしても入場を確保しなくてはならない地方競馬の現状を考えると、とても素晴らしい一日だったのではないだろうか。中央場所ではなく、あえて地方で重賞勝ちしたことに意義があるのではないか、とほのぼのとした気持ちになった。

レース前に見ていくのを忘れた武豊騎手のコラムを覗いてみると勝利ジョッキーインタビューで言っていたのとほとんど同じことが書かれていた。もしかして絶対に勝てるかと確信していたのではないか。これを見てからいけば、馬単買えたよな、とちよつと馬券的には悔しい気持ちもあるけれど、私はまたひとつ歴史の目撃者になった。

競馬に出会ってよかった。

## 宝塚記念

有馬記念はグランプリと呼ばれ、宝塚記念はサマーグランプリと呼ばれる。どちらもファン投票を行い、その上位に優先出走権が与えられる。しかし秋のG1戦線に向けて休養をとる馬も多く、秋の最終目標とされる有馬記念とはどうしても違いが生まれてくる。また近年では海外 G1への前哨戦としての参加も多い。

ところがこの宝塚記念、まだ連覇した馬どころか、二度優勝した馬は出ていない。

これも二〇〇五年のこと。

いつもはテレビで観戦となるのだが、たまにはパークウインズで見てもようと思いい立ち、府中まで繰り出した。天気はよかったように思う。競馬場についてみると、土曜競馬の開催なのではないかと思うほど、たくさんの人がいた。

春競馬はダービーまで、としている競馬ファンも多い。そのため安田記念はクラシックよりも人出が少ないし、宝塚記念となると、先にも書いたように休養馬も多いために時に盛り上がりにかけることがある。なので思った以上の人出であった。

何レースか馬券をちよつとずつ買いながら宝塚記念を待った。私のもととも関西の出身だし、宝塚には高校があるのでこのネーミングだけでもちよつとし思い入れが出てしまう。それに今年はタップダンスシチーの連覇がかかっていて、前哨戦となる金鯱賞で強い勝ち方をしていたので期待が膨らんでいた。

ファンファーレを聞いたのは、西門にちかいスタンドだったと思う。まるで目の前でレースが行われるかのように手拍子が起こった。ぞくつとしたのを覚えている。馬券はなにから買ったのか定かではない。

大外だったタップダンスシチーは、ゲートが開いていつものように前へと行き始めた。画面が十五頭の馬を映し出し、一頭ずつ紹介

するアナウンスが流れる。後方グループまで紹介し終わって、画面が先頭に切り替わる。大方の人間がそこにはタップが映し出されるだろうとの予想に反して、押さえ切れなくなったコスモバルクがいた。スタンドから

「ああ、また行ってしまったか」

というような笑いがどつと波のように起こった。

タップダンスシチーはじわりじわりと進出して行った。最終コーナーに差し掛かり、先頭に立った。しかし脚色が鈍い。割れんばかりの声援でアナウンスがまったく聞こえなくなった。赤と青と白の勝負服は馬群に沈んでいく。ゴールを最初に駆け抜けたのはスイープトウシヨウだった。牝馬の制覇は他にただ一頭だけである。

馬券が絡んでいなかったこともあるけれど、なぜか少し冷静な気分だった。空を見上げて思った。目の前でレースはやっていない。

この歓声も声援も本当は届くはずはないのだけれど、この空はつながつている。「聞こえていますか」と問いたくなくなった。

スイープトウシヨウは頑固な馬で、よく馬場入りを嫌がる。主戦の池添騎手が、キャンターに入る前に下馬している姿をよく見かける。どこかの記事に

「にんじんをやって食べてくれなかった馬ははじめてだ」

とのコメントを見た。返し馬もまともにできない状態が続く中、よく頑張ったと思う。個人的見解では、関東圏でのレースのときに嫌がるそぶりが多い気がするので、彼女はいわゆる標準語が嫌いなのではないかと推測している。ばりばりの関西人というわけだ。

今年の宝塚記念は私にとって勝負だった。エッセイを書き始めたから振り返ってみてわかったことなのだが、この三年春のG1には参加しているだけとなっている。全く馬券を取っていないのだ。三年連続G1の初日が秋以降に持ち越しはまずいと思い、予想を展開した。もちろんメイショウサムソンは強い。凱旋門への遠征も控え、下手なレースはできないだろう。互角に戦えるとすればと考え、岩田ジョッキーの代役となる三十七歳のルーキー、内田騎手のエイシ

ンデピユティーを選んだ。いつも買っている新聞が対抗に推しているのを知ったのは予想をした後からだだったので、これはいけるのではないかと思い、ようやくG1の初日をつけることとなった。

アタマ差で二着に敗れたメイショウサムソンは凱旋門への出走が微妙な状況と伝えられている。道悪の影響もあつたし、決して弱い競馬ではなかった。ぜひとも参戦して欲しい。あなたの夢、そして私の夢を乗せて。

この空はフランスにもつながっているのだから。

## 夏競馬と馬券

春の競馬が終わり、夏競馬が始まった。

夏はお休みするというファンも多いが、私はしつかり参戦する。

秋のクラシック最終戦を含めたG1を勝つにも大切だと思うし、いくつかのお楽しみポイントもある。

まずは新馬戦。来年のダービーへの道のりはもうすでに始まっている。これから勝ち星を重ね、あの舞台へ立てる切符を手に入れる。早くに賞金を重ねておけば、来年ローテーションも楽になる。二歳で活躍するとその後の活躍があまりないという超早熟馬も中にはいるが、クラシック戦線を戦うには新馬戦からの活躍も要素として大切なものになってくる。しかし、今の時期の彼や彼女たちはまだ丸ままのにんじんがかじれないという。そんな若いときから頑張っていると思うと頭が下がるばかりです。

次に夏馬を探す楽しみである。春や秋には走らなくせに夏になるとなぜか走る馬がいる。丈夫で夏ばて知らずなのか、「うひょー、夏だぜ！」というお祭り好きなのか、とにかく夏は走るといふ馬を探るのが楽しい。馬券的にもおいしいことが多い。本当のところこの要因は、いわゆるローカル競馬という小回りの競馬場に舞台が変わることではないかと個人的には考える。輸送も多くなるので、輸送が苦手な馬はまず調子が落ちる。脚質的に広いコースがよいとかもまれ弱いであるとかいう馬にも不利になる。結果的に輸送や他馬との接触などには全く凶太いけれど、

「坂があるようなしんどいコースだとやる気なくなるのよね」というような愛すべきお嬢様やお坊ちゃまが活躍するのだと見ている。

ローカルに競馬が移ると楽しみは他にもある。東西、新旧の騎手が入り乱れてのレースとなり、予想するには難しいがその腕を見るのは面白い。サマージョッキーズシリーズは暮れのワールドジョッキ

キーズシリーズの出走権もかかっているのでそのあたりも見所だろう。角田騎手ファンの馬友は去年大はしゃぎだった。騎手のみなさんからすれば移動が大変かもしれないけれど。

そういえばJRAから恐ろしいメールが届いていた。三連単を全レース発売するというのだ。

私が始めた頃は馬番連勝式という馬券が出始めたころだろうと思う。いわゆる馬連だ。私は普通に馬連を買っているが、もうすこし前からのファンになると馬連なんてなかったとなる。そのうち三連複やワイドが出て、馬単、三連単と現在の形にいたるのだが、「競馬はやはり単勝」というファンも多い。個人的には馬券は三着、レースは優勝が競馬かなと感じている。

この三連単全レース発売の恐ろしいところは二つある。馬連すら当たらないのに、三連単なんて当たるわけないだろう派の私としては三連単を買うにあたりどうしても点数が増えてしまう。だが売っているものを買わないなんてという気にもなつて、ちよくちよく手をだしてしまう。しかも今までは限られたレースでしか買えなかったものがすべてで買えるとなると

「そういえば私、一千万以下の小回りダート戦得意よね」  
などと勝手な言い訳をつけて第七レースあたりから三連単に走るといふ図が今から目に浮かんでくる。

もう一つ危惧するところは、その他の馬券の売り上げが落ちるところだ。

JRAには申し訳ないが、このキャンペーンをやっても全体の売り上げが上がるとは思えない。先に書いたように夏はお休みするファンもいて、夏競馬は限られたファンのものである。そのメンバーが急に増えるとも思えないし、急に馬券購入の予算を増やせるほど全員リッチになるとも思えない。とするとどうなるか。

「せっかく三連単も発売だし、ここはいつもなら馬連を買うけど三連単で勝負するか」

同じ予算内で三連単にお金流れ、他の馬券の売れ行きが悪くなり、

結果オッズが下がり払戻が少なくなるのではないだろうか。すると夏競馬は三連単じゃないとオッズに妙味がないとなって逆に限られたファンも離れて行ってしまうのではないのだろうか。

そんなことをするなら重勝式を発売すればよいと思った。これは何レースかの一着馬を当てるというよくメディアなんかのイベントで開催されている。現在では競輪でこの方式が導入された。

海外の競馬では発売しているところもあるとは知っていたが、日本でも昔は売られていた。しかし不正行為の温床となりうるという見地から議論され廃止となっている。

不正が行われるかどうかはパドックのあちら側で考えていただくとして、売り上げを伸ばしたかったり、新しいファンを取り入れるのならこの馬券はとても有効だと思う。一日中のレースでなくともメインレースの他に最終レースを取り入れる。と、普段はメインが終わるとかえってしまふファンも

「最後までみていくか」

となる。第一レースとまでは行かなくても午前中のどれかのレースを取り入れれば普段はメインレースあたりからやってくるファンも

「午前中からいくか」

となる。そのうえキャリアオーバーでもつくっておけば

「今競馬が熱いらしいよ、キャリアオーバーが二億だって」

と外部のファンにも噂が広まり馬券が売れる。そのうちの何人かは競馬の魅力にとりこになるかもしれない。いまや文庫本も「ジャケ買い」の時代。きつかけは何でもいいのではないか。

そんなこんなで夏競馬がはじまる。その楽しみに、JRAのコマースシャルのごとく、開催地ごと現地への旅行が加わればそれ以上いうことはないのだが。

## たとえば

私は馬刺を食べない。

以前は大好物の域であった。しかし、競馬ファンには馬刺は食べないという人がたくさんいる。人知れず消えてしまった競走馬が食卓に並んでいるなんていうのは、ギャンブル嫌いな人々のちよつとした意地悪だとはわかつている。だいたい、パドックで見ているれば霜降る肉ではないことなど一目瞭然だ。

馬刺食べますというところこそ「ひとでなし」扱いを受けることもしばしばである。

「可愛がつているペットを食べるのか」

と見当違いな言いがかりをつけられることもあった。だから競走馬は皿に乗りませんから、といつても聞く耳はない。反対に全く気にしない人もいて、私が生まれて初めて食べた桜肉は随分昔からパット会員であった叔父が用意してくれたものだった。

だが、人と話をする仕事をしている手前、なんとなく食べなくなっていた。嫌だと思う人がいるのなら、あえて食べるものでもないなど思った。自他共に認める「チキン大好き」の私にしてみれば、鶏肉禁止は耐えられないが、桜肉禁止は特別苦痛でもなかった。

そんなこんなしていたあるとき、居酒屋で飲んでいたら、話しながら誰かが頼んだ牛刺を口に入れた。それが牛ではなく馬だったことはすぐに気がついたが、口に入れた一切れは完食した。別段気にも留めなかった。

しかし。

その後の連敗はひどいものだった。多分、食べたのは今頃。そしてその後馬券的中は十月か十一月あたり。もちろん買い控えていたわけではない。買った馬はことごとく不利を受けたり、落馬したり。たまに買いにいけないと、三連単どころか五連単的中などという不運に見舞われた。もちろん、馬刺のせいではないことはあき

らかだけれど、そこは勝負師。「馬刺は食べない」ジंकウスに決定、というわけである。

競馬のエッセイとしては不適切な話題から入ってしまった。それでも夏になると思いついで申し訳ない。それとともに思いつくのが武豊氏の「にんじんは馬が食べるものだから食べない」という発言である。これは私も「牛乳は子牛が飲むものだから飲まない」と頑なに飲まないので大いに納得する。ようするに嫌いなのだ。

夏競馬というとみんなテンションが下がるが、もともと条件戦のほうが好きならには関係ない。だいたい勝ちきれない「無事これ名馬」のファンなので、競走馬としての幕を閉じた後振り返ると、骨折やらの故障以外、生涯たいしたお休みはありませんでしたという馬が多い。私も今の仕事場になってから三連休を二度ほど取っただけで、仕事場自体が休みでないかぎり長期休養はしていない。そのあたりに自分を重ねているのだろうか。クラスをたえてみても決してオープン馬ではない。夏を越えるたびに降級する千六百万条件馬といったところか。

先週のアイビスサマーダッシュのテレビ放送を娘と二人で見っていた。カルストンライトオの映像が懐かしかった。鼻面が白く馬っぽくないので愛称は「牛君」だったという記事を読んでいつ頃にファンになった。後期に主戦の大西ジョッキーの寡黙な感じも好きだった。サニーブライアンの

「一番人気はいらぬ、一着が欲しい」

というダービーでのコメントはあまりにも有名だ。娘も牛君はファンだったので二人で懐かしく見ていた。どこの枠から発走しても、一目散に外ラチ沿いへとやってくる見事なまでの徹底振りが小気味よかった。馬場を斜めに突っ切るのだが脅威のスタートダッシュで目の前をカットされた審議とはならない。素敵な逃げ馬だった。

骨折放牧帰りのサープラスシンガーもスタートの上手い馬で、休む前に注目していた馬だった。結果は四着と馬券にはならなかったけれど、ゲートが開いた直後の進出には胸がときめいた。たとえば

いえば私は無難な先行馬だろうと思う。ディーピンパクトのように追い込んできつちり届くのも羨ましい限りではあるが、引つ張っていく馬はもつと好きだなと思った。追い込み馬だったら上手いときは届くけれど展開によっては惜しくも届かず、というほうが共感するという点では好きだろうと思う。

まとめてみると私は、丈夫がとりえで何とか入着して、たまにメンバーに恵まれたりするとちょっと馬券にからんだりもして、飼葉代は稼いでいるくらいの条件馬で、外枠が好きな先行から差し脚質の馬。決してサンデー産駒ではなく、かといって極端に珍しい血統でもない。白馬や栃栗毛のような美しい馬体でもなく、競馬初心者にパドックで、

「どの馬も同じに見える」

と言わしめるタイプの最たるものだけれど、実は他馬よりちょっと尻尾が短い。芝もダートも重馬場のときなら走るけれど良馬場は結構苦手だったりする。距離は二千では短いが二千二百じゃ、ちと長い。障害練習はするものの飛越が下手くそで結局平地のレースに出ている。そんなところだろうか。みなさまは自分をたとえるならどんな馬になるのだろうか。

騎乗するジョッキーを選べるならば、できるだけ見せ鞭で済ませてくれるジョッキーがいいな。

## 思い出の歌

気がつく和二回しかエッセイを更新せず、一度は競馬にも参戦せず、馬券は一つもとれず七月が終わっていた。先週なんて、競馬をテレビでやっていることも少なく、なんとなく映像を見られない私としてはテンションが下がってしまった。

珍しく内田博幸騎手と武豊騎手が騎乗停止になっているなど思ったら、武騎手の場合は新馬戦だった。

新馬とはいえ競馬場に来る限りは十分なお稽古をしてやってきているのだろうが、やはりいろいろ逸話はある。コーナーを曲がりきれずポケットに突っ込んでの競争中止だとか、ゲートをでることができなかつただとか。ダイワメジャーがパドックで座り込んでしまったのも新馬戦だったのではないか。

デビューするものたちがいて引退もある。

障害騎手一筋の嘉藤ジョッキーが引退された。申し訳ない、私はよく存じ上げていなかった。五十四歳。騎乗暦は三十年。三十年前といえば、私は馬といえば馬車を引くか動物園にいるものと思っていた頃だろう。競馬の存在すら知らなかった。競馬場の存在も。他の障害主戦のジョッキーたちに囲まれた引退式の笑顔がとても印象的だった。優しい、どこか切ない、まるでサラブレッドのような笑顔だと思った。

ロックドウカンブも登録を抹消された。期待していた馬だけに残念だ。その他にもたくさんさんの馬が今週も引退している。ふと思った。函館記念四連覇に挑んだエリモハリアーはどうするのだろうか。

四連覇に挑むというだけですごいことだが、どういう馬なのかなと戦績を追って見ると、デビューの時にはすでにセン馬だった。ということとは、競走馬としての人生がサラブレッドとしてのすべてとなると、そのときにすでに決まっていたということだ。勝ち味に遅かった彼には無縁ではあったが、クラシックレースにも出られない。

ブラッドスポーツである競馬において「血を残す」ことができない彼はひたすら「走ることに生きていく。次走は新潟記念の予定らしい。ぜひ、G1の舞台で彼を見たい。」

今週はなんとなく競馬の雑誌を買った。芹沢騎手の通算六〇〇勝達成や中館騎手の一万四〇〇〇回騎乗達成の記事の横に塚田騎手の近況の写真があった。脳挫傷で意識不明に陥り、現在は実家に戻っているらしい。車椅子の写真が痛々しかったが、生きていてくれてよかった。これからどんなふうにな競馬に携わっていくのだろうか。そういえば、競馬学校に見学に行ったときにも車椅子で校内を移動されている職員さんに出会った。

私は競馬ファンを気取っているけれどまだまだだなと思う。酒のあてにてらてらとしゃべっている程度にはいいけれど、まだまだ行ったことのない競馬場も多い。牧場にも脚を運んだことがない。若手で地方ジョッキーの二世だったりする騎手たちや、白毛のユキチヤンは地方競馬の発展にも一役買おうとしている。私なんて実はまだまだ知らないことのほうが多いのだ。

「競馬が好きなんて、本当に好きだよな」

いつのレースがどんなで、自分の応援している馬が誰の騎乗でどういう展開でレースを運んだかをつらつらと話すよね、といわれた。

「その記憶力を他に生かせればいいんですけどね」

と笑って答えたが、無理して覚えていくわけじゃないんだよなと思っただ。無理して勉強しているわけでもない。そう、例えば昔流行った歌を聴くとその頃の自分や好きだった子や、そのせつない感情までも一時間前のことのように思い出せるように、その馬の名前を聞くと、レースの様子やそれと同時にそのレースを見ている自分を思い出す。だから本当は語っている向こうのその脳裏にある場面は競馬だけではなかったりする。それを説明するのはなんだかしやくだし、恥ずかしかったのではぐらかした。

「来年のダービーはどうですかね」

誰とどこでどんなことを思いながら、何を託してレースを見るのだ

るうか。そう思いながらいったら

「まだ夏なのに来年のことなんていったら鬼が笑うよ」といわれてしまった。まあ、伝わりにくいですがねえ。

## どうして今日は週末じゃない

夏は皆様、お休みの方が多く、色んなイベントにお出かけである。接客業の私はそれとは反対にひたすらに忙しくなる。お盆はいえは帰省する同僚たちもいてこれはまた忙しい。これは毎年のこととて、本当はちゃんとレースに参加してきたいのだけれどそこまでも手が回っていないのは、これまでの収支表をみても明らかだった。加えて去年は自室で熱中症になり仕事を休み、それを夏休みにされてしまったというおまけつきである。

今年も案の定、

「ドリームジャーニーはデュランダルみたいな脚質だな」とか、

「マルカシエンクはつよいねえ」  
てな具合で二週間が終わってしまった。

だからといって全体的に悪いことばかりではない。少々外食が多すぎて腰周りの肉が気になるほど仕事は順調だったし、変わった人との出会いがあったりしていつになく楽しい日々だった。が、しかし……

まあだいたい人生においていいことばかりが続くわけがなく、突然落ち込むような出来事がふってくる。結構、右から左へ受け流すのが得意なほうではあるが、そうもできないときもある。いらいらした気分を抱えて腹がたち、さらにそれを上手く消化できない自分に腹が立ち、負のスパイラルに陥って行く。そう思う。

「どうして今日は週末じゃないんだ」

たとえば週末だったとしても、強行に競馬場に脚を運んだ場合、また体調を崩してそれを夏休みにされかねないくらい忙しい。それでも競馬に行きたいと強く願った。一番近い競馬場は府中なのでもちろん今はパークウインズなのだが、それでも行きたいのだ。

なんとか、どうにかして、くさくさした自分を立て直そうと必死

になってアタマをめぐらし、長風呂にしてみようか、いやそれでも入っている間にまた嫌な気分になりそうだとか、運動しようか、いや体力消耗して余計めいりそうだとか考えて、腹の奥底から湧き出た言葉が、

「どうして今日は週末じゃないんだ」

だと気がついて、少しだけ気分が軽くなった。

こんなふうには絶望的な気分になるときに、何度も競馬場に脚を運んだ。霧雨に煙っていた東京コースを今も思い出す。せつなかった。なんて私はだめなやつなんだろうと思った。実は仕事をやめて半年近く引きこもったことがあるのだが、そのときも土日の競馬場通いだけは欠かさなかった。言葉を交わす人間は、一週間に片手程度で、そのうちの半分以上は競馬場だった。救いの場所の競馬場、それは確かなのだが、コースの様子や景色や天気は思い出せるのに、一つだけどうしても思い出せないことがある。それは、

「あの景色をみてせつない気持ちだったけれど、それはなぜだったのか」

要するになんでブルーな気分で競馬場に脚を運び癒されたのか、根本的なことは覚えていないのだ。

所詮私の悩みなんてその程度のもんよと開き直り、自分自身を笑ってしまった。まあ、まあ、こんな落ち込んだ気分もよいではないか。それほどできた人間であるわけでもなし、できた人間にならなくてはいけないわけでもなし。三浦ジョッキーは新人にして重勝初制覇をし、リーディングも上位にいるけれど、みんながみんな彼のような天才ではない。時には落馬も騎乗停止も甘んじて受けようじやないか。そしてまた戦線に戻るためにあげばよい。

すっかりとはいかないけれど、だいぶ気分が楽になった私は、今年には帰省できずに札幌にいる知り合いにメールを送ることにした。競馬を見たことの話など聞いたことのない人だ。

「元気ですか？ 今週札幌で白馬が走ります。とても美しい馬なのでお時間があるのならお出かけになってみてください」

## リハビリ

気がつけば八月も終わっていた、というより九月に入っただいぶ過ぎていた。

ただひたすらの忙しさにかまけて、やれ流行のラテンダンスエクササイズにはまってみたり（一ヶ月で三キロ落ちました）、脚でスープを飲んでみたり（いまだ跡が消えず）、ワインに懲りだしてみたり、禁煙を決意してみたり（今日からです）……とにかく忙しい毎日ですっかり競馬から離れ、ブログも更新どころかサイトにすら行っっておらず、こうしてパソコンのキーボードを叩いても伸びすぎた爪が少々邪魔なくらいである。確か先週はレースすら見なかった。

あれほど夏競馬の大切さを説いておきながらなんだけれど、こういうふう短い期間はなれてみるのもいいものだ。恐ろしくて今年の夏の収支はまだ見れないけれど、冷却期間にもなる。だいたい三連単全レース発売なんて最悪だと思いつつ、まんまと作戦にはまり、味を占めたJRAはまだ発売し続けるという。恐ろしい……と思いつつながらも、ん？　まてよ。

季節はインディアンサマーを向かえ、競馬は中山に戻ってきている。土曜日の第八レースといえば、私が最も得意とするレースではないか。そこでも三連単が発売されているのだ。これは逃す手はない。

とは思ったものの、やはり離れていると騎手の調子や調教師の調子などがわからない。そこはもうどうしようもないと割り切り、春に使っていた表計算を開きこまごまと打ち込み始めた。

そういえば来週、馬友が現地にいくと聞いていた。中山か阪神か……阪神に同行して、ついでに故郷の海でも見に行きたいが、これから襲ってくる出費を考えると足が重くなる。はやく六億円ほど当たらないかなあ、と思う。私が六億円を手にしたら、六億円の経済

効果があるぞと後先考えない夢物語を想像しつつ、やはり現実はせつなかつたりする。

いつもつらいことがあると助けしてくれる競馬に、ちょっとくらいいいことや楽しいことがあったから背をむけていた自分がものすごく悪いことをした気になる。そういえば、去年もこんな気持ちになった。それは競馬ではなく、お守りで願いを叶えてもらった神社に對してで、秋華賞で勝ったお金で、

「そうだ、京都行こう」

なんてCMみたいに思い立った。通勤ラッシュに巻き込まれるのがいやで朝一の電車に乗り、東京駅から新幹線に乗り、京都でラッシュに巻き込まれ、朝早すぎて全く京都の風情のないファーストフードでご飯を食べた。お参りを済ませてお土産を買って、京都滞在四時間、車内五時間という馬鹿な旅を決行した。それでも気分はすっきりした。

得意の第八レースは、三連単でとつてもたいした金額にならなそうだった。点数だけが増えていく。買い方を考え、ワインアドバイザーとロットオブカクテルを軸に流すことにする。マルチにすれば、

「そうだ、京都行こう」

ならぬ、

「そうだ、仁川行こう」

も現実のものとなりそうな配当もある。完璧にオッズに負けている。まあしかし、本日はリハビリということでそれだけをパットで購入し、時間が来るのを待つとしよう。うう、まだ若干力が入らないなあ……

## 秋競馬

夏の間、なかなか競馬に触れることができないため、エッセイのネタにしようと借りておいた「ORAIION」すら見ることなく、九月の開催も終わっていた。

以前も書いたし、前回でも証明済みのように、「中山土曜の第八レース」は得意中の得意だ。前回は見事的中させたものの、先週今週は予想すらできなかった。中山開催が終わってしまう……

先週はローズステークスを的中させ、来月に迫った自らの誕生日のお祝いのお返しに夢をはせ、今週こそちゃんと予想してうはうはするぞ、と心に決めるも、大人って嫌ね、仕事の忙しさにかまけて土曜を見送った。しかし秋競馬も真っ盛りに入。新聞を買うことだけは忘れない。

今週はとりあえず参加しなくてはと、日曜の東西のメインを予想。どちらも掲示板に載っている馬番の二着だけないという一番いい結果に終わる。

しかし。

久しぶりにレースを見た。というか、どうしても練習しておきたい歌があったので真昼間からスタジオに入り、急いで帰ってきたら「寒い」

とパーカーの中に足の先まで突っ込んだ娘が、競馬中継を見ていた。おいおい、まだフランスには連れて行けないぞと思いつつも、おちよつとうれしくなる。レースが始まって、

「二着武はいやー」

と絶叫している私に知らん振りしながらもちちらちらと画面を見る。うっん、ここでも何かしら親子制覇の予感、などと親ばかりを發揮しながら東のレースにうつり、

「豊！ 豊！」

と吉田豊騎手騎乗のトウシヨウシロツコの追い込みを信じ、

「やったー！」

というものの最後に迷って買わなかったキングストレイルが二着であることを確認し、ぐったりする。しかし東西とも硬い決着だったので穴党の私にはとれる馬券ではないとすっきりした気分です。勝利ジョッキーインタビューを見る。

四位君のインタビューの下に、彼の偉業が流れている。三十五歳。六十四年ぶりの牝馬のダービー制覇。アサクサキングスで別の馬でのクラシック二冠を達成。ディープスカイでダービー二連覇。

「同じ年なのに……」

見た目は絶対に私のほうが若い、そんなところで勝負している自分がいやになる。いつもながらに甲高い声で関西なまりの標準語。なぜか胸が熱くなる。ディープスカイは強かった。

東では蛭名ジョッキーのインタビュー。こちらもしっかり甲高い声で、

「グランプリホースですから、恥ずかしいレースはできません」

とマツリダゴッホをほめる。彼も強かった。中山巧者とはいえ五十九キロを背負って直線でも持ったままだった。さすが今年の有馬記念の覇者である。胸が熱くなる。

競馬には他のギャンブルにはないほどの人間が携わっている。馬を中心に、馬主、生産者、管理する調教師。レースに行けばジョッキーがおり、レースを運営する人たちがいる。そこまでがパドックのあちら側であろう。そしてこちら側にはレースを見る人、馬券を買う人、親に連れられて仕方なくそこにいる人……なんにせよせないほど美しいたった一頭のサラブレッドを中心にたくさんのかかわっている。他のギャンブルに食指が伸びないのは、結局私は人間が好きなのだろうなという結論に至る。

『東京競馬場参戦』の回で登場していただいた方が最近このエッセイを読んでくださっているようだ。

「詳しい競馬のことが書いてあるとわからない」

といわれてしまった。なるべく平たく書いてあるつもりではいるの

だが。私も競馬暦が長くなったということか。

「競馬の魅力は現場に行くのが一番だと思う」  
との助言もいただいた。その通りだと思う。

最近知り合った方が、私が競馬好きだと知り、

「今度Kさんに会うから、どの馬がいいか聞いとくね！ 二十頭くらい持つているはずだから！」

と意気揚々と宣言された が、たぶんそのお名前は馬主さんではなく調教師さん。

まだまだ競馬を広める余地はたくさんありそうだし、しかし娘とも話したけれど、JRAのCMで佐藤浩一氏が『げんかつぎ』と称して踏んでいるツーステップ。げんかつぎであるということはあの歩き方をしているときになにかしらの大きな馬券を取ったに違いないのだが、一番最初にそうやって歩いた理由が知りたいと思うのは私たち親子だけだろうか

## 眠れぬ夜

秋G1の初戦。

女の子でスリープレスナイトといえば、『恋の病』だろう。しかし私は、調子に乗ってワインを二本あけ、階段から落ちて流血騒ぎを起こし、いかげんにしなさいといわれて反省のため節酒中で眠れぬ夜を過ごしていた。レースの予想はばっちり当たったものの、どうしてもジョリードダンスが気になって手を広げトリガミになってしまった。

ロンシャンでのサムソン君の雄姿も、仕事でリアルタイムで見ることができず、JRAのホームページで見て、一人で、

「審議！」

なんて叫んでいた。スタート後によられたのはかわいそうだった。完全なアウエーのレースだ。日本馬が、二頭以上で挑戦できれば、凱旋門賞もこれまでとは違ったレースができるのではないか。

さて、競馬が東京にやってきた。明日はウオッカがやってくる。見に行きたいけれど、F1の日本グランプリと重なっている。あきらめてテレビ観戦にすることにする。天気が悪いこともあり、あまり気分が乗らないが、土曜日のレースも検討する。

京都の第十レース清滝特別に、クロユリジョウが出ている。平成十七年の勝馬だ。そしてこのレース、私は京都競馬場のスタンドで見っていた。直線で、

「松岡！」

と叫んでいた（けれど馬券は取れなかった）。その日のメインレースは菊花賞。朝から異様な雰囲気に含まれていた競馬場の風景を思い出す。もう三年前なのかと感傷に浸る。これも何かのお告げかもと買い目を探すが見当たらない。結局、アペリティブとシングルイクバードからちよろちよろと流すことに決める。

ウオッカの斤量を見て、気の毒になる。ダービーをとってしまっ

たので必然的で仕方ないことだけれど女の子なのになあ、と思いなから雑誌の誌上パドックを見ていたら、ものすごい胸前の筋肉で全女の子とは思えない。牝馬の優勝は今までないけれど、今回はありえるかもな、と思いつつアドマイヤフジの人気の落とし方に穴党の血が騒いでいる。

なんだかんだと秋の競馬が始まると、私の携帯電話は忙しくメールを受信しだす。色んな情報を得るのも、競馬の話も面白いからいいけれど、日曜日の朝八時なんかに届く。私にとっては真夜中だけど、返信しなくては……という使命感にかられ、まだアルコールの残る頭でメールを送り、おかげで目が覚めてしまい眠れなくなるなんてことになる。そして日曜日に出勤すると必ず、

「獲った？」

と聞かれる。ああ、私もう何年この生活をしているんだろう。

いろいろな都合で東京参戦は十一月に持ち越しになりそうだ。第二回のジョッキー・マスターズには必ず参戦する予定。第一回も見ているので、

「ここははずせないでしょ」

と娘を誘ったら、

「多分、ものすごく面倒くさいけれど行く」

といわれた。往年のファンのお客様はオグリキャップを見に行くとおっしゃっていた。

世界が恐慌に陥ろうとも、天気が悪かろうとも、肝臓が悲鳴を上げていようとも、夜長なのに寝不足が続こうとも、ああ、秋は楽しいなあ……

## 秋の狙い目

前日たっぷりワインをいただいた私が目覚めたときには、F1どころか毎日王冠も終わっていた。ウオツカとアドマイヤフジが二着、三着という結果を見てがっかり。配当を見てさらにがっかり。F1も、

『ものすごく面白かった』

というメールをもらい、げんなり。そしてオリックスのプレイオフ負けを知りさらにがっかり。しかし、馬券を取り損ねた後のタラレバどころか、それ以前の問題である。

ウオツカはよく頑張ったと思う。あの斤量でよく粘った。

「逃げるとはね」

と馬友の一人が言っていたが、あれは逃げたのだろうか。結果的に最後に差されているから『逃げ』なのかもしれないけれど……サイレンスズカの場合もそうだけれど、私は彼を逃げ馬だとは思っていない。他馬を寄せ付けないほどの能力の持ち主だけで決して逃げ馬ではなかったと思う。今回のウオツカも、あまりもスタートがよく、能力が抜きん出ていたからハナを切る形になっただけではないだろうか。

さて、秋華賞。

このレース、とても相性がよい。去年もダイワスカーレットとウオツカの軸にレインダンスとザレマの二頭という買い目できっちり獲った。この日はついでにその後の第十二レースも獲ってうはうはだった。秋の競馬を買うに当たって、私は二つ注目していることがある。

一つはダンスインザダーク産駒。これは馬友の誰かに聞いたのできつとどこかのデータであがっているのではないかと思う。それを教えてもらってから、なんとなく見ていたら結構いい確率で来ているので、必ず押さえるようにしている。去年の紐二頭もどちらもこ

の産駒である。

もう一つは人気薄の武幸四郎騎手。これはティコティコタツクから必ず注目している。おかげでソングオブウインドが勝った菊花賞も獲った。レインダンスも幸四郎騎手の騎乗だった。

この二点から秋華賞はムードインディゴと人気を落としていたらリトルアマポーラなんだけれど、府中牝馬ステークスにカワカミプリンセスが登録しているので幸四郎騎手が東西どちらで乗るのかわからない。角田騎手大好きな馬友は、

「カワカミプリンセスはぜひ、角田騎手で」

と今でもいつている。私もできれば人気薄の馬に乗って穴をあけて欲しいと思う。人気馬の背中でプレッシャーを受け真っ白な顔になっている幸四郎騎手を見ているのが気の毒、という理由もあるが。

北海道に行くというお客様から、

『お土産はなにがいい？』

とのメールを頂いた。

「フランスに行くけど、お土産何がいい？」

「凱旋門が欲しい」

のノリで、

『アグネスタキオン産駒の子馬（牡）』

と返信したら、

『ぬいぐるみ？』

と返されてしまった。結局ギャグを説明するというなんともお粗末な結末になったのだけれど、あのまま知らん顔していたら、一体誰のぬいぐるみを買ってきてくれたのだろう。

## 秋華賞

午後一時ごろに、せっかく買った飲み物がヨーグルトドリンクだったという残念な（乳製品が苦手です）夢を見て目覚めた。昨日のちゃんぽんのおかげで、ものすごく飲んだ一昨日よりも少しお酒が残っていた。

あんまりやる気もないまま、軽くご飯を食べて、パソコンを開き、表計算ソフトで検討を始める。秋華賞はムードインディゴと決めていたけれど、念のためだ。

テレビをつけると調度サフラン賞だった。カツヨトワイニングがいいかなあと思い、後人気の二頭でボックスにしてみる。と、一着、四着、十二着。残念。まあ、思いつきで買ったし、と気を取り直し、秋華賞の検討を続ける。耳に飛び込んできた名前は、

「バルバレスコ」

これは一昨日飲んだワインの名前だった。気になって、ワイドで五点流しておくも十一着。またも残念である。結局、ムードインディゴとエフティマイア、ムードインディゴとマイネレーツェルからちらほらと流し、府中牝馬ステークスを見た。

馬券は買っていないかった。予想はカワカミプリンセス、ベツラレシア、レインダンス。カワカミプリンセスが濃厚だけれど、秋山騎手に勝って欲しいなあ、と思っていた。

ゲートからのカワカミプリンセスの飛び出しは見事だった。休み明けとは思えない反応だった。あんまり前に行ってしまうのはどうかなあ、と思っていたけれど直線を向いたときに持ったままの手綱を見て、鳥肌が立った。ゴール前で抜け出してからブルーメンブラッドの脚もすごかったけれど、私は内にいたレインダンスの緑の帽子ばかり見ていた。

「三着に残って、ここで復活を……」  
と残っていたら、ぴろっと差されてしまった。誰が差したのかと思

えば、秋山騎手。結局二着、三着、四着。馬券を買っていないくてよかった。買っていたら吉田豊騎手を嫌いになつていただろう。

さて、秋華賞の時間となる。結果的に見れば、一番強かったのはプロヴィナージュではないだろうか。あの速い流れを自ら作り、三着に残ったのはえらいと思う。実はこの馬、関東オークスの二着馬で、その後のラジオNIKKEI賞のときは雨だったこともあり、馬券を押さえてあった。今回も気にはなつたけれど、そこまで手が広げられない。

ブラックエンブレムとムードインディゴの差は位置取りだろう。ゴールした瞬間、福永騎手が下を向いたのが印象的だった。そういえばブラックエンブレム、いつか押したなあと振り返ってみると、私の桜花賞本命馬ではないか。うう……

とはいえ、ローズステークスの時から一押ししていたムードインディゴが二着に入つたので満足だった。レースが終わって馬友から電話がかかって来て話していた。どうやればこの一千万馬券をとれたか。馬友の本命はトルポピーだったのだが、押さえにブラックエンブレムが入っていたらしい。

「一二着固定の総流しはできたかも」という。私は、

「二三着軸の総流しマルチなら獲れたかも」

と思う。これは、『百人に話して誰一人納得しない話』第二段だと笑われた。「ピンクカメオとムラマサノヨートーは買えるけれど、ローレルグレイロは買えない」現象である。

しかし、荒れたなあ、と思っていると、忘れ物をとりに学校に行つていた娘が帰ってきた。テレビで繰り広げられる予想に、「だからムードインディゴだって」

と反論していたのを聞いていたので、結果をお知らせした。

「ムードインディゴ二着だったよ」

「じゃ、馬券獲つたの？」

「ううん」

「だから複勝がいつていつてんじゃん。そうやって欲をかくから  
当たらないんだよ」

「……」

その通りなんだけども。

## 天皇賞（秋）

母が『レット・バトラー』という本を読んでいた。新しい本の入手を目ざとく見つけた私に母は言った。

「そう、『風とともに去りぬ』の続編で……」

「母スカーレットブーケ、父サンデーサイレンス……あれ？母スカーレットリボンだったっけ？」

「何それ？」

「知らないの？」

娘が参加する。

「ブルーリッジリバーの従兄弟だよ。ブルーリッジリバーは母スカーレットブルー、父フジキセキ……」

「お母さんはだつてこっちのほうが……」

「あれ？レットバトラーの母はどっちだったけ？」

「ブーケじゃない？」

私と娘のコアな会話に母はついていけず、いつの間にか小説を読むことに戻っていた。調べた結果、レッドバトラーの母は、娘のいうとおりスカーレットブーケだった。

とまあ、こんな会話をしているうちに菊花賞は終わってしまったのだが、ディープの三冠を目の前で見たことやら結構、たくさんのエピソードがあるのでまた機会を改めて、それについては書きたいと思う。

さて、天皇賞である。メイショウサムソン君が回避して、ダービー馬三頭対決は流れてしまったけれど、なかなかのメンバーだ。ディープスカイとウオッカのダービー馬対決しかり、ウオッカとダイワスカーレットのライバル対決しかり。

娘はスカーレット一族に傾倒しているので、もちろんダイワスカーレットのファンなのだが、私はどうしてもウオッカを応援してしまう。成績的に見れば、ダイワスカーレットは今まで複勝圏内を外



に行きたいなあ……

## ウオツカに乾杯

運よく昼前に目が覚めたけれど、喉に猛烈な痛みを感じて、現地参戦はあきらめることにした。

ゲートが開いて、ポンとその白い流星が一馬身近く前に出たときには、このままかかって前に行ってしまうのではないかと、毎日王冠のレース運びが頭をよぎった。内のほうでは、やはりダイワスカ―レットがハナを切っていく。いつもは一際長く見せる、武豊騎手の背中が丸まっている。

折り合いを欠いているのだろうか。

パンパンの良馬場。二歳戦でレコードが出るほどの固い馬場だ。縦長になった馬群。最後方の二頭は向こう正面ですでにそのスピードについていけなくなっている。千メートルの通過タイムが出ると、その速さに場内がざわついた。先行集団には、ディープスカイ。その外にびったりウオツカの姿がある。三コーナーから四コーナーにかけてもまだ、ジョッキ―の背中丸まっていた。

大櫂を過ぎ、直線に入る。前哨戦と同じく、ウオツカの手綱は持ったまま。残り三百メートル。一瞬内ではスカ―レットの姿が消えた。勝ったと思ったが、再び盛り返してくる青い勝負服が見えた。

「ウオツカ！ ウオツカ！」

ゴール板を駆け抜けたとき、私は脱力した。

また負けた……

武豊騎手も険しい表情のまま、首をひねっている。誰もグリーンの絨毯を帰ってこない。

検量室前では、スカ―レットが一着馬のところで馬具を外した。写真判定の表示がいつまでたっても消えない。このまま、一着同着になってしまえばいいとさえ思った。レコード決着で牝馬二頭が戦ったのだ。

テレビの中継が、調度コマーシャルの間に、パソコンの画面に速

報が入った。一着ウオツカの文字を見たときには涙が出そうになった。悲願のライバル対決での勝利。果敢な挑戦を続けて勝ちきれない時期もあったウオツカ。かたやその華々しい成績で負けることが許されないスカーレット。これでどちらもG1を三勝ずつ。

武豊騎手のインタビューを久しぶりにみた。川崎競馬場では現場で見たのだが、地方競馬のためカウントされず、今期は重勝は三勝目。G1はフェブラリスステークス以来で、ヴァーミリアンはダイワスカーレットと同じ、名牝スカーレットインク一族である。向こう正面での手綱の引き具合といい、鼻差の勝利といい、武豊騎手の身体の中には時計とメジャーがあると感じざるを得ない。インタビューでは泣き出すのではないかというほど嬉しそうで、アンチ武の私でもとても嬉しかった。

さて、押さえて買ったワイド馬券のおかげで、ウオツカが勝ったレースで初めて馬券を獲った（これだけ応援しているのに負けたレースでしか馬券は獲っていない）ので、夜は文字通り、「ウオツカで乾杯」となった（ズブロッカだけど）。

いい気持ちで家に帰ると、ちょうどF1の最終戦をやっていた。私の応援するキミ・ライコネンはすでにワールドチャンピオン争いからは脱落していたが、チームメイトのマッサがポールポジションで頑張っていた。ポールポジションを維持したままゴールしたものの、ハミルトンが五位でゴールしたため、ワールドチャンピオンは逃すことになった。最終コーナーでの攻防で決着した。母国でのレースでマッサはよくやったと思う。ファンに対するアピールもとてもすがすがしいものだった。

今日は二つも、はらはらするレースを見てしまった。悔しいけれど、最後の最後にワールドチャンピオンを争っていたのはキミではなかったし、天皇賞で一番強いレースをしたのは悔しいけれど、ダイワスカーレットではないかと思う。

しかし、現場での興奮を感じたかったけれど、実際に現場に行っ

ていたら全く何も見えなかっただろう。すべてのレース運びを見られるテレビ観戦で結果よかったのかもしれないけれど、できれば現場で見たい。ああ、もう少し背が欲しいなあ……

## 東京競馬場参戦・秋

昨日、嫌なことがあって、結構深酒をした割にはちゃんと目が覚めたが、すでに十二時を回っていた。

シャワーを浴びて、娘をたたき起こす。一ヶ月前から約束していたので、眠そうにしても、容赦はしない。

「早く。オグリキャップが帰っちゃうでしょ！」

昨日の不機嫌を引きずっていることもあり、かなり強引に起こす。

娘は行きたくなさそうに、咳をしてみたり、体温計で体温を測って『風邪ひいてます』をアピールするが、知ったこっちゃない。

多分オグリキャップと同じであろう真っ白なコートを着込み、競馬場に到着する。右手はパドック、左手にはオグリがいるはずの場所には黒山の人だかり。

「……絶対見えないよね」

ちよっと前のほうにいけるか頑張ってみたけれど、無理。振り返ると、駅から続く通路にも、その場所が見えるスタンドにもわんさか人がいる。結局、あきらめる。見えた姿は、他の人が写真を撮ろうと伸ばした携帯電話の画面だけ。確かに真っ白でした。人だかりの後ろで待っていた娘が小声で、前の人を指しながらいう。

「新聞社の人だって」

二人の男性は、片方がカメラを持っているものの、撮影する様子さえない。

「これじゃあ、無理ですな」

なんて話をしておられた。

さて、私たちは閑散としたパドックの横を通り、いつもどおり今川焼きを買う。そしていつもの場所へ。新聞を取り出してみると、あれ？ 武蔵野ステークス 間違えて土曜日の新聞を持ってきてしまった。痛恨のミス。仕方なく、パドック診断で馬券を購入することにした。

周回する十レースの出走馬をしばらく見て、騎手の登場を待たずに馬券を買い、いつもの蕎麦屋に行く。そばを持ってベランダにて、階段に腰掛けて食べることにする。娘は餅いりのそばを写真に撮って友達に送信。私はパドックの写真を撮ってメールを送信した。食べ終わってスタンド内をうろろしていたら、レースが始まったのでテレビ画面で観戦した。一番人気のドリーミールペガサスはゴール前で差される。馬券は獲ったものの、トリガミ。コーヒーを買って、スタンドに出ると、運よくコーナーよりの座席が空いていた。

アルゼンチン共和国杯は朝、パソコンから馬券を購入していたので、ゆつくりレースを観戦することにする。娘は携帯をピコピコやりながら、コーヒーを飲んでいたが、突然、「あれ？ トウカイトリック出てなかった？」と、大型ビジョンに映し出されている出馬表をみていう。

「でてるはずだよ。あれは最終レース。なんで？」

「友達が応援してるんだって。あと、スクリーンヒーローも」

「へえ……」

私は話半分で、出馬表に『いつかできる子』ムラマサノオートーの名前を見つけてしまい、携帯で十二レースの出馬表を確かめる。まったく、新聞がないと不便で仕方ない。

ファンファーレを聞いて、ゲートが開き、目の前を馬群が走り去っていく。ドドドドド、という地響きを聞く。

「やっぱり、蹄の音を聞くといいよね」

ゴールの写真を撮ろうと、カメラを構えていた娘も頷いた。

二歳のレースで、

「あんな名前の馬絶対来ないよ」

と娘が断言し、馬券を切ったらまんまと一着でゴールという、私たちにとっては因縁のプリキュアちゃんの前を飛ばす。鞍上は私の大好きだったローレルアンジユの主戦石神騎手。ちよっとだけ、

「まさかな」

と頭をよぎったものの買わなかった。それが前で粘っている。

「残っちゃうんじゃないの？」

私はトウシヨウシロツコとダンスアジヨイから行っているの、このままの体制ではどう考えても馬券にならない。それならいっそ、

「残っちゃえ！」

と心の中で願った。見せ場をたつぷりとつくつての四着。よくがんばった。

十二レースは、二頭の軸を最初、一、二着馬にしていたのに、パドック診断で変更して、見事縦目と玉砕した。それでも、いやと、私たちは三階のバルコニーに出た。ここからは、パドックがよく見渡せる。結構穴場だ。

最終レースが終わったパドックには、たくさんの人がつめかけていた。第二回ジョッキーマスターズ。実は私たちもこれが目当てでやってきていた。

## 夜の東京競馬場

泣き出しそうだった空は、このレースのためにか何とかこらえていた。薄曇りの中、日も傾き、暗くなったパドックには八頭の馬が周回している。ゼッケンには馬の名前ではなく、騎乗する騎手の名前が入っている。三階から見下ろすパドック際には、メインレースと変わらないほどの人がいた。

往年の名ジョッキーが入場してくると、一斉に拍手が沸き起こった。普段レースに出ていない馬たちは驚き、横つ飛びに飛び跳ねる。一番現役にちかく、若い松永幹夫騎手から、一人一人インタビュールが始まると、そのたびに拍手が起こり馬が驚くので、司会者から「控えてください」との声まであがるほどだった。

娘は携帯電話のカメラで、並んだ騎手の写真を撮っていた。

「小さくて、可愛い……でも何言ってるか聞き取れない」

そう笑いながらいった騎手は、地方競馬の宝、「鉄人」佐々木竹見騎手で、六十七歳とは思えないほど豊饒としていて、体重も五十二キロときつちりとした身体をされていた。たかれたフラッシュは誰よりも多かった。娘のお目当ての、岡部幸雄騎手は、今回の馬の調教も担当されたという。こちらでも現役時代と変わらない感じだった。

燕尾服を着て、とまれの号令をかけたのは柴田善臣騎手であったり、誘導馬に騎乗しているのが西浦調教師であったり、それが紹介されるたびに笑いと拍手が巻き起こっていた。馬場に入場してからの先導馬には、騎乗停止になっていた横山典弘騎手もあり、持っていた旗を大きく振り回して笑いを誘った。

すっかり暗くなった本馬場は、ライトアップされていて、まるでナイトーを見ているようだ。地方競馬のナイトーにも脚を運んだが、ターフがライトで光っているのはまた違った風情があり、幻想的でさえあった。小島太調教師の務めるスターターはスタート地点では

なく、ウイナーズサークルで旗を振った。G1と同じように手拍子が起こったが、演奏よりもやたらとはよくなるG1の時と違い、観客が演奏にあわせるようにリズムのテンポを落としたのが印象的だった。

レースは、松永騎手の出遅れから始まり、観客席から笑いが起こった。ハナをきって河内騎手が行く。佐々木竹見騎手、岡部騎手が続いていく。三コーナー辺りで馬群が固まるが、その辺りは真っ暗だった。四コーナーを回り直線に向いてからは見ものだった。抜け出したオサリバン騎手をめがけて、河内騎手がターフのよいところを選ぶと、外から佐々木竹見騎手が、最内を岡部騎手が合わせての叩き合い。結局半馬身抜け出している河内騎手の連覇には、場内から大歓声と大きな拍手が起こっていた。私の応援していた南井騎手は、五十八キロまで増えた体重のおかげかしんがりだった。とはいえ、六十二キロになったロバーツ騎手も五着入線とはたいしたものだと思う。馬が無事かどうかは少し心配だけれど……全頭がターフの上を帰ってくると、また大きな拍手が沸き起こった。

検量室の映像では、みんな息が切れているのに、岡部騎手だけは平然としていたのが印象的だった。レース後のインタビューでは、ロバーツ騎手の、

「やっぱり、東京競馬場の直線は長かった」というのが印象的だった。

表彰式を見るためにバルコニーに戻ると、パドックが見事にライトアップされていた。再び騎手が登場して整列した写真を撮った。光る電光掲示板の後ろには庭園の木々。灯籠のようなライトが照らし出すパドックのあちら側。遠くに見える二棟のマンションの窓灯。切り取られた空間が、とても美しかった。

(壁紙にしよう)

そう思っている横で、娘も一心に写真を撮っていた。

上位の三人の騎手には特製の鞭が贈呈されるという。

「もう、いらんやろ?」

と話していたら、それぞれ金銀銅の鞭であった。

その後に行われるオークションは見ないことにして、二人で駅までの道を歩いた。いつもと違って、人影はまばらだった。計算してみると、今日騎乗した日本のマスターズだけで、通算勝鞍は一五、八一二にもものぼる。ある意味、トップレースなわけだ。第一回、第二回と見られたことは、とてもラッキーだと思う。第三回も是非開催して欲しいと思う。

バスを待つ間、前に並んでいた三人のオジ様たちが、

「重馬場だったら、また違ったよな」

と展開していた。娘は小さな声で、

「だったら」

と言って笑っていた。私は昨日の嫌な気持ちを払拭していることに気がついて、一緒にちよつとだけ笑った。

## 女王を目指せ

ダイワスカーレットとウオッカが牡馬との路線へ進み、女王杯は少々手薄になるのではないかと思っていたが、なかなか。三歳勢がずらりと顔を揃えている。そういえば、ポルトフィーノを除いては牝馬クラシック路線を歩んだ乙女たちはいたって順調にきている。無事これ名馬。

カワカミプリンセスも牡馬との路線へ進んでも、十分に戦えると思うのだけれど、やはりこのレースは、二年前に降着となった因縁のレース。しっかり押さえておきたいだろう。ということは、負けないということか。鞍上が本田優騎手であったとしたら、絶対に負けないだろう。けれど、ちょっと単勝馬券が売れすぎなのが気になる……個人的には応援したい。金鯱賞の走りは見事だった。

昨日、  
「レインダンスが本命なんだけど、レインの癖に重馬場が苦手だからなあ」

とぼやくおじ様に見せてもらったスポーツ新聞でも、本命カワカミプリンセス、対抗ベツラレイアとなっていた。概ねそういう予想なのだろう。しかし、まだデータがそろってはいないので、確定ではないのだけれど、前日の時点での私の表計算予想ではベツラレイアは四番手にとどまる。その間にレジネッタとレインダンスが挟まるのである。そして続くのは、ムードインディゴ、エフティマイア。秋の狙い目、ダンスインザダーク産駒は両馬とも入線というところだ。

しかし、このG1という輝かしい舞台に、武幸四郎騎手は三頭ものお手馬がいる。にもかかわらず、今のところ一番人気薄のレインダンスに騎乗。個人的にはそのほうが力を出し切れるのではないかと思うけれど、ちょっとせつない。私自身、緊張に弱いほうなので、まるで自分のことのようにせつない。あれは、なんの映画だったか

な？ たしか『緊張』ではなく『恐怖』についてだったと思うけれど、

「克服しようとしてはいけない。慣れるしかない」

という名台詞を聞いた。なるほど、と思ったものの、実践するのは大変難しい。緊張しているときには、その台詞すら思い出せないくらい舞い上がってることのほうが多い。

最近、競馬をやるようになった女の子から、

「三浦君、よく特集されてますね」

といわれた。早い時期から推奨の騎手として名前を挙げておいたので、ちよつと鼻高々である。そんななか、今年の競馬学校の騎手課程合格者が発表されていた。久しぶりに女の子が入学する。十六歳という年齢をみて、あれ？ と思い、娘に聞いてみたところ、多分昨年一緒に受験した女の子だという。各競馬場の芝の長さについて語っていて、娘はぼんやり聞いていたと、去年の受験のあと聞いたのを覚えている。

そもそも、騎手学校は男女別ではない。体力的に考えると、もちろん男子が有利になる。その難関を突破した彼女のこの一年の努力は並大抵のものではなかっただろう。一年前、一緒に受験した二人の女の子は、片や、不合格に涙し、リベンジを誓い人生の美しい時間をそのために費やし、それを達成した。親のたつての願いで受けたもう片方は、不合格に安堵し普通の高校に進学。ろくに勉強もせず、携帯電話と夜更かしに人生の美しい時間を無駄に（私から見ればムダに）垂れ流している。十八歳での合格者もいたので、来年辺り、もう一度やってみないかとそそのかしてみようとは思っけれど、本人にやる気がないなら仕方がない。それに前回以上に減量に苦しむのは明らかだ。

とにかく、合格した桃子ちゃんには心からのお祝いと、エールを送りたい。厳しいことも多いだろうけれど、頑張つて欲しい。そしていつか、エリザベス女王杯を制覇し、あらゆる意味での女王に上り詰めて……なんてことも勝手に妄想。それでも是非、女王を目指

してくだわい。



馬友の一人は、関西でのレースの時、関東の騎手の評価をものすごく下げることになっているという。それほど癖のあるコースだというのだ。私は、どのレースでも関西の騎手の評価を少しだけあげている。やはり、リーディングが示すとおり関西の騎手のほうが技術的に高い気がする。三浦騎手が関西所属だったら今ほど勝ち星が挙げられているかは疑問だと思う。

その馬友がもう一つ、関西のレースにおいて重要視しているのはオッズである。関東のレースの際は騎手や馬の人気でオッズが先行するが、関西ではシビアに能力が反映するというのだ。まあ、いくらお遊びでも儲けからなきゃ、という関西人気質はわかる。もう関西を離れてほしいぶ立つけれど、私の中にも根強く残っている。

エリザベスの一二着馬はどちらも武幸四郎騎手のお手馬だった。今回そのような馬を探してみると、ローレルゲレイロとコンゴウリキシオーが藤田騎手のお手馬で乗り替わりである。

「この二頭が着たら三連単はミリオン……」  
などと、夢を馳せる。

関係ないのだけれど、『ミシユラン東京』が発表された。東京郊外に住んでいる私としてはかなり不服である。ここでいう『東京』は首都圏の『東京』である。東京競馬場は二十三区内ではなく、多摩地区と呼ばれる東京都府中市にある。だから私にとって『東京』というくりの中には多摩地区も入っているのだ。

「偏見だ！」  
といったら、

「あなただって、『関西は大阪、京都、神戸、広げても奈良まで』  
っていつてるじゃない」

と母に突っ込まれてしまった。そうなのだけれど、京都競馬場も阪神競馬場（宝塚は神戸に含む）も入っているからよいではないか。

ああ、ミシユランの話なんか書いてしまった。これでフランス出身のルメール騎手は外せない……私が『六週連続のG1ゲット』は夢のような話だけれど、ルメール騎手の『二週連続G1ゲット』は

ありえそうな話だ。

なんだかんだと夢を見ても、可能性が多すぎて、結局は前日に出したデータで馬券を買うのであろう。人生のものさしの優先度が「好き嫌い」よりも「損得」が先の庶民の悲しい性だ。ここは一発、大きな馬券を当てて、ジャパンカップには好き嫌いだけの馬券を

……

## ジャパンカップ

ああ、年末かあ……

ジャパンカップの時期になるとそう思うのは、ジャパンカップをリアルタイムで見えていないことが多いからだ。たいてい前日飲み過ぎて、やつのことで起きだしたときには勝利ジョッキーインタビューが始まっているというパターンを何度も経験しているからに他ならない。

マイルチャンピオンシップは、前回書いたとおり、すんでのところでデータで算出した馬上位六頭と、そこからは漏れていたけれどファイニングレインでの勝負としたが、点数を減らすため、スズカフエニックスを絡めての馬券とし、まんまと縦目という憂き目にあつた。このままでは来年は馬券はお休みしなくてはいけない羽目になる。

しかし、武豊騎手は今年についていないなあ、という印象が深い。いくらアンチ武豊でもこうも不運が重なると気の毒になってしまう。ご自身のホームページでは年末には乗りたいと語られていたが、最後にもっと酷い目に合うなんてことにならなければ、と無用な心配をしてしまうほどである。

その不運のおかげでサムソン君は久々の石橋守騎手とのコンビだ。叩上げ、地味なコンビの人気は意外に高く、馬友からの情報ではあるホームページではお祭り騒ぎだったという。急な乗り替りにも関わらず、前売りの単勝馬券の売れ行きもその人気の現れであろう。

「なにからいくんですか？」

最近競馬を始めた女の子に聞かれて、すかさず、

「ウオツカ」

と答えたものの、現段階でのデータトップはディープスカイである。もちろん、まだウオツカ、オウケンブルースリ、サムソン君、ペイパルブルあたりまでは、入れ替わりの余地がある。

そういえば、この前来ていたお客様は松岡正海騎手によく似ていた。大西元騎手に似ているお客様にも会ったことがある。お二人とも可愛らしい顔をしていた。個人的には勝浦騎手や川田将雅騎手の顔が好みなので、『デルタブルー』ス騎乗将雅』を見たかったのだが……残念である。

なんていうふうに、完全に競争から逃げ出したくなるくらい難解だし、今年の秋は例年に比べてついていないというか、波風がないだいたい、この時期に何かしら大きな馬券をがつり当てて、年間の終始にめどを立てるのだが、そのなにかしらの大きな馬券を獲る予感がまったくしないのだ。他のエッセイにも書いたが、『イメー』ジできないものは、現実化しない』という持論なのでなんとなくパツとしない気分なのである。

ジャパンカップの勝馬になると、その馬の名前は保護されることになるので今後その馬名の馬は出てこなくなる。こここのところ、牝馬の優勝が続いているし、

「こうなればやはりウオツカで永久欠番の名前にしてしまえ」というのが個人的最終見解で、実はそうなって欲しいと願っているけれどまた今このついていない私が指名してそれが原因で負けたなんてことになるのは嫌だなあ、とも思う。

幸運にも私のお客様二名は現場で参戦されるらしい。ウオツカと将雅を間近で見たいけれど、レースに間に合うように起きられるかどうか、まず鍵であるのであまり欲はかかないでおくことにする。なんだが、下向きなエッセイになってしまったが、それは執筆している本日が天中殺であるだけでまさかの『くすぶり』ではないと信じていたい。だけど、最近めげること多いんだよなあ……ああ、蹄の音を近くで聞きたい。

## 師走

六連勝だの、五連勝だの夢物語を語っている間に、気がつけばもう十二月で週末すら後四回しかなくなっていた。

競馬のバイオリズムというか、人生のバイオリズムにおいて、わたくし、「落ちる前となんだか寂しくなっちゃったときには占いはしごする」という悪癖があるらしく、思いのほか暇な仕事にわいわいとその悪癖に興じていた。そのひとつが、携帯電話とパソコンをハッキングされてどこかに監視カメラが着いているのではないかというほど性格や容姿まで当たっていて怖くなった。それによると、来年の五月に子宝に恵まれ、六月に結婚。運命の人に出会うのは二〇一五年（すでに四十二歳ではないか！）という、どう考えても順番が間違っている運命らしい。しかし、この十二月にもすばらしい出会いがあるというので期待している。なんていうふうに神頼みに転じてしまい、おかしいかな、四柱推命では「大勝負！」だったはずのジャパンカップは見事に外し、遊びのつもりで買った三連単が縦目というなんと切ない有様だった。

気がつけば、一年にわたってお送りする競馬のエッセイだったが、ほとんど愚痴やら予想やらになってしまっている。しかも、坊主も走る師走。夜の蝶は午前一時からの記憶を失うかき入れ時である。これから実りのあるエッセイを書けるという自信がない。というより、書けないくらい忙しくなってくれないと困るのであるが。二〇〇九年版を書くかどうかどうしようか検討中である。

今年の一月にあったことについて皆様は思い出せるだろうか。私は平素のことはまったく思い出せない。確かまだ三十五歳であった、というくらいであろうか。だが、金杯で負けたあの気持ちは、毎年のことなのに今年の悔しさをきちんと思い出せるのである。有馬記念のマツリダゴッホの激走にやられたまま、「このままでは馬券を買えなくなってしまう」と焦りに焦って検討したものの、また負債

を増やしたあの恐ろしい感覚は約一年たとうとも脳裏にはつきり  
あるのである。

「このままでは真のオッサンになってしまっ」

という、ありがたくないのだけれど、予感に襲われている。会話の  
すべてが、

「それいつだっけ？」

「ウオツカがダービー獲った月だよ」

「ああ、あんときか……」

なんて……いつまでも色気だけは忘れたくないのだが、そんな会話  
もちよつと魅力的と思っている自分が怖い。

気を取り直してジャパンカップダートへと思ったらなんと四十頭  
以上も登録があり、検討は先送り。しかしこのエッセイにそのレー  
スではなく登場させた馬が結構来ているのでヤマトマリオンちゃん  
あたりを押しとおこうかと思う。今までの東京競馬場で行われるレ  
ースと違い、阪神競馬場の千八百メートルとなるあたり、梓順の有  
利不利にも大いに注目すべきであろう。

有馬記念のファン投票も済ませたのだが、どうにも関西馬ばかり  
になってしまった。去年の今頃すっかり稼がせてくれたキャプテン  
トゥーレは馬名の一覧にも名前すら挙がっていなかった。早く復帰  
して欲しいものだ。ある馬友は、

「ウオツカは俺の彼女。あのもろさも素敵。スカーレットは強すぎ  
る」

なんてのたまっているが、私は、

「その器の大きさに日本のレースがついてきていない憧れの人、デ  
ルタブルース」

に一票を投じた。デルタのために、是非東京競馬場二周のレースを、  
にも一票を投じたい。

さて、占いが本当に当たるとすれば今月、どんなすばらしい出会  
いに恵まれるのか。鹿毛のステイヤーか、青毛の流星が美しい若人  
か、はたまた今までは近すぎて目に留まっていなかった往年の実力

馬か。パドックのこちら側でもいい出会いに恵まれれば、これ幸いであるが、占いには、

「ギャンブルには絶対に手をだしてはいけません。貴方のチャレンジ精神は、ビジネスに注がれるべきものであって、ギャンブルに使うためのものではありません」

と厳しく書かれていた。競馬はロマンであることをここに改めて記しておこうと思う。

## 夏のツケ

この一週間というもの、あまりにもひどい毎日で、

「もう二度と来るもんか！」

と宣言して仕事場から荷物を持って帰ったり（翌日出勤しました）、  
久々にあんまり頭に来て酒の場面から、

「なんだか気分の悪いお酒だから、お先に失礼するわあ」

なんてあくまでもお淑やかに逃げ出したり（昔はよくやったなあ……）  
……していたら、なんだかほとんど記憶がない。おいしいお酒ばかり  
飲んでいるので脳みそがアルコール漬けになっているのとは違っ  
ただけ……

とりあえず、多少のストレス解消をしてちよつとは落ち着いたの  
で、久しぶりに土曜日の中山全レース予想するか、と意気込んだも  
の、結局第四レースから第七レースまでは端折ってしまい、ハレ  
ース分と明日のG1の予想のみで朝を迎えてしまった。しかも私の  
予想、ある大手のサイトとかなり被っている。わざわざパソコンに  
ちまちまと入力してまで導き出す答えなのであるうか、となんだか  
切なくなってしまった。

まあ、土曜日の戦績は後日発表するとして、新馬ちゃんたちのG  
1がはじまったわけですが……ここに来て夏競馬をサボったツケが  
あらわれるわけですな。正直、名前を見ても全くレースが浮かばな  
い。過去のレース情報を見て、

「アストンマーチャンが勝ったのはもう二年前かあ……三年前が因  
縁のプリキュアちゃん……」

などと現実逃避に走り、ただひたすらデータを入力して順位をはじ  
き出すというロマンではない予想になってしまった。

「競馬はやっぱり血統だよ」

なんて初心者の方に偉そうに語ってしまったので、兄弟馬なんかを  
ちらほら見てみると、ブエナビスタはそれは素晴らしくアドマイヤ

オーラの妹だし、母はビワハイジ。他はチャームポットがタマモホツトプレイの妹である以外、あんまり記憶にある馬の妹たちはいなかった。シゲルキリガミネの兄弟はすごくたくさんいて、『タイムフェアレディ』やら、『シンデレラソング』やら、『タイムゴーズバイ』やらなんだかちよつと素敵な名前じゃないって馬が多いのだけれどどうにも買い目がない。現在私の本命はデグラータニアである。栃木県産の関西馬で名前の由来は『神の恩寵によって』というラテン語らしい。名前が可愛いので追いかけることに決定した。

有馬記念のファン投票の結果を見た。ウオツカとダイワスカールツトの二強という図式が明らかになったものだと思う。我が君、デルタブルース君も二十九位にランクインしてよかった。

年末といえば後もう一つ、ワールドスパージョッキーズシリーズがあるけれど、今回は武豊騎手は怪我のためでられないのだろう。毎年参加している気がするのは私だけだろうか。地方ジョッキータイトもよくあるシリーズなので注目したいと思ったら、日本代表七名中、生粋の中央ジョッキータイトは後藤騎手と福永騎手のふたりだけ……小牧騎手も、内田騎手も、安藤勝己騎手も、岩田騎手もみんな元地方ジョッキータイトではないか。中央競馬から競馬に入っている私には少々寂しい気分になる。海外の騎手では全く競馬界とつながりのなかった苦勞人メンディザバル騎手に注目したい。

はてさて押し迫ってまいりましたが、素敵な有馬記念が迎えらるかどうか。個人的には、せめて競馬くらいは正直な姿のまま私の人生の側についてよね、って思いであります。

## 有馬記念

クリスマス、名前入りのソムリエナイフを頂いて調子に乗って三時間で二本ワインを開け、その後他の人と有馬記念の話をして、エイシンデピュティが絶対来ると言い張っていた。が、すでに枠順も発表され、エイシンデピュティの名前はなく、その話をした人と話した記憶もないという失態をやらかした。なんとか家にたどりついたものの、一眠りして起きてみたら、食べた覚えのない弁当のパックがテーブルの上にあるなんてことは日常茶飯事。大体年末なんてこんなもんである。

そして、押し迫って今年の競馬成績をみて青くなり、「なんとかグランプリで帳尻あわせを……」

と思つて傷口を広げるのも毎年のこと。有馬記念なんてここ十年で一度だけ、枠連を獲っただけ。しかも前年、中山まで行つたはいいが、全く見えず、馬券も当たらずおけらで帰ってきた年だった。有馬記念なんて当たる気がしなかつたので、妹の神のお告げ馬券で一枠からの枠連総流しが引つかり、頑張ったタップダンスシチーのお陰で五千円の馬券をゲットしたという、全く持つて棚ボタ馬券だった。

だいたい、G1なんてそこに出ているだけで何がきたっておかしくないのだ。という観念から、有馬記念は好きな馬から買うというスタンスがいつの間にか出来上がっていて、この四年はディーピンパクトがいろいろ何がいろいろが、デルタブルースちゃんからいつて共倒れという構図も出来上がっていた。今年はいとしのデルタクンが出走しないので、データなどから勝ちにいつてみるかと思う。もちろん、いつも彼を信じて疑わず買ってきたのには違いないのだけれど。

○六年のディーピンパクト、ポップロックという馬券を獲つた馬友の格言。

「外国人騎手は大きなレースに強い。だって賞金稼ぎに来てるんだから」

なるほど。この六年間、三着以内に必ず海外ジョッキーの名前があるというデータにも符合する。もちろんいい馬に乗っているということもある。とりあえず、これ採用。

四歳馬が優勢なのだが、三歳馬が勝った年というのはジャパンカップでも三歳が勝っている（〇二年はジャパンカップが中山開催なので別として）。今年はスクリーンヒーローがジャパンカップを勝っているから、三歳馬は二着以降としておこう。

そしてやっぱり内枠有利。六枠より外の馬の連対はぶつちぎって勝ったクリスエスだけ。脚質も先行して抜け出すというのがセオリーのようなのだ。

「スカレットは強いと思うけど、外枠だったら買わないなあ」と馬友と話していたらまんまと外枠に入ってしまったね、となった。しかも女子も苦戦である。

結果、なるべく内にいる四歳馬でそこそこ前にいく、海外の騎手ということでアルナスラインかなあというあたりである。でもなんだかしっくりこない。ううむ。久しぶりに獲りたいなあという気持ちが強いので、結局オッズに負けて外枠の有力どころからいつてしまふのだろうか。ああ……

ちなみに先週は愛知杯、セラフィッククロンプが、左回り、距離適正、平坦大好きと見て本命だったものの二着を予想できず、獲り逃すというなんとも悔しいところで、もちろんG1六連勝なんて残すところあと一戦になってもいまだひとつも獲れずという、絵に描いたようなギャンブラーの年末となっている。

来年はどんなスタンスで競馬と関わるうか。鬼に笑われても、有馬記念の前に決めておかなければ、また金杯で惨敗を繰り返す。次回で一旦最終回としようと思っっているけれど、

「どうでもいいけど、全体的にネガティブ」

と、この連載を見てくれている馬友にいわれないような有馬記念回

願を書けるようにしたいものである。

そして、続いていく

有馬記念。

あんな馬券獲れないよね、と回りでは言っていたが、実は私、スカーレット、マツリダゴツホ、アドマイヤモナークの三連単ボックスを持っていた。なので、三着がゴツホ君であれば獲っていたのである。しかも、モナークの単勝も買っていた。直線はヒートアップした。

「将雅！」

と叫び続けていた。しかし、これはデータからの馬券ではない。アドマイヤモナークが優勝する夢を見たのだ。ただそれだけ。一生懸命予想した馬券は外し、夢で見た馬券のほうがちかいなんでなんだか切ない。

さて、結局なんの馬券も獲れないまま、有馬記念も終わった。ついでに大井の東京大賞典も買ってみたけれど一着、二着、五着という結果に終わった。今年の馬券は打ち収めである。

年間、的中率は二十パーセント、回収率は七十パーセントという結果。テラセンが二十五パーセントと考えれば、五パーセントの負けである。三割はJRAに貯金したことになるのだが、これくらいなら趣味の範囲といえるだろう、ということである。来年も馬券を買ってよし、と自分にOKを出す。木幡騎手、福永騎手、そして川田将雅騎手、昨年に引き続き私の財布を潤していただき、ありがとうございました。

一年間、お付き合いいただいたこのエッセイ。十四年の競馬人生を振り返るなんて銘打っておきながら、まるでブログのように、飲んだ酒の量であるとか、日ごろの愚痴であるとか、的中もしい予想であるとかを繰り返してしまっただけだ。

「でもエッセイだからいいよね？」

なんていうのが、言い訳であります。来年はどのようなスタンスで競馬に取り組むか、まだ結局未定でエッセイも、二〇〇九年版を書くべきか。それぞれのレースの蘊蓄なんてものは、ウェブで検索すれば一発で出てくるものだし、今回のような内容であるのならそれこそ、

「ブログで書けい！」

とお叱りを受けてしまつかもしれない。

それでもやっぱり、私は競馬が好きで書くことも好き。できれば、現役の騎手さんなんかから、

「このエッセイに名前が出ると、勝てなくなるので書かないください」

というようなメールでももらえればしめしめなのですが。

年が明ければ、四日から中山金杯をスタートにまた競馬が始まる。ターフを去っていく人や馬、そして新たにやってくる人と馬。未来へその血を繋げるために、ゴールを真つ先に駆け抜けるその美しい姿は、人々を魅了する。来年はどの馬が、そして誰が私を魅了してくれるのだろうか。そして来年版こそは誰かを魅了することができのだろうか。って結局書くんですか、私。

そして、続いていく(後書き)

大変長々と、お付き合いいただきありがとうございます。これからも多分、書いてしまうと思います。また興味をもたれたらお付き合ってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3587d/>

---

パドックのこちら側

2010年10月8日14時39分発行